
ルードシアの守り人～黒?～

九郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルードシアの守り人～黒？～

【NZコード】

N0434X

【作者名】

九郎

【あらすじ】

赤茶色の頭巾を被り、馬を駆つて丘を駆け降りるその人が叫んだ。

「突破する！」

走り出すその先には

数百ほどの魔人達が、狂剣や狂光を帶びた武器を向け、城につづく一本の道を塞ぎ向かってきた。

その人が背負っていた刀を引き抜くと「念」を込めた。

刀身に赤黒い雷を帯び、その声が天の雷神を迎えると魔人の群衆に解き放つた。

それは弧を描く幾つもの剣波が狙いを絞ると全てを切り裂いた。

序章・ルードシア王国

序章・ルードシア王国

世界は今、主に三つの種族から成っている。
魔人、獣人、そして人間。

過去から現在に至るまでに多くの土地や種族争いの絶えない日々が
続いていた。

彼らがようやく個々の国を持ち敵対する種族に対する知識や技術の
限りを尽くし、

ようやく国の平定を得る事のできた国があらわれ始めた。
しかし巨大な大陸の中でそれはまだほんの一握りに過ぎなかつた。
その中の一つにルードシア王国があつた・・・

ルードシア王国は四方を海に囲まれ、唯一隣国のミンに通ずる陸地
が伸びていたが、
その陸地もまた二つの巨大な山脈が国境を挟むように伸びており、
ルードシア側の山脈は遠くハルディスの国まで続いていた。
山の狩人でさえルードシアからミンの国に入るには、ゆうに10日
を要した。

ルードシアの国益を産出していたのは主に漁業と畜産ではあつたが、
温暖な気候に恵まれたその地は野菜や果物も多く取れた。

長い間、戦も無く平和な生活を送るルードシアに、馬に乗った一人
の旅人が辿りついた。

「ふう～」

三日前に食事をしてから今日まで、まともな物を口にしていない。
喉の渇きと空腹を抑えながら夕日に消えかかる城門を目指した。
日が暮れた頃に城門に着くと、城内に入るため列に並んだ。

よつやく兵に呼ばれると馬の手綱を引き、城内に入るべく進んだ。

「お兄さん、1000リリーだよ」

門番がニヤニヤと近づいて来ると手を出してきて言った。

その門番の身なりは御世辞にも立派な鎧ではなく、どちらかといえばあり合わせのモノで身を包み、護衛用の銃もだいぶ年季の入った代物である。

髭を蓄えたその顔は良く口に焼けて老けた感じもあるが、肌の艶から年の頃は恐らく30歳前後という感じがした。

【城門で言われた1000リリーはその国で働く人達のおよそ一日分の手当であった】

どの国も入国するにはそれなりに金品を差し出すが、国によつてはそのまま通れる国もある。

それでも一応はそれなりの手続きをするのだが、

ここまではあからさまに堂々と要求していくのはちょっとと面喰つた。一通り回りを見ると一応はそういう『決まり』になつてている様子が見てとれた。

仕方なく馬に積んである荷の中からおもむろに、何本かあるうちの銃の一つを取り出して聞いてみた。

「これでいいかい？ 手持ちが無いんだ」

門番は少しの間考えたようだったが、銃を良く見るつゝに笑みを浮かべた。

「んつ、まあしうがないな。いいよ通りな（なるほど。このテの物はどうやら歓迎されるらしい）

活氣のある大通りを進み、なだらかな坂道を登りながら左右に分かれる道を左に進んだ。

道が少し狭くなってきた所に食事ができそうな店を見つけると、馬から降りて馬止めに手綱を掛けた。

(いい匂いがする・・)

夕食の時刻ともあって、中から食事を楽しむ声が聞こえてきた。

簡素なドアを開けて店に入ると、客が数人。

常連だろうか、テーブルを囲み食事をしていた。

カウンターには五つの椅子があり、そこには誰も座っていなかつた。カウンター越しの若い女性に近づいて声をかけた。

「あの、すいませんが食事出来ますか?」

その若い女性は一瞬、身なりを確認すると笑顔で答えた。

「はい出来ますよ。メニューは無いから適当になりますけど、それで良ければ」

「そうですか、ではそれでお願いします」

カウンターの真ん中に座ると食器を片づけながら女性が聞いてきた。

「お客様、旅の人ですか。どちらから?」

「はい、ちょっと人を探しながらあちこち」

「そうですか、見つかるといいですね」

何気ない会話をしていると裏から声がした。

「ライム～テーブルの料理上がったよ～」

「は～い、お客様少し待つていてくださいね」

そう言つとコップに水を注いでから裏に行つた。

いい匂いにつられて腹の虫が鳴き出した頃に

「お待たせ、やっと落ち着いたよ～」

いいながら恰幅のよい女性が料理を運んできた。

「あら、見ない顔だね。旅の人かい?」

そこにライムが裏から料理を運んで来ると笑みを浮かべて言った。

「いらっしゃる私の母でマリーっていうの。母さんも私と同じこと聞いているわ」

マリーは、そうだったのかいと、笑つて返した。

「ハハ、この辺りで人を探していく」

すまなそうな返事をすると

「それもさつき聞いたわ」

それはさておき久しぶりの、まとも、な食事にスプーンを取った。

「いただきます！」

おいしそうな豆と鶏肉のスープそれとパン。

スープを一口飲んだ。

「おいしいですね」

自然と笑みがこぼれた。

それを見ていたマリーが微笑みながら聞いた。

「お客さんこれからどちらへ。北の方にでも行くのかい？」

「そうですね、とりあえずこの街に居なければ」

「そういうえば最近いい話は聞かないね。どこかで戦が始まつたって聞いたよ。

まあ商売人にはいい話だろうけど」

「そうですか。この辺りは大丈夫ですか？」

軽く微笑むとマリーは得意そうに答えた。

「ここにはルードシア王家の一族が代々守つてきた国だからね。

昔から争いの無い平和な国だよ。
回りは湖に囲まれているし、それに『守護神様』とやらが守つてくれてているつて話だよ」

「守護神様ですか、それは頼もしいですね」

マリーは満面の笑みを浮かべて答えた。

そこにテーブルのお客が呼んだ。

「マリー 水を頼むよ」

「はいよ」

コップに水を注いでいるマリーに聞いた。

「すいません、しばらくこの辺りに滞在したいのですが近くに宿はありませんか」

「ああそんな事だつたらうちでよければ泊つておくれ。

部屋は空いているから。

たいしたものは無いけど飯はうまいよ」

いい匂いで目が覚めた。

外では鬼役の男の子が必死に坂を駆け上がりっている。

部屋から出てきしむ階段を下りると、昨日のカウンターに食事の準備ができていた。

「おはようございます」

「ああオラルさんおはよう。

そろそろ起きる時間だと思ってね、食事の支度は出来ているよ。食べたらあとは娘がやるから」

そう言いながらエプロンを外した。

「何か急ぎですか?」

「ええ。今日は姫様との恒例の行事で、そのお手伝いだよ」

「恒例の行事?」

「ハイキング。まあ平和な証拠かな」

そう言い残して足早に出て行つた。

オラルは食事を終えると食器を洗い場に運んだ。そこにライムが荷物を抱えて帰つて來た。

「あらすいません、母は?」

「なにか急いで出掛けましたけど」

「そういえば今日は姫様の所ね」

「親しいのですか」

「家族みたいに接していますよ」

食事を終えたオラルは荷を抱えた。

(さてと何処から探そうか。とりあえずアイツの所にでも行ってみる事にするか)

荷を馬に乗せると昨日の城門に向かつた。

小麦の袋を抱えた子供がふらふらと前を確認しながらジグザグに進む。

あやうく野菜を積んだ荷車にぶつかりそうになる。しかし手慣れた様子でかき分けていく。

城門に近づくと昨日銃を渡した門番が来城者に話しかけているのを見た。

昨日は暗くてはっきりとは見えなかつたが
意外にもガツシリとした体形でることに気づいた。
彼はお金を数えると手を振つて見送つた。

「おはよう、それ良い銃だね」

オラルは馬に乗せてある荷を軽く叩きながら聞いた。
「この荷を換金できるところ知らないかい？」

男は顎をさすつた。

「ああ、知つているよ。でもちょっとばかりなあ」

横目で荷を見ている。

どうやら門番という仕事の味を占めていたらしかつた。
「案内してくれたら一つ譲るよ」

荷物を縛り直した。

「そこなくつちや、ついてきなよ」

そう言うと勝手に馬の手綱を引いていった。

「氣前のいい兄さん名前はなんて言うんだい」

「ああ、オラルって名だ」

「どうかオラルさん。

俺はサルージつてんだ、よろしくな。

ところでその荷物どこで手に入れたんだい、
いい品物が揃つていそうだけど

ほほを緩ませ荷を見た。

「まあね。それより昨晚渡した銃は気に入ってくれたかい」
するとサルージはコートの中に大事そうに抱えている銃をさすつて
言った。

「そりゃあ氣に入つたさあ。持つていたのを今朝、売つちまつたよ。
それにしてもこれは初めて見る銃だ。

こんな立派なものくれるなんて、あんた何者かね。
正直、荷の中身を知りたいくらいだよ」

「まあ俺には必要のないものさ。それよりも旅賃が無くなつてきたから」「そうかい、商売人には見えないが・・訳ありなんだろ、ここはそういう連中がたくさんいるからな」

話をしながらしばらく進むと丘にある一件の家を指した。

「あそここの店だ、俺が話しことく通すよ。そうすりやボラレないですむから、

そのかわりいいところをよろしくな」

サルージは昨日貰つた銃より、それ以上のモノを貰えると信じて疑わなかつた。

この辺りにはめずらしい赤煉瓦で敷地を囲つてある換金屋に入つていつた。

「お~いラリエルじいさん、客人連れてきたぞ」と
すると店の奥から杖を突いたじいさんが出てきた。
すでに80は超えているだろうラリエルが言った。

「なんじゃ、サルージ・ジエンタか。

御客人、こいつに騙されたんじやないのかい

ラリエルは一人を見ると引き返していつた。

「またた、とんでもねえ。

こちらの兄さんは今までとは訳が違う、まあ見てやつてくれよ

オラルは一人を尻目に荷を抱えると一際大きいテーブルに、ドサツ」と置いた。

「これ全て旅賃に替えるのですが

「ひや~これは大したもんだ」

サルージは目を輝かせて言つた。

ラリエルはオラルの顔をジロジロ見ながら一つ一つ確認した。

そのうちの一つの短剣を持ち、窓から入る日に反射した光は天井を

七色に染めた。

「これはどこで手に入れなさつた」

オラルは陶器のティーカップをみながら答えた。

「それは西の大陸で知り合いから頂いたものです」

50センチほどの鈍い銀光を放つ短剣をジッと見つめていたが
オラルに視線を移すと射抜くような眼差しで聞いてきた。

「これを頂いたと」

「何だじいさん知っているのか」サルージが口を挟んだ。

「いや、いい品だ。そうだな全部で10万リリーでどうだい」

「10万か。安いのか高いのか分からんな」サルージが代わりに答えた。

【サルージの以前持っていた銃は一万リリーほどだった。10万は平均三月分の生活費つてところだ。
並みの商人ならその5倍以上の換金するのが通例ではあつた。】

「どうじゅ若いの、やめとくかい？」
その短剣を持ちながら聞いた。

「いえ、それでいいです」

するとサルージは納得がいかなかつたらしく一人の間に割つて入つた。

「ちょっと待つた、それだと俺の取り分がねえ」

「サルージ、そこから2万を取ればいい」そう言ってサルージの肩をたたいた。

「あんた、こいつに2万もやるのか。人がいいのかそれとも」
金を数えていたラリエルはサルージに2万を渡した。

「話はついた、オラルさん感謝するよ」

オラルは残りの金を懐にしまうと軽く礼を言つて外に出た。

「お客人、これからどこへ行かれるのじや」

帰り支度をしているオラルのもとへ近づいた。

「人を探していますので。

でも北には行かないほうがいいって宿のマリーさんが言つていました。何だか危ないらしくて」

「そうか、西の大陸も危険な所じゃと聞いたことがあるのじゃが」「そうですね。私は近づかないよつこしていました・・ではこれで

ラリールじいさんの視線を背に感じつつ

軽くなつた馬を引いて来た道を戻る途中サルージが聞いてきた。
「オラルさん、いやだんな。このあとどうひらく行きますか、なんなら御供しますよ」

『だんな』と、調子よく呼ぶサルージは懐が温かくなつたからなのか、ベストの紐がゆるんでいか見た。

「そうだな、そういうえば腹へつたな」

「分かりました、そういうことなら此の店を知っています。行きましょう」

じんわり汗を感じたころに山脈の始まりの先端近くにある開けた場所に着いた。

「ここです。その階段を上がつたところですよ

そこは小さな丘を利用した開放的な店だった。

上を見ると白い柵に肘をついている男女がグラスを片手に見つめあつてゐる。

「サルージ、そういうえば仕事の途中だったのでは」

「いやいや、たいした仕事じゃないですよ。

門番なんていってもいなくともこの国には大して問題ありませんから気にしなくていいですよ。まあ、いまましゅう

そつと階段を上がつて行つた。

(守護神様とやらのおかげかな)

階段を半分ほど過ぎたときだつた。

近くで狩猟でもしているのだろうか。

今度は森の方に耳を向けると4発聞こえた。

「狩猟にしては撃ちすぎだ」

異変を感じたオラルは階段を下りるとすかさず馬に乗り、銃声のする森に駆け出した。

「だんな、どこへ行くんですか」

サルージの声を聞き流しながら速度を上げた。

遠目に水面が見えるあたりまでくると何やら騒ぎ声や銃声が聞こえる。

道なき森へ馬を進めて近づいた。

どこの兵隊だろうか。数人の女性を囮んで対峙しているがすでに湖を背に逃げ場を失い囮まれている状況だ。

馬を降り気配を殺しながら歩いて近づくと見覚えのある女性がいた。恰幅のいい姿、間違いない。マリーだ。

マリーは槍を構え中心の女性を守っている。

『朝、マリーさんが言っていたあの人が姫様ということか』

20人ほどの賊だろうか。

賊頭と思われる体格のよい男が後方に構え腕組みをして見ている。するとその男が怒鳴った。

「あきらめろ！そんな人数じゃ勝ち目はない、おとなしく渡せばおまえら見逃してやる」

姫の一行は恐らく奇襲に遭つたのだろう。

護衛兵の数人が森や湖に倒れていた。

残りの護衛兵は賊の半分もない。

オラルは馬を降り息を殺すと木の陰に隠れながらマリーのもとへ向かつた。

森と砂浜の切れ目の大木に身を潜め、飛び出す機会を伺いながら賊頭を見ると、

黒い影が、スゥ～ツ、と、背後に付くのを見た。

(あれは誰だ、どうするつもりだ)

賊頭は気づいていない。

ハツとオラルは背後に気配を感じた。

「私が仕掛けたら姫を連れて安全な場所へ」

振り返ると誰もいない。

しかし、すぐに聞き間違いでは無いと確信した。

見るとその影が賊頭の口を塞ぎ、同時に首にナイフを当てていた。

「おい、おとなしく下がれ」

賊が振り返ると賊頭は引き離そと、もがいている。

オラルは木の陰から飛び出し賊の手薄になつてている後方からマリーに近づいた。

「マリーさん大丈夫ですか

「あれ、オラルさんどうして」

「訳は後で、さあ早く」

水辺に沿つて姫の一団を誘導したとき、賊の一人がニヤつき近づいてきた。

「おい、なめてもらつてはこまるな」

賊が一斉に笑いだすと体が突然身震いを始め、全身の筋肉がボコボコと波打ち膨らみ、見る見るうちに見上げるほどの魔人となつた。

侍女が恐怖のあまり叫んだが声にならなかつた。

構えていた兵達が後ずさりをするなか、マリーが叫んだ。

「姫様、大丈夫です。私が御守りします」

オラルは、ふと目を賊頭に向けると先ほどの影はなかつた。やがて賊頭が一団に近づきながら声を張つた。

「こうなつたら容赦しないぞ、全員ひねりつぶす」

魔人たちが姫の一団を囲みながらジリジリと距離を縮めてきた。

「姫に指一本触れさせるな」

隊長は強気であつたが状況を変えることは出来そうにも無かつた。

(魔人か、だがここは仕方ないか)

オラルが兵の前に出ようとした時、空から怒鳴り声が一帯に轟いた。

「おまえら、それはこっちのセリフだあ！」

見ると空に大きな黒い輪ができ、太陽の光を遮り影を落とした。その黒い輪が徐々に中心に集まると魔人の人数と同じ球が弾けた！それは一斉に魔人たちに降りかかり剣を持つた人の姿に変わると魔人たちを切り裂いた。

あつという間の出来事だった。

魔人たちが黒い煙を出しながら蒸発していった。

そして魔人たちを切り裂いた黒い人影は瞬く間に一人の影に戻つた。深呼吸をしたその影は姫の一団を向き一礼すると無言のまま去つて行つた。

「なにが起きたの、助かったの」

身を寄せ合つていた侍女の一人が辺りを見回していた。

「姫様、早く城へ戻りましょう」

姫の気持ちも同じであつたが周囲を確認するとオラルに近づいた。

「あの、助けに来てくれてありがとう」「姫は影の人の仲間だと思っていたらしく、気丈に振る舞いながらも笑みを浮かべていた。

「いえ、何も出来なくて、あの

「さあ、オラルさんも早く」

返事の途中でマリーに急かされた。

城に戻る途中サルージと別れてしまった店の前を通り少し離れた森の中からサルージが現れた。

「だんな、忘れ物ですよ」

サルージは手を振りながらオラルの馬を引いてきた。

「サルージどうして」

「どうしてって、こっちが聞きたいですよ。

急に行っちゃうから、だんなの後ろ追っかけて行つたらこいつだけ戻つて來たので

びっくりしましたよ

「そうか、悪かった」

「ところで何かあつたんですか、あれ、姫様ですよ」

「いや、たまたま会つただけだよ」

「なんだ、そうですか」

日も暮れて一人宿に戻つたオラルはカウンターで食事をしていると、そこに客が入ってきた。

「ここに居りましたか、先ほどはどうも」

ラリエルじいさんだつた。

「あなたに少し聞きたい事がありましてな

「はい」

ラリエルは隣に腰掛けると持つていた包みを開いた。

「この短剣のことなのじやが、本当に譲つてもらつたものですかい」

顔を覗き込むように聞いてきた。

「いや、あの、本当は拾つたものです」

「拾つた、これを。西の国で、ですかい」

「はい。戦やら何やらで、戦場跡を見ていてそこで見つけました」

「ラリエルは少し考えると話はじめた。

「どうか。わしも自慢じやないがこの歳になるまで各國を色々と見て聞いて回ってきたものじや。」

そしてこれが何かもわしは知つとる。

これは西の国のアルセルディムの王が懐刀として持ち歩いていたものじや。

恐らくあんたも聞いたことがあるじやうう、アルセルディムは人の近づける所では無い。

あそこは魔人の国じや。

じゃがなにか激しい戦があつたのじやうう。

しかしどう考へても戦場跡に落ちていたとは到底思えんのじやよ。ましてアルセルディムの王を倒せるものがこの世に存在するなどと。何か知つているのなら少し話してはくれませんかいの」

ラリエルの目は瞬間見せた鋭い目付きとは違つていた。

「そう言われても、そんな物だとは知りませんでした。それもつと高い値がついたのですか」

ラリエルは返つて来た言葉に目をパチパチしてしまつた。

その話をカウンター越しに聞いていたライムが話かけた。

「ラリエルじい、その魔人つて人の姿をしていないかい」

「おおライム、知つとるのか」すかさず聞き返した。

「街の人々が噂を、瞬間姫の御供をしている時にそんな連中に襲われたつて。

護衛の兵もほとんど殺されたつて

「ラリエルは立ち上がるとライムに顔を近づけた。

「それで姫はどうなつた、無事なのかい」

「ええ、誰かに助けられたって聞いたわ。

その人はすぐにどつかいつちゃつたって」

「なんと、この地にまで奴等がきているとは」

ラリエルは頭を抱えながら続けた。

「わしも商売柄、色々と耳にする。

わしの察するにアルセルデイムを始め
他の魔人の国々に何か大変な事態が起き始めているのではないだろうか。

その余波がいたる所で災いをもたらし始めたのではないかと感じる。
この国ルードシアは昔から代々王家が守り、災いの無い平和な国を
維持してきた。

それが今のライムの話を聞くに何かよからぬ事が起ころる気がする。」

言い終えるとゆっくり腰をおろした。

そこへ城からマリーが戻つて来た。

「ただいま。あれ珍しい、ラリエルじいさんじゃないか

「おおマリーよ、しばらくじゃつたな」

「ええ、あらオラルさん大丈夫だつたかい、
助けに来てくれてありがとう姫様がお礼を言つていたわ。
一時はどうなることかと心配したよ」

ラリエルとライムがオラルを見た。

「いえ、マリーさんこそ無事で何よりです。それより何もできなく
て」

「そんな事ないわよ、どれだけ心強かつたか」
ライムが聞いた。

「母さん、毎回何があったの」

昼間の出来事

昼間の出来事

「いの辺りにしましょう」「う

山脈から湖に小川が流れ込む少し手前の所を指差して姫が言った。

馬車から姫、侍女が降り湖を見渡した。

「綺麗ですこと。今日は風もなく穏やかですね」

兵がテントの設置を始めると侍女は食事の準備に取り掛かり始めた。

「あの船、漁をしているのかしら?」

少し沖に停泊している小舟の帆がこぢらを向いていた。

「今日は天気もいいから大漁かもせんね

「きつとそうですよ。なんなら少し分けて頂きますか?」

「そうですね、もし近くに来たら聞いてみましょう」

「姫様、食事の準備が出来ました

湖畔を散策している姫に侍女が近づいて言った。

「ありがとうございます。ではいきましょう」「う

テントではすでに宴の準備が整っていた。

「姫様、いらっしゃうぞ」

準備された椅子に腰かけるとマリーがスープを差し出した。

「姫様、今日はカモのスープです。先ほど隊長さんが仕留めてくれました」

嬉しそうに言つマリーに隊長がカモを持って近くにきた。

「姫様のお好きなカモが捕れました。皆さんのもありますので今日は存分に召し上がって下さい」

「ありがとうございます。キシアは獣がお上手ね、いつも感謝しています」

するとマリーが嬉しそうに言った。

「隊長さん、私たちの分まで捕つててくれたのですよ」「まあ、それでマリーは嬉しそうな顔していたのね」

「「ううそつせま。とつてもおいしかったわ」

マリーがスープの皿を片づけ、紅茶を注ぎながら姫に話かけた。

「姫様、あの船・・岸に着いていますね。漁、終わったのかしら?」

先ほど沖に停泊していた小舟が小川の少し先に泊まっていた。

紅茶を飲みながら談笑していると、そこへ森の中から男が一人出できた。

見ると両手で持つた力ゴに大きな魚を数匹携え、片づけをしている兵に近づいてきた。

「兵隊さん、今日は大漁でしたのでよかつたら食べてください」

「おお、こんなに!」

魚を持った男に気付いた周りの兵が寄つて來た。

「隊長!」

一人の兵が呼ぶとキシアが歩み寄つた。

「おお、これは大漁だな。姫様も喜ぶだろ?」

力ゴのなかの大きな魚を一匹持ち上げて言った。

「立派な大きさだ、今年は豊漁だな」

「ありがとうございます」

男は返事をしつつも森に向かつて視線を送つた。

すると突然、森の中から5人の男が剣を振りかざし一直線に姫を目の掛けていった。

「殺すな、生け捕れ!」

何が起きたのか突然の事態に誰も動けなかつた。が、キシアだけは違つた。

持つていた魚を投げ捨てる、その先頭の男を目掛けて剣を抜き飛び出していた。

それを見た兵達も我に返るとキシアに続いて剣を抜いた。

するとカゴを持った男が忍ばせていた短刀で背を向いた兵の一人を切つた。

兵たちが振り返ると、さらに森から飛び出して来た賊が切りかかった。

「雑魚に用は無い、姫を捕えろ！」

回りに指示を出しながらカゴを投げ捨てると男は姫の一団に突進していった。

不意を突かれ兵はバラバラになりながら応戦した。

同時にキシアは賊の先頭の男を倒すと姫に駆け寄った。

姫を侍女が囲み、その集団を背にキシアが構えた。

回りを見るにすでに数人の男が剣をかざし取り囲んでいた。森で銃声が響くと応戦していた兵が倒れた。

賊は続けざまに銃を放ち、やがて勝ち戦と見るやゆっくりと歩いて近づいて来た。

「あきらめる！そんな人数じゃ勝ち目はねえ、おとなしく渡せばおまえら見逃してやる」

スー・ラン

スー・ラン

「そうだったの、人ではないとすると・・・その滅んだ国の魔人？そんな連中がうろついていたら不安で外も歩けないわ」

腕組みをしながらライムが言った。

「確かにそうじゃ。それに姫様を狙っていたのには何か理由があるはず」

マリーが続いた。

「そういう連中がこの城を攻めて来たら、城の兵隊じや太刀打ちできないんじやないかね。まつたくどうしたらいいものか」

「マリーよ、その助けてくれた人は誰じやか分からんのかの？魔人を一瞬で倒すほどの腕じや。もしかしたらその方がアルセルティムの魔王を倒したのかも知れん。

オラルさんもその場におったのじやろう？ 何か見ていませんかいの？」

すでにオラルへの疑いを無くしたラリエルが聞いた。

「銃声が聞こえて、突然の事だつたので・・それに助けにきてくれた人もすぐに消えてしまつて」

「そうか・・・」

マリーはラリエルに酒を注ぎたした。

「明日になれば何か情報が入るかも知れないよ。城に行つて聞いてみるわ」

- ・ 次の日の朝、オラルは食事を済ませると昨日の現場に向かつた・・・

巨人のいたと思われる場所には人の形の焼け跡が残つていた。

『 やはリアルセルデイムの手の者か？ だが、何か違う気がする。』

・・・』

回りを歩いてみると兵達の死体は無かつた。

「 おい！ そこで何をしている！」

森の中から馬に乗った兵が数人、近づいて来た。

「 この街の者では無いな、どこから来た」 兵に取り囲まれるとオラルは馬から降りた。

「あやしい物ではありません、人を探してこの街にきました。

マリーさんの宿に泊っている旅の者です」

「 そうか。ところで昨日の巨人を知っているか？」

「 ・・・いえ」

「 巨人は人の姿をしているらしい。『仲間』が心配で見に來たのではないか？」

「 そんな、巨人って何ですか？」

「 そうか、では教えてやろう。おい捕えろ！」

最初からオラルを疑っていた兵達は繩を取り出すや、問答無用！ とばかりにオラルを縛り付けた。

オラルは抵抗することなく繩をかけられ、兵に囲まれたまま城へ向かつた。

城に通じる道で街の人々の視線を感じた。

無理もない・・・・

何年も争いもなく過ごしてきた人達にとって、繩で縛られ連れて行かれるオラルを罪人として見る以外にはなかつた。

指を指す者、ひそひそ話す者・にらみつける者。

知つてか知らずか子供達は笑いながらついて来ている。

やがて坂をのぼると徐々に森が深くなり、恐らく御城の中の北西に当たるその辺りは、ひつそりと生い茂る森に囲まれ、人を寄せ付けない静寂があつた・・・・

やがて行く手に小屋が見え、数人の兵が柵の回りで警備をしてい

た。

さらにオラルはそこから一人の警備兵と共に森の奥深くまで行くこととなつた。

「どこまで行く気だ?」「

オラルの問いかけには答えず無言のまましばらく進むと木々の間から城壁が見えてきた。

その城壁にはこの国の日常を描いた彫刻が施されている。しばらく見ていくと、やがて入り口の門に着いた。

『この彫刻……姫様の顔に似ている』

すると何処からか話かけてきた。

＜ その方の縄を取りなさい ＞

それを聞くやいなや兵があわてて縄を外した。

その声に聞き覚えがあつた。

すると扉がゆっくりと開いた。

入り口から真っ白な石畳みの道が、その階段の先にある富邸まで続いていた。

＜ 中にいらしてください ＞

オラルは辺りを伺いながら中へ進むと扉がゆっくり閉じた。

辺りを伺いながら石畳みの道を進み、階段をしばらく上ると広い部屋に出た。

「先ほどは兵が失礼な事をしました」

横の通路から姫が侍女を引き連れてきた。

「あつ、いえ……気になさらないでください」

真っ白なドレスに身を包んだ姿が昨日とは別人に見えた。

急に胸が高鳴ったのを感じた。

『美しい……』

侍女が奥の部屋へ案内をした。

「昨日はお礼も出来ぬまま、助けてくれた方はお仲間ですか?」

「いえ、私も……誰だか分かりません。姫様の護衛の方だと思つておりました。」

お礼をするのは私のほうだと

「そうですか。マリーに話を聞いていたものですから、もしかして
と思っていたので。

では誰だか分からぬのですね」

少し間を置くと姫に聞いてみた。

「あの、このお城は・・・入り口に姫様のお顔が」

「はい、この国では代々、姫を継ぐ者が守護神と契約をする事にな
っています。

この国が平和でいられるのも守護神のおかげです」

「守護神・・そうですか。それで街の人は明るい顔をしているので
すね」

それを聞いた姫はにっこりとほほ笑んだ。

「ただ昨日のような事は初めてで、皆が不安にならなければ良い
のですが・・

オラルさんはたしか人を探して旅をしていると聞きましたが?
「はい。ですがまだ会えていません。もう少し探してみると良いで
す」

言い終えると侍女が姫に近づいて耳元でささやいた。

「分かりました。ではオラルさん、探している人に会えるといいで
すね。そこまでお見送りします」

そう言つと先ほどの扉の入り口まで案内された。

扉の外には先ほどの警備兵が馬を引いて待つっていた。

「マリーによるじくお伝えください」

「はい」

オラルは返事をしつつも、その姿が脳裏にしつかりと焼き付いてい
た。

『 守護神・・・マリーさん達が言つていた事か? 』

考えながらもオラルはまだ胸が高鳴つていた・・

すでに街は夕暮れを迎えていた。

馬を引いて宿に戻る途中、大通りの真ん中に人だかりができていた。
近くに行つて見ると、何やら男女のもめ事らしい。

「あんたと私が釣り合つと思っているのかい？ 見るからに貧相
で、お呼びでないよ！」

若い娘が数人の男ともめていた。

その娘は膝辺りまでのマントを身に着けてはいるが、着けている
モノといえば・・
カラフルな帯でその立派な上半身を巻き、下はブカブカのズボンを
短く切つて履き、

それを宝石のような装飾付きのベルトで固定していた。

「そんな格好して男が欲しいのに決まつてりんじやねえのかい
？ そ、うだらうっ？」

「なあ、ねえちゃん。金ならあるからよ～ちょっと付き合つてくれ
よ～」

「何言つているんだい。見る限り私に合つ男なんかいやしないね
じや！」

ふり向いて行こうとすると囮まれた。

「こうなつたら力づくで連れていくしかないな」

回りの男がニヤニヤしだした。

「ああ、そうかい。だけど私に触れると怪我じやすまないよー！」

彼女が回りを見ながら言い放つと視線の先にいたオラルと田が合つ
た。

急に女の表情が一変した。

「ああ！ いた～！」

オラルを指差しながら叫ぶと人をかき分け近づいてきた。

「もあ～探したんだから～！」 言いながら抱きついた。

「退屈だつたのよ～口クな男いないし。何処泊つてりんの？ 行き
ましょ～！」

言われるまま手を引かれ、苦笑いをしつつその場を離れようとし
た。

「ちょっと待ちなよ兄ちゃん！ うちらが先だろ」

そう言わながらまた囮まれた。

「すいません。妹が何か迷惑かけたみたいで」

「妹！」

ブウ～とふくれ顔をすると

「私の旦那です！ なにか文句あるの！」 と言いながらオラルの手を強引に引くと囮いを割つて出た。

「けつ！ 冷やかしやがつて。おい、いくぞ！」

男達はぶつぶつ文句を言いながらその場を後にした。
女がオラルの腕を組んだまま離れずに歩いていると、
先ほどの城に向かう時とはまた違う視線を感じていた。
やれやれ、などと思いながらなるべく街の人と目を合わせないようにしながら宿に着いた。

「あれまあ～探している人つて旦那のコレ？ ですかい？」

一人を見つけるとサルージがカウンターから近寄つて聞いた。

「コレじゃないの！ ダ・ン・ナ！」

「へえ～旦那もなかなかやるもんですね～見直しましたよ～で、お名前はなんと？」

彼女をジロジロ見ながら言った。

「だ～れ！ この変なの！」

オラルは二人を制して答えた。

「ああ、銃をあずけたサルージだよ。彼女はスーラン」

「サル？ やつぱりね～どう見ても人には見えないわ。で、その銃は撃てたの？」 冷やかし顔で聞いた。

「おいおい旦那、あずけたって？ くれたものでしょ。そういうえばこの銃まだ撃つてないけど」

スーランがサルージの顔を覗き込むように聞いた。

「ふ～ん？ ジャあ撃つてみなよ。まつ、撃てれば？ の話・だ・け・ど？」

そこへカウンターで話を聞いていたマリーが割って入った。

「およし！ この国で銃を撃つときは戦争でも始まつた時だよ。

それよりオラルさん、その子が探していた人かい？」

「はい。あと彼女の他にも数人いまして、これからまた人探しです。

明日、ミンの國の方に行くつもりです」

「えつ？ だんな明日旅に出るので？」

「ああ、サルージには色々と世話になつた。マリーさんも、ライムさんも。

いろいろお世話になりました」そういうと軽く会釈した。

「そうかい、まあしようがないものね。またいつでも遠慮なく寄つてね。

ところで、今日は彼女も泊りかい？」

スーランが身を乗り出して言った。

「そうです！ もちろん一緒に部屋で！」

オラルがすかさず答えた。

「別々の部屋でお願いします」腕組みをしてスーランが答えた。

「冷たいのね」でもそういうところがいいんだけど！」

次の日の朝、まだ日も昇らぬうちに旅支度を終えた。

「気をつけてね」

「この街に来た時はまた寄つてください」

マリーとライムが見送ってくれた。

「はい、それでは・・・」

オラルが馬を引きスーランが後に続いた。

早朝にも関わらず大通りは荷を運ぶ人や店の準備をする人で賑わいを見せつつあった。

城門に近づくと荷を乗せた馬をなだめていたサルージがいた。サルージはオラルに気付くと小走りで近づいてきて言った。

「だんな！ お供します。スーランさん、こいつに乗つてください

！」

サルージが馬の背を叩きながら嬉しそうに言った。

「おいおい？ 門番はどうするんだ？ それに家族は？」

「家族なんてありやしません、門番は知り合いに任せました！ 僕も外の世界が見てみたくなつたんですよ、いいでしょ？」

スー・ランが馬をなでながら「あらあら、また変なのに好かれたよね～でもだめ～」

冷やかし加減に覗きこんだ。

サルージはそこを何とか、と併んで言った。

「そんな事言わないで～お願いしますよ。きっと何かの役に立ちますから～」

断つても付いて来そうな勢いのサルージをみながら少し考えるとオラルはサルージの銃を指して言つた。

「サルージ、その銃での丘の鳥を撃つてみてくれ。それで連れていくか決めよう」

城門の外に見える小高い丘に数匹の鳥が群れをなしていた。

スー・ランはポン！ と手をたたいた。

「なるほど、そうね！ それがいい！ それなら文句ないよ！」

サルージが、よし！ とばかりに城門を出ると少し歩いた所で銃を構えた。

「任せてください！ 僕の腕に勝る奴はいませんよ！」

オラルとスー・ランは互いに目を合わせると笑みを浮かべた。

「いきますよ～！」

じつくりと、丘に居る鳥に照準を合わせると・・・サルージは引き金を引いた。

銃口から月の形をした光が横に伸び、それが瞬時に縮まり丘に向かつて飛んだ！ つと、同時にサルージも後ろへ飛んだ！

「いたた？ なにが起きた？」

サルージが体を起こすと一人が笑っていた。
「何で？」

見ると今まであつた丘が無くなっていた。

「へつ？」

銃と消えた丘を何度も見た。

「へえ～撃てたね。やつぱりオラルは見る目が違うよ
スーランが腰に手を掛けて言った。

「半信半疑だつたけどね。まつ、よかつた」

サルージが銃を持ち上げながら走つてくると聞いた。

「だんな、なんです？ この銃？」

オラルが馬に乗るとサルージに言った。

「サルージ、行くぞ！ 先は長い」

「そうそう！ 先は長いよ！」

スーランもサルージの連れてきた馬に乗るとサルージを置いて駆けだした。

「ちょっと～！ ワシも乗せてくださいよ～！」

二人が走り出した後を、サルージが必死に追いかけて行つた・・

第1章・アルミアの軍隊

第1章・アルミアの軍隊

アルミア王国はメルドール大陸の最南にある唯一の獣人の独立国である。

世界各地に獣人は住処を持つているが、それは人間も同じである。ただ魔人に関してはそれらに立ち入ることを許されず、各國々は魔人の対処法を独自に持っていた。

魔人の国は世界の中でもはつきりと区別されており、また、人間と獣人は魔人とは事を構えなかつた。

ただ、どの国にも各国々に通ずる者がおり、時には人に姿を変え、また獣人に姿を変えて活動をしていた。

アルミア国の中には人間の国メドル王国があり、アルミアとは親交が深く互いに共生共榮としていた。そのメドル王国の北の隣国には魔人の国アルセルデイムがあつた。

「国王陛下、たつた今メドル国王の使者より文が届きました」
そう言うとエドス参謀は持っていた巻物を差し出した。

「国王が巻物を広げ、読み終えるとエドスに言った。

「アルセルデイムが滅んだ……魔王も……」

「なんですか！」

周辺にいた従事者達がざわついた。

それを見たエドス参謀がゆっくりと手を挙げると……静まった。

「陛下、どここの国がアルセルデイムを？」

「そこには触れておらん。だが……たつた1日で、と記しておる。

にわかには信じられんが、どうやら真のようだ……」

「ならば周辺諸国にも同じように知らせが届いているはず。

陛下、残つた魔人共が各地で暴れ出す前にアルセルディム国境を封じ込めなければ」

国王は巻物を返すと少しのあいだ目を閉じた。

「エドスよ、そなたは兵を連れメドル国王の力となつてくれ」

続けて従事者たちに指示を出す。

「小隊ならびに魔術獣はメドルとアルセルディム国境を封鎖せよ。このアルミアの地は絶対に魔人共には踏ませてはならん！」

次の日の朝、エドス参謀と約千人の兵はアルミアを出発した。メドルとの国境付近には、日も沈みかけた頃に到着した。エドスは小高い丘の上に立ち遠くに見える川を指して言った。

「シエル、あの川を渡ればメドル国だ。夜が明けてからメドルに入る。この辺りで宿営の準備を」

「はい！ 畏りました！」

得意げに敬礼すると小柄なシエルは大きな鎧兜を力チャ力チャと鳴らしながら各部隊長に指示を出しに行つた。その姿はまるで子供が戦の真似事をしている様で滑稽だった。

「ハル獣隊長！」

エドスが造作なく呼ぶと部隊の後ろから人影が宙を飛びエドスの前に着地した。

その姿は一見、黒ヒヨウの様であるが、すぐ人に姿になった。

「メドル国に行き、城周辺の状況を確認。同時にアルセルディムとの国境の状況を探つて来てくれ」

ハル獣隊長は軽く頷くと飛んで消えた。

見送るエドスは風の匂いに眉を寄せた……

メドル王国

メドル王国

メドル国は魔人の国であるアルセルディムの隣国であるにも関わらず、世界の中でも特に繁栄を重ねてきた国である。

そして、城はその象徴でもあつた・・・・・

山の頂に造られた城は雲を突き抜けるほど高い高さであった。普段、地上からはその姿を見ることは出来なかつた。

それを利用した城の防御は他に類を見ないほど強固な造りであり、幾つもの戦火を潜り抜けてきた証でもあつた。

そして、その国王が絶対の信頼を置くのが大魔術師ドルガスであつた。

ドルガスは魔術師の中でも特に対魔人術に精通しており、ここ数十年の平和の立役者でもあつた。

また、隣国アルミニアの信頼を得ており反してアルセルディムからは要注意人物とされていた。

今宵は満天の星の輝きが地を照らしていた。

ハル獣隊長はメドル国に入り、森の中を弟分のロージィと共に馬で駆けていた。

そして森の切れ目が近づくと速度を抑え止まつた。

「ハル・・・・・・

「ああ、感じる・・・・・

ロージィと目を合わせたあと木々の間から遠目にかすかに煙の上がつていてる城を見た。

「すでに魔人と戦いを始めているのかも知れない」

「そうかも知れません、急ぎましょ！」

ハルとロージィが森を出て小高い丘に登り、そこから城の近くまで伸びている山脈に沿つて進んだ。

月の光が城までの道案内をしてくれた。

やがて山の中腹にある城壁に近づくとロージィが叫んだ。

「ハル、あれは！」

見ると城壁の一部が大きく崩れ、城門は瓦礫の山と化していた。さらに所々で煙が上がりモノの焼ける匂いがした。

二人は侵入出来そうな場所を探すため崩れた城門に向かつた。

「ハル、人の気配がありませんね・・・」

「ああ・・・何かがおかしい」

ハルが返事をしつつ城を見上げた時だった。

城の上空から何かが飛び出し、二人に向かつて急降下してきた。

とつさにロージィは剣を抜き構えたがハルは慌てる事もなく落ち着いていた。

それは地面に着く直前に大きな翼がふわりと開き、着地した。その翼がマントに変わり人の姿に戻りながらハルに近づいて言った。「ハル殿・・・ここはもうもたない。いずれ魔人の手に落ちるでしょう」

ハルに持つていた腕輪を差し出した。

「どうか・・・エルード御苦労だつた。それで国王は？」
腕輪を受け取ると聞いた。

「だいぶ応戦したと・・・ですが国王そして大魔術師のドルガスも魔人の手に掛かり

恐らく国王、魔術師達は真っ先に狙われたのではないかと思われます。

王の部屋、周辺には多くの魔人と魔術師達の亡骸がありました。しかし数だけ見ると魔人の方もかなりの痛手を負っていると見えます。

しばらくは攻め込んでこないものと、

ハルは装飾の施された腕輪を強く握りしめた。

それはドルガスの金の腕輪であった。

「ドルガスまでも……エルード！　このことを急ぎハドス参謀に伝えてくれ、

私とロージィはこれから城の様子を探る！」

エルードは頷くと翼を広げ飛び立つて行つた。

「ロージィ、これから城に入る。油断するなよ！」

「ああ！」

一人は馬を降り崩れた城壁に向かつて走り出した。

城壁の内部に入るときには一人は一匹の黒ヒョウに姿を変えていた。

城の中は焦げた臭いが立ち込めていた。

一匹は薄暗い通路を進み一つ二つと部屋を渡り歩いた。

どの部屋もエルードの言つていたように凄惨な状況だつた。

歩いている先に螺旋階段のある広間を見つけた。

だが階段付近には兵、さらには魔術師までもが息絶えていた。

激しい戦いを思わせるように壁は焼け剥がれており、

術によつて石化、あるいは壁の一部となつた兵達の姿があつた。

「ここまで侵入されているとは……」

慎重に辺りを見回すと一匹はそつと階段を上がつて行つた。すると広い吹き抜けの広間に出了。

そこは花の彫刻が施された腰の高さほどの石壁で囲まれており大きな支柱四本が、

同じく花の彫刻石の屋根を支えていた。

おそらくハレの日に使う場所なのだろう。

ロージィが北側の石壁に飛び乗り、その上を歩いた。

北側の石床は10メートルほど石屋根よりも月の明りを全面で受け止めていた。

柔らかい月の光がロージィを照らしていた。

「ハル、ここからだと遠くにアルセルデイムが見えます」
南側の石壁を見回っていたハルがロージィのもとに近づこうと歩きだした時、

石屋根から黒い水がゆっくりと一人の間に降りてきた。

それは音を立てる事なく静かに。

そして徐々に人の輪郭を描くとその全身が月の光に照らされた。

「ハル！」

叫ぶと同時にロージィが石壁から飛び降り、攻撃態勢に入った！

「魔人か！」

ハルも瞬時に何かを感じたのであるう、無意識の内に構えていた。

その魔人は一匹を見て言った。

「ほ、う・・・魔人か？　ここで何をしている？」

ハルは今までにない恐怖を覚えた。

それは真っ黒な体に、一つ一つが拳ほどの大ささの鱗のような皮膚、脈打つ筋肉、

まるで意思を持つように不気味にうねる鎧兜・・・・

それを見てハルは黒ヒョウの姿から人の姿になるとロージィを見た。

ロージィも感づいている・・・この魔人は危険だと。

そしてロージィを見ると叫んだ。

「行け！」

ロージィは一瞬ためらったが理解したのだろう、この絶望に近い状況を。

そして必ず一人は生き残つてエドス参謀に伝えなくてはならないと
いう使命感を。

ロージィは頷くと迷うことなく石壁を飛び越えた。

『 賴んだぞロージィ！ 』

魔人は飛び降りて消えたロージィを目で追いながらつぶやいた。

「まあいいだろう。魔人の召使いは一匹でいい

ニヤリと笑うとハルを見て言った。

「さあどうした？　かかつてこい。そのままにふさわしい首輪を付けてやる」

ハルは両腰の短剣を抜くと攻撃態勢に入つた。

「きさまに用は無い！」

ハルは叫びながら魔人に飛びかかつていつた。

その頃エドス参謀率いる国境の兵士達は就寝前だつた。

エドスは宿舎のテントを出ると月を見た。

エドスに付き添つていたシエルも空を見た。

「エドス参謀？　どうかされましたか？」

「知らせが来た」

見ると星の輝く夜空を鳥が旋回しながら飛んでいた。

それはテントから出てきたエドスを見つけると急降下してきた。

慌てたシエルがエドスの背後に回つた。

「エルード」

ふわりと着地してエドスに近づき耳元で話かけた。

そばにいたシエルはオドオドしつつも会話を聞きとりうとしたが

エルードに睨まれると大人しく下がつた。

短く会話を終えるとエドスはエルードの肩に手を掛け領いた。

エルードは会釈すると、すぐに飛び立つていつた。

「シエル、すぐに出发する！　準備を致せ！」

「は？」

シエルを睨んだ。

「はっ、はい！　すぐに！」

あわててシエルは兵の元に向かいながら叫んだ。

「出発するぞ～！　急げ～！」

エドスは馬を呼びヒラコと乗ると出発準備をしている兵に向かつて声をあげた。

「準備出来た者から付いてこい！」

日の出が近づいた頃、国境の川を越えたエドスについて来られた者は50人ほどだった。

その一番後ろにシェルがいた。

シェルは馬に振り落とされまいと必死に手綱にしがみ付いていた。エドスの部隊は森の手前の開けた草原に馬を止めシェルの到着を待つた。

シェルはふらふらになりながらもよつやく起き上った。が、追いついたところで馬から滑るように落ちた。

「どうした、しっかりしろ」

「もうバテたのか？」

微笑する兵達に支えられながらよつやく起き上った。

「たいした事は無いですよ・・・まあ行きましょう」

再び馬に乗ろうとした。

すると今度は馬が拒否してまた滑り落ちた。

みかねた兵の一人がシェルを抱えて馬に乗せた。

「ふう、まだまだいけますよ」

「しようがない奴だ。が、その心意気は認めてやる」

エドスにポンッ！と肩を叩かれるとビシッ！と姿勢を正した。

そのやりとりが一団を和ませた時、遠くから声が聞こえた。

皆が声の方をみると森を抜けて走つて来る者がいた。

そして森の影から出ると朝日に照らされた。

「ロージィ！」

エドスは叫びながら駆けだしていた。

事が重大だと咄嗟に理解したのだろう。

黒ヒョウのロージィに駆け寄り、すばやく馬を降りた。

「ロージィ！ 何があつた！？」

ロージィは息を切らしながら答えた。

「魔人が！ ハルが私を逃がして、ハルが！」

二人の回りを兵が囲み成り行きを見守つた。つい先ほどの笑顔は消えていた・・・

状況を皆が確認するとエドスが言った。

「その魔人アルセルディムの者では無いな・・・」

皆が神妙な顔つきになつた。

そこへ上空からエルードが降り立つた。

「エドス参謀！ あの魔人がすぐそこまで来ています！ ハル獣隊長も一緒にです！」

「なんだと！」

皆、一斉に森の方を向いた。

温かかつた風が冷たくなるのを感じ、その風が止むと今度は空気が重くなつたような気がした。

森が一斉にざわつき始め、大きな音をたてるとまるで生きているかのごとく暴れた。

それらが突然、ピタッ！ と、止むと・・・

黒い水が森から川のように流れ出し一団に向かってきた。

それを見たエドスが叫んだ。

「牙の陣形をどれ！」

兵が一斉にエドスの後方で陣を組んだ。

その陣形は三つに分かれ、それぞれが三角形をしていた。 続けざまに叫んだ。

「エルード！ こちらに向かっている兵をアルミアに戻せ、我々だけ倒す！」

エルードはすぐに反応した。

「アルミアの勇者達よ！ 油断するな！」

兵たちは馬から降り、盾の壁をつくつた。

そこへ流れてきた黒い水がエドスの手前で止まり大きな固まりとなつた。

エドスは剣を抜き構えた。

すると黒い水の固まりが上部から流れ出すと中から魔人とハルが現れた。

「ハル！」

エドスの脇にいたロージィが叫んだ。

それを見たエドスがロージィを剣で制した。

ハルは黄金の鎧を身に付け、首には赤く光る輪が掛けられている。

ハルを見ながら魔人が言った。

「先ほど良い召使を見つけてなあ。だが、やはり一匹でないと様にならん。

おまえ、もう一匹知らないか？」

言い終えるとエドスを見た。

エドスは剣を魔人に向けると言い放った。

「きさまアルセルデイムの魔人では無いな、ここへ何しに来た！」

すると魔人がニヤリと笑みを浮かべて答えた。

「それを知つてどうする？　すぐに死が待つてているというのに」魔人が両手を広げると胸の辺りに白い煙が円を描きだした。

それを聞いていたロージィのプライドは我慢できなかつた・・・

ハルとロージィ

ハルとロージィ

ハルとロージィは黒ヒョウの獣人でハルはロージィより三つ年上で
あつた。

互いの両親はアルミアの海岸近くの田舎町で暮らしていた。
ハルは幼いころから狩りが得意で、狙った獲物を取り逃がす事が無
かつた。

そんなハルと何時も一緒に行動を共にしていたロージィはハルを「
兄さん」と呼び、慕っていた。

ある時、いつものように狩りをしながら切り立つ岸壁までくると
大きな船が座礁しているのが見えた。

「兄さん、なんだろ?」

「この辺りでは見かけない船だ。行ってみよう」

近づくと船体はところどころ剥げており、継ぎ接ぎのあともみて
とれるが下からは上の様子はわからなかつた。

「こんなに大きな輸送船はじめて見る……」

「兄さん、あそこから行けそうです」

2匹は船体から無造作に出ている縄はしじを使って船に乗り込むと、
話し声のする方に向かつた。

気配をこらしながら船内を移動していくと、大きな檻が幾つも重
ねられている部屋に出た。

檻の前で言い合いをしているのは10人ほどの魔人兵だつた。

見ると檻の扉が【2つ】空いていた。

「お前達が寝ていなければこんな事にならなかつたんだぞ!」

「なにを言つ！」「いつらが逃げたのを見ていなかつたのはだれだ！」

船が座礁した事で揉めているのだろうか？

なかなか收まらない言い合いの最中、一人の兵が『ネズミ』の様な生き物を捕まえて來た。

「おい、そこまでにしておけ！　あの一匹、何が何でも探し出せ！」

それを聞いた兵達は大人しく散らばつて行つた。

「兄さん、あれ・・・」

「ああ、俺達と同じ仲間だ」

「魔人の国に連れて行かれるの？」

「そうみたいだな」

「じゃあ、助けないと！」

「また！　俺たちじゃ敵わない相手だ」

「でも・・・」

「ロージィ、いま見張りは一人だ」

ハルはロージィの耳元で囁いた。

「分かつた、上手くやるよ」

「頼んだぞ！」

ロージィは頷くと駆けて行つた。

ハルは物陰からその兵に近づいていった。

「まったく、つまらん役目だ」

兵は掴んでいた『ネズミ』を見ながら檻の中に入れると鍵を掛けた。

『ネズミ』は出せ！　と言わんばかりに檻を叩いていた。

「暴れる、どうせ短い命だ」

兵がそう言いながら睨みつけていると船内から爆発音が聞こえた。

「なんだ！」

立て続けに爆発音が聞こえるとその場に残っていた兵達は走つて行

つた。

『さすがだロージイ！』

ハルは人の姿になると檻の扉を開けて回った。

「今のうちに反対から逃げてくれ！」

解放された仲間たちは他の檻を開けながら逃げて行つた。

「きさまー、何をしているー！」

突然後ろから怒鳴りつけられたハルは檻を開けるのを躊躇したが、

「大丈夫だから逃げてくれ」そう言ってタヌキの獣人を逃がした。

「きさま、若造のくせにやつてくれるじゃないか！ 生きて帰れると思うなよ！」

ハルは振り返りつつ、黒ヒョウに姿を変えた。

するとその兵もハルと似たような猛獸ではあるが黒い体毛は鎧に変わり、

その尾は別の意思を持ち、足元は沈んでいた。

『まともに戦つては・・・』

ハルは突進してきた魔獸をかわすと、檻に突っ込んだその後ろの尾に向け口から火炎を放つた。

その尾は似たようなモノを吐き出すとそれでかわした。

瓦礫の中から身を出した魔獸は再び突っ込んで來た。

ハルは続けざま火炎を放つたが、魔獸はそれをかわすこと無く受けた突進してきた。

それをヒラリとかわすが・・・伸びた尾がハルを捕らえ巻き付いた。

ハルは身動き出来ずに魔獸に引き寄せられた。

「獣人の分際で我らに歯向かうとは・・・見せしめにその皮を剥いでくれよう！」

魔獸は尾を伸ばすと宙でハルを締め上げた。

ハルは意識が遠のいていくのを感じ、覚悟をしたときだった。

目の前を影が走った瞬間、尾が切れた。

ハルは地面に叩きつけられると意識を戻し、何とか構えをとつた。

ハルが見上げる先に一匹の鳥が舞っている。

「・・・逃げていた奴か！ わざわざ殺されに戻つて来るとは馬鹿な奴だ」

切れた尾が魔獣に戻ると、それは翼を持つ魔鳥に姿を変え大きな翼を羽ばたかせてゆっくり上がつていった。

「逃がしはせん！ 覚悟しろ！」

魔鳥は大きく鋭い爪を伸ばし、そこに大きな火炎玉を造ると翼を持った獸人めがけて放つた。

しかし火炎玉は抵抗される事無く船室の上部を破壊して空高くに消えていった。

翼を持つた獸人はその穴から外に飛び出すと魔鳥もあとに続いた。

ハルが甲板に出ると、海岸に逃げた獸人達がロージィと共に居た。

「兄さん！」

ハルは上空で戦う魔鳥と獸人の姿を見ながらロージィの元に駆け寄つた。

「ロージィ、怪我は無いか？」

「ええ、兄さんの言われた通りに魔人達を船尾に閉じ込めたあと爆破させました」

「良くなってくれた」ロージィはその言葉に頬を上げた。

ハルは後ろにいた一匹の老犬に歩み寄つた。

「ところで、あなた達はどうして・・・」

「はい。我々は小さな漁師村に住んでおりました。そこに突然奴等が来て村を破壊し・・・

なんとか女、子供は逃がしたのですが我々は捕まってしまいました」

「そうでしたか」

「それと船の中で聞いたのですが、どうやら魔人達は我々を密偵用に改造すると言つていました」

「改造！ なんてことを！」

「幸いこの辺りは岩礁地帯でしてな、運よく座礁してくれました」

上空の一人の戦いはさらに激しさを増していた。

「の方は？」

「はい、エルードといいます。まだ若いのですが戦いにおいては抜きん出たものをもつています」

エルードは海岸に降り立つと魔鳥も続いた。

「逃げ足の速さだけは認めてやる。だが次で終わりにしよう」
魔鳥は上空に向けて口から勢い良く水を噴き出すと、それは針の雨となりエルードを襲つた。

エルードは広範囲に渡つて降り注ぐ針の雨に逃げ道を失つと、とつさに翼を盾にしてそれを受けた。

数本の針を受けたエルードの翼は傷つき、飛びながら戦える状態では無くなってしまった。

「おおっ！ エルード！」

「ひつなつたら我々が！」

仲間が心配そうに身を乗り出すがとても助太刀できそうな者は居なかつた。

「観念しろ、これで楽にしてやる！」

そう言い放つと魔鳥は先ほどよりもさらに大きな火炎玉を造つた。エルードは構えをとつたが、もはや翼に力はなかつた。

「これで終わりだ！」

火炎玉がさらに大きくなつたとき、魔鳥の顔面に『ネズミ』が飛びついた。

「ぐわっ！ こいつ！」

魔鳥は慌てて元の人型の魔人に戻るとネズミを顔面から引き剥がした。

「やつてくれたな・・・」

みると魔人の左目から鮮血が溢れていた。

「くたばれ！」

魔人は両手でネズミを握りつぶしにかかつた。

「デュウ！」

苦しそうに悶えたその時、魔人の背後からロージィが飛びかかり首を捕らえた。

「があつ！　きさまら！」

魔人はネズミを投げ飛ばし今度はロージィを引き剥がしにかかつた。

「くそつ！　このつ！」

ようやくロージィの首を掴み、引き剥がそうとした時だった。

「離れる！」

ロージィはその声に瞬時に反応すると魔人を蹴飛ばし飛び退いた。

シユツ

エルードが魔人の脇をかすめていったあと、風を受けた魔人の首がゆっくりと落ちていった。

「いざれまた会うこともあるでしょう」

捕らわれていた仲間たちは、ハルとロージィに再開を約束して家族の待つ土地に帰つて行つた・・・。

「兄さん、俺もつと強くなりたい」

「ああ、俺もだ。さあ帰ろう！」

夕焼けを見ながら一匹は駆けて行つた・・・

ロージィの怒りは頂点に来ていた！

ハルがいいように操られていること、そして何より魔人の『飼い犬』のような発言に！

ロージィは己のプライドに従つた。

その場から魔人めがけて飛び出すと空中で人の姿になり剣を抜く

と渾身の力を込めて切りかかつた！

ロージィの体は宙に浮いたままだつた。

魔人の肩の辺りから体を覆うように黒い水の盾がロージィの剣を呑み込んでいた。

そしてそれが大きな固まりに変わると徐々にロージィも呑み込まれていった。

「そこまでだ！」

エドスが馬を降り、魔人に歩み寄つて言った。

「2人を開放しろ！ お前の望みは何だ！」

魔人は息の切れかかつているロージィを目の前に放り出すと言つた。

「望みだと？ この世界は近々魔人が支配する。

その前に人間共と獣人を消してしまいたい、それだけだ

「そうか、ならば最後に一つ教えてくれ。アルセルデイムを滅ぼしたのはお前か！」

魔人が高笑いをして返した。

「最後か？ いいだろう教えてやる。

確かに我々の送り込んだ仲間がアルセルデイムを滅ぼした。
だが、そいつが魔王を倒した後に何者かによつてそいつ自身も殺された。そこが謎だ。

なぜならこの世界に我々『闇の十人』を倒せる者など存在しないはずなのだ。

それで私が調査のために遣わされた、分かったか？」

エドスはロージィを抱き抱えると、ニヤリと笑みを浮かべて言った。

「どうか、お前のような奴を倒せる者がこの世界に存在するのか。
ならばそれは我々獣人かも知れないな」

「なんだと？」

エドスはロージィを馬に乗せると、皆に向かつて叫んだ。

「仲間達よ、遠慮はいらん！ 己自身のため、守るべきもののため

己を開放し、存分に戦え！」

エドスが魔人に振り向くと、その姿は全身が針の皮膚で覆われた鎧獸に変わっていた。

仲間も同様に、それぞれの獣の姿に変わっていた。

「それがどうした？」

魔人の体から黒い水の固まりが無数に伸び出でくると、それは1つ1つ魔人の顔になつた。

その固まりの1つが言った。

「遠慮はいらんぞ、かかつてこい！」

エドスは身構えると叫んだ。

「我々、獣人の力を見くびるなよ……一の陣！」

エドスの合図とともに右後方の三角の陣が一斉に飛びかかると宙を舞つた獣人と地を駆ける2手にわかれた。宙を舞つた獣人達は同時に火炎を放つた。

魔人は黒い水の固まりの1つが盾に変化して防いだが、周辺は炎と煙で覆われた。

視界が利かなくなつている魔人に對し地を駆けた獣人達は3体が合体すると

漆黒の鎧兜を身に付けた鎧獸となり、炎と煙の中へ飛び込んで行つた。

「くらえ！」

鎧の1つが巨大な斧に変わり、瞬時に振りかざすと魔人をなぎ払つた。

「ぐつ！ こんなやつらに」

魔人が胴から2つに分かれると再び黒い水が地を覆つた。

「やつたか！？」控えていた獣人が言つた。

すると黒い水は波打ち始め、それが無数の槍に形を変えると瞬時に飛び出し獣人達に襲いかかつた。

宙を舞つた獣人達はかろうじてかわしたが翼を撃ち抜かれた。

その撃ちぬいた槍が網に形を変え、反転して獣人を包み込むとその

まま勢いよく地に叩きつけた。

漆黒の鎧兜を身に付けた鎧兜は多少の傷を負つたものの鎧が防いだ。

「ぬうう、油断するな！ 次が来るぞ！」 エドスが叫んだ。

黒い水が再び固まると魔人が姿を現わした。

「なかなかの攻撃だつた、次に期待するぞ」 不吉な笑みを浮かべながらエドスを見た。

「そう言つていられるのも今のうちだ、第二陣！ やつを抑えこめ！ これで終わりにしてやる！」

左後方の8人が駆け出すと魔人を囲んだ。

「八方陣！」

8人の魔人の全身が輝きを放ち、星の形の円陣を描いた。

その中心にいる魔人は幾つもの回転する星のリングに囲われた。

「なんだ、その程度か？」 それを見たエドスは叫んだ。

「十二方陣！」

エドスの後方にいた最後の部隊が飛び出し、八方陣の外側にさらに大きな円をつくった。

「魔人よ、油断したな！ これで塵にしてやる」

呪炎魂消

獣人たちの様々な攻撃が魔人に集約された。

「なにつ！ 何だこれは！」

魔人の予想に反して体が溶け出し、蒸発して消え始めた。

「物理的な攻撃が効かぬのならこの術は効くだろう、いま樂にしてやる！」

エドスの体が光り始めた。

「ぐううー！ たしかに甘く見ていた・・・だが忘れてはいけないか！」

？ 「こいつの存在を！」

魔人の目が赤く光った。

すると輪から少し離れた所にいたハルの首輪がそれに反応した。

ハルは突然走り出し、囮いをつくつている獣人に向けて口から雷を放つた。

それは『輪』全体に雷が轟き、それを受けた獣人達は痺れてその場に倒れた。

術の効力が切れたその瞬間、魔人の体が回転し術を弾き飛ばすと駆け寄ったハルが身を寄せた。

「いい子だ、それでいい。今度はこちらの番だ、確かに舐めてかつては命とりになりそうだな」

魔人は呼吸を整えた。

「一切の手加減はせん！ 皆殺しだ！」

体を修復した魔人が胸の辺りで両手を合わせ、ゆっくり手を広げると真っ赤な雷が全身を覆つた。

それをみるやエドスが反応した。

「いま一度、呪炎魂消！ 僕がどごめをさす！」

ふいをくらつた獣人達が構えをとり直すと一斉に術を放つた。

再び魔人とハルが術にかかつたが、ハルの黄金の鎧が雷を放つと、それらを跳ね返し続けた。

「まさかこいつが役に立つとはな・・・」ハルの黄金の鎧をさすりながら言った。

魔人がエドスを凝視すると、全身を包んでいた雷の輪が高速で回転を始め、徐々に拡大していった。

内側に円を囲んでいた獣人たちは赤い雷の輪が近づくと後ずさりした。

魔人は胸の中心で手を合わせ、腰を落とし、力を込めるときの輪が勢いよく広がり、術をかけていた獣人達は逃げる間もなく雷をくらい吹き飛んだ。

「覚悟しろ！」

魔人は合わせていた両手を少し広げると、そこには黒い水の固まりがあり、それを一気に押し出すとエドスに向かつて飛び出した。エドスが避けようと動いた時、それは大きな網になり、エドスを包んだ。

「なにっ！」

さらに網が液状に変化するとエドスは呑み込まれた。

先のロージィと同じように黒い水に取り込まれ身動きできないでいるエドスに近づくと魔人の両腕が天高く伸び、その手の形が鋭利な剣に変化した。

「どうだ苦しいか？　だが安心しろ、いま楽にしてやる！」

それはエドス目がけて勢いよく放たれた。

「ぐわっ！」

突然、魔人の顔に小柄な獣人が飛びついた。

それは両足で首を絞め、両手の爪が顔を捕えていた。

「エドス参謀！　今です！」

エドスは黒い水の中からそれを見てニヤリとした。

全身の皮膚を覆っていた針が白い光を放つと、体を丸めたエドスが魔人に向かつて飛び出した。

魔人の顔を覆っていた小柄な獣人は、当たる直前に飛んで逃げた。

「なっ！　な・ん・だ・と」

魔人の胸にエドスが埋まっていた。

「この手の術が効かぬのは、おまえだけではない。そしてこの技は魔人に効くらしい」

エドスを覆っている無数の針が瞬時に伸びた。太く、長く伸びた針は魔人の体をはじき飛ばしその光を受けた白黒模様の水しぶきがボタボタと落ちていくと、それは徐々に蒸発し消えていった。

「終わったか・・・」

傷ついた獣人たちがエドスの元に集まってきた。

「参謀、やりましたね」

「今日は危なかつたですよ～」

傷を負つた者たちも勝利を確信すると同時に笑顔が戻ってきた。
そこへ小柄な獣人が割り込んで言った。

「エドス参謀！ ナイスな『タイミング』でしたでしょう？」

「シエル、今回に限つては良い働きだった。たまには褒めてやらん
とな！」

「そんなん！ 毎回お役に立つてないですか～」

獣人達の笑い声が響くなか、川に背を向けているハルが叫んだ。

「今回は預けておく！ だが次はないぞ！ 楽しみに待つていろ！」

獣人達が見るとハルを覆っていた黄金の鎧は消え、

いつものハルに戻つていたが目は赤く光つたままだった。

ハルは振り返ると川に向かつて走り出した。

「エルード！」 エドスが叫んだ。

ハルはエルードを見ながら不気味な笑顔を浮かべるとそのまま川
に飛び込み、川と同化して消えていった。

エルードはハルが消えた辺りを探したが、とうとう見つからなかつ
た。

そこにエドス達が集まつてきた。

「エルード！ ハルは！？」

「駄目です！ 川と同化して消えました」

「そうか・・・どうやら一筋縄ではないのか」

「くそっ！」

悔しがる獣人達にエドスが言った。

「一度アルミアに戻る！ このままでは終わらせん！ 態勢を整え
てから奴らを叩く！」

獣人達が一斉に声を挙げた。

見上げるとすでに口は高く昇つていた・・・

第2章・ミンの剣王

第2章・ミンの剣王

ルードシアとミンの国境には山脈が双璧を成していた。

その谷の山深い所に、小さな集落があった。

集落とはいっても数件しかなく、家と家との間は徒歩で半日ほどかかる。

その一つに刀鍛冶師シンの家があつた・・・

早朝、シンが旅支度をしていた。

「では行つてくる。また四・五日ほどかかると思つがよろしく頼む。ところでランは何処にいる?」

「はい、ランは相変わらず剣術修行です。今日はあなたが街に行く日だつて伝えてあるのに」

「そうか。ではランを頼む。自分の技に自信を持つことは良いことだがそれだけでは世の中を渡つてはいけない。レイからもそのあたりを教えてやつてくれ」

シンは大きな荷を背負うと家の外に出た。

「それでは頼んだぞ!」

「はい、気をつけ!」レイは手を振りながらシンを見送った。

シンは獣道を歩きつつ田の山を過ぎたころに洞窟を住まことしてい る家に着いた。

その穴に向かつて呼んだ。

「お~い、アキム~! いるか~?」

(アキムとは鎧兜、装飾品などを製作している職人でシンの幼馴染でもある。)

シンの刀剣の鞘はアキムに拵えてもらっている)

道窟の中から反響を重ねた返事があり少しするとガシャガシャと音を立て、何やら大きな荷物を抱えて奥から出てきた。

「ごめん、ごめん、待たせたな！」

「いや、それにしても今日は多いな」

「ああ、しばらくここを離れる事にしたんだよ」

「どうして？」

「カズチの店を手伝う事にしてな、何だか景気が良いらしくてよ。そんで暫く手伝ってくれって」

「そうか、なら少し持つぞ」

そういうとシンは荷を一袋抱えた。

「ああ、すまねえ。これでまとまった金になるからよ、明日は一杯やろうな！」

二人で大きな荷を抱えると歩き出した。

「そういう ランちゃんは幾つになった?」

「ああ、17になつた。最近は自信たっぷりに勝負してくれって言つてくる」

「そうか 大きくなつたな。このあいだ見掛けたけど、だいぶ大人っぽくなつていたな」 何だかレイの若いころに似てきたよ。ありや男はほつとかないね」

「そうか？ だけどまだ世間知らずだ」

馴染みの小川からさらに山を越えると雑木林の中にある道に出た。

近くにだいぶひなびた社を見つけたアキムは日暮れも近づいていたので「今日はここいらで泊るか？」と、シンに聞いた。

「そうだな、じゃ食い物を取つてくる」

シンは荷を下ろすと、中から細い腕の長さほどの木の箱を背負つた。

「ああ、火熾して待つていいよ」

シンは軽い足取りで山に入つて行つた。

小さな小川に着いた頃には日が沈みかけていた。

夕陽に照らされた小さな滝の上に一頭の鹿が水を飲んでいた。
「さてと・・・」

シンは呼吸を整えると、ふんっ！ と両手を合わせ、ゆっくりと手を広げていった。

すると背中の箱から一振りの剣が手の動きに合わせて出てきた。剣はシンの意のまま自在に宙を舞つた。そしてシンが鹿に向かって腕を向けた瞬間、剣が鹿の首を貫いた。シンは仕留めた鹿に近づきながら剣を戻したときだつた。

（誰かいる）

シンは悟られないよう気配を伺いながら獲物を担ぐと、ゆっくりとアキムの待つ場所へ歩きだした。

日が完全に沈み、月明かりの森の中を進むと大人一人ほどの高さの場所を飛び降りた。

（あれ？ 消えた？）

木の上に身を隠して見ていた人は、シンの姿を見失つた。気配を殺しながらゆっくり降りていく

慎重に辺りを伺いながら消えた所に近づいた。

（ここを降りて行つたのね・・・）

上から覗き込むと行き先の気配を探してみた。

ハツと後ろに気配を感じたときには振り返る間もなく腕を極められ口を塞がれていた。

「静かにラン、ここで何している」シンはゆっくりと口から手を離した。

「ああっぴっくりした！ 気付かれないと思つたのに」

シンの顔を見る少し安心した表情を浮かべた。

「バカなことをして、レイが心配するだらう？」

「母さんには言つてきたわ、駄目つて言われたけど。それよつさつきの技は何！？ 私にも教えて！」

ランは目を輝かせて聞いた。

「見ていたのか？　でもこれはまだランには使いこなせない、まだ
まだ修行が必要だ。しょうがない、夜が明けたら帰るのだぞ！」

「ええつゝ 私も連れて行って！　もう退屈でしょうがないの！」

「駄目だ、約束だ」

すでにアキムは火を熾して待っていた。

「アキム、待たせたな。客が一人増えた」シンの影からランが顔を
出した。

「こんばんは」 アキムさん。見つかっちゃいましたー！」驚いた
顔でアキムが言った。

「ランちゃんじゃないか！？　どうして！？」

「まあ、色々あります」

「どうしたかは知らないがランちゃんなら大歓迎だ！　飯食べるだ
ろ？　まつててな、いま美味しいの作るから！」 そういうと支度にか
かった。

「それにしてもランちゃん綺麗になつたな」 僕がもうちょっと若
かつたら嫁に欲しいくらいだよ。誰か意中の人はあるのかい？」

「いませんよ」 街に行けばそういう人がいるかもね。でも私、父
さんよりも強い人じやなきやイヤだな」

「ランちゃん、そりや難しいな。シンより腕のたつ人はなかなかい
ないぞ？　わしもシンとは長い付き合いになるが、そんな奴は見た
事ないな」 それを聞いたシンは笑みを浮かべて言った。

「世の中、強い人は幾らでもいる。確かに身を守る強さも必要だが、
人としての強さ、優しさを持つていないと世の中渡つてはいけない。
ランはまだまだ目先の強さを求めすぎる、それしか見えていない。
まだまだ色んな 事を学んでいかなきゃいけない」

早朝ランが目を覚ますと二人は食事をしていた。

「ラン、これを食べたら家に帰るんだ」シンが器を渡すとランは頬

をふくらませた。

「私も行く！ もつと色々なもの見たいし知りたいもの！」

「次の時は連れていくから、だから今日は帰りなさい」

「毎回そう言って・・・駄目って言つても付いて行くから、仕事の邪魔はしないわ！」

出発の支度が出来ると2人は荷を持った。

「ラン、 街道に出たらそこから家に帰りない。 この次は必ず連れていくから」

ランは返事をしなかつた。 ふてくされた顔をしながら歩きだした2人について行つた。

街道が見えた頃、 アキムがランの機嫌をとつて話かけた。

「ランちゃん、 シンも次は必ず連れていくって言つているから今は家に戻つた方がいいよ。

レイも心配しているだろうし」

しばらく行くと街道に出た。 人通りは無く鳥の鳴く声だけが聞こえた。

「ラン、 ここでお別れだ。 気をつけて帰るのだぞ」

ランは、 むつ！ とした顔で答えた。

「どうしても駄目なの！？」

「次は必ず連れて行くから、 言つ事を聞いてくれ」 ランの肩をたたくと諭すように言つた。

そこにアキムが口を挟んだ。

「シン、 あいつ何だ！？」 シンとランはアキムの見ている方を向いた。

「助けてくれ！」

街道の先から男が一人、 着の身着のまま必死にシン達のもとに駆けってきた。 何事かとシンが荷を置いて、 男のもとに駆け寄つた。

「どうした！」

「いっちに来る化け物が！ 助けて！ 早く逃げないと！」

「落ち着け！ 何があつた！」

男は何かに驚いた様子で「あんたたちも早く逃げろー」と言い放つとすぐに走り出した。

「おい！ まて！」走り去る男の驚き方は尋常ではなかつた。

「シン、どうした」アキムとランはすれ違いに走り去る男を見ながら走り寄つて聞いた。

「分からぬ、何かに驚いていた」シンは男を見送りながら答えた。
「見て！」

ランが街道の先に現れた二人の女性を見つけた。

「そこの人、助けて」

近づいて来る女性は何やら街の客取りの格好をしたこの辺りには似つかわぬ姿だつた。

それを見たアキムは前のめりになつた。

「いや、いい女だな。こんなに綺麗な人は見たことないぞ」

三人の手前で、女が肌蹴た所を繕いながら言つた。

「良かつた、わたしあち追われてゐるのです」

シンは女の首辺りが肌蹴ている所に目がいくと首の動脈が少し動いたのを見逃さなかつた。

アキムとランを自分の後ろに下がるように手で指示した。

「誰に追われている？ それに汗をかいていないが？」シンの口調が変わつた。

その変化に気付いたアキムとランは咄嗟に身構えた。

「そう？ 気付かれたのではじょがないですね」女の手が瞬時に伸び、シンの首を掴んだ。

「父さん！」「シン！」

女の姿は蛇のような顔つき、体は一部が蛇のようではあるが女性の体を留めており、足の辺りはムカデのようであつた。

シンは掴まれた腕から逃れようともがいた。

それを見たランがシンを飛び越えて切りかかったが気付いた蛇女がもう一方の腕を伸ばした。ランはそれを剣で払うと幾つかの小さな球を間髪入れずに蛇女の顔を目がけて投げるが、それを硬い頭の頭部で受けた。

シンはそれを見逃さず腰の剣を抜くと掴まれている腕を切った。

「があつ！ やつてくれるじゃないか！」女は切られた腕を戻すと体に取り込んだ。

「ひどいことするね～！ こうなつたらみんな食つてやる～」顔に似合わず色っぽい声だ。

シンは腕を外すと、投げ捨てて言った。

「きさまら魔人か！ なぜこの国にいる！」

「魔人！？」ランは剣を構えながらシンに近づいて聞いた。シンは首をさすりながら続けた。

「世界には我々人間の他にも違う種類の人人がいる。ただ魔人だけは悪でありそれ以外の何ものでもないとも聞いた」とすると、もう一人のまだ人の姿の女が言った。

「へえ～ いい話じやないか、こんな所にまで知られているとは。魔人ね～？ でもさつきの街の奴らは何にも知らなかつたようだね～ おかげでいい食事にありつけたよ。まあ一匹逃がしたけどあと の楽しみにしておこうじやないか」

「なんだと！ ジャあ街の人達は！？」アキムが声を荒げて聞いた。

「もう消化したんじやあないのかね～」

蛇の女が復元した手で腹を摩りながら言った。

「じきにお前達も同じ運命さ～ 覚悟しな！」

再び蛇の手が伸びると、シンとランに襲いかかつた。それを互いにかわすとシンはアキムに言った。

「アキム！ 千術箱を！」

「分かつた！」

アキムはシンの荷を取りに駆けだした。それを見た後ろの女が突

然蜘蛛のような顔つきの姿に変化して

口から白い糸のようなものを吐き出した。それはアキムとの距離を一気に縮め、アキムの背に張り付いた。

「なっ！」

アキムは抵抗出来ずに勢いよく引きずり戻されると蜘蛛女が口を大きく開いて待ち構えた。

「まざい！」

シンが白い糸に切りかかつたが、切りかかるうとしたとき片足を掴まれた。

「あんたは私の獲物だよ！」蛇の手に捕まるといき勢を崩して倒れた。

シンは引きずられるのを必死に抑えつつ握っていた剣の柄を下に持ち替えると力を込めて剣を振りおろした。アキムの体は意思を失つていたがそれをシンがとらえた。

「アキム！ ランを連れて逃げろ！」シンは蛇の女に引き寄せられながらも叫んだ。

「舐めた事をしてくれるね～！ 逃げられると思つていいのかい？」

蜘蛛の女が口から無数の糸をチヨロチヨロ出しながら近づいて来た。

少し離れた所にいたランは、アキムが取りに行つた千術箱を再び取りに駆けだした。

「何をしようつてんかい？」

蜘蛛女がランに糸を放つたがランは飛んでかわすと荷の中に昨日シンが使つていた千術箱を見つけ、それ目がけて飛びついた。が、同時に糸がランの胴から両足を囲つように捕え地に叩きつけた。

「ラン！」シンは引きずられながら叫んだ。

蜘蛛女はランを身動きさせぬまま引きずり寄せてきた。だがランの両手にはしっかりと千術箱が掴まれていた。

シンを手元に引き寄せた蛇の女は言った。

「姉さん、先にこいつ食つてもいいかい？」

「ああ食つちまいな、そいつもあんたにやるよ」シンを掴んで離さないアキムを見て言った。

ランは隙を見て千術箱をシンに向かつて投げた。

「父さん！」必死の願いを込めた千術箱はアキムが掴んだ。しかしシンに渡した瞬間、蛇女の手が千術箱を奪い取った。

「そんなに大事な物なのかい？」

「ああ・・・」ランは絶望と自身の無力感を感じた。

「姉さんこれ大事な物らしいよ。どうする？」

すう～っと蛇の手が伸び、蜘蛛の女に渡した。それを少し眺めて言った。

「まさかこんな木の箱で私達をやるのってんじゃないだろ？ね」2人が笑いだした。

「これじゃ私たちの世界になるのも時間の問題だよ。こんな物で殺りあおうってんだから」

言いつつ蜘蛛の女が千術箱を後ろに投げ飛ばした。

「くそっ！」アキムは、拳を地に叩きつけた。

シンはランを見たがランも無力感を感じた目でシンを見つめた。

「ラン、すまない」

「父さん」

2人の会話を聞いていた蜘蛛の女が言った。

「あらまあ？ 泣けてくるじゃないかい？」

「姉さん、せつさと食つてわざの男食つてこい！」

「ああ、そうしよう」

蜘蛛の女が大きく口を開けた。ランは何とか引き寄せられまいと必死に地面にしがみ付いた。

「ラン！」「ランちゃん！」

2人の声も空しく蜘蛛の女の足もとまで引き寄せられたときだった。

青い閃光が蜘蛛の女を貫いた。

「なに！」

一瞬呆気に取られた蛇の女が光の元を辿った。

「当たつた！」

遠目から銃を構えた人が叫んだ。その人は続けざまに蛇の女に銃口を向けた。

咄嗟に蛇の女はシンを持ちあげると盾にした。

「なんだ！　きさま！」横で蜘蛛の女が蒸発していった。

「姉さん！」

次の瞬間、蛇の女はシンを離した。

「なに！」蛇の女の腹から剣が突き抜けていた。

「お返しだ！」アキムは剣から手を離すと後ずさりした。

「父さん！　これ！」

逃げだしていたランは千術箱を持つてシンに駆け寄つた。

「ラン、すまない！」

シンはランを掴むと蛇の女から離れた。そしてすばやく千術箱を背負うと手を合わせた。

『 むんつ！ 』

千術箱が金色の光を放ち剣が幾つも連なつて勢いよく飛び出すると、宙で螺旋の花を描き中心の剣が蛇の女に向いた。

「なにを〜！」

蛇の女に刺さっていた剣は溶け、身震いを繰り返すと大蛇となり口から大量の炎を放つた。

シンは数千の剣を操るとそれはシンとランの前で盾となつた。その炎を弾きつつ次にシンが合図をすると剣は針のよう飛び出し大蛇をとり囲んだ。

「私に剣など効かぬ！」

大蛇の鱗の1つ1つが異様に膨れあがると硬い皮膚へと変わり、それを見たシンは大蛇に叫んだ。

「ただの剣なら効かないだろ？！　だがこれはただの剣ではない！」
シンはさらに力を込めると一つ一つの剣は赤黒い雷をまとった。

「そんなものの効かぬ！」

大蛇はどす黒い炎を吐き出した。だがシンの赤黒い雷をまとった剣は空に向けて螺旋に回転すると天高くそれらを送り出した。

「なんだと！」

「覚悟しろ！」

シンが合図をすると大蛇を取り囲む剣先をすべて大蛇に向け、竜巻の如くその輪が一気に縮まつていった。

「ぐあああああ！」

切り刻まれながら蛇の女の絶叫が少しづつ消えていくと螺旋の輪が徐々に回転を抑え、シンの合図で上空の剣から一本ずつ千術箱に戻つていった。大蛇の居たあとには黒い煙が立ち込めていた。

「父さん！　すごい！」ランがシンに飛びついた。そこにアキムも駆け寄り興奮冷めやらぬ様子で言った。

「相変わらず凄い破壊力だ、久々に戦ったシンを見たよ！」

「すまない、俺も油断していた。ラン、心配かけたな」

「そんなことない！　父さんがこんなに強いなんて知らなかつた」興奮が冷めないランはさらにシンに抱きついた。

「おーい！　大丈夫か？」銃を腰にぶら下げた男が走つて來た。

「おお！　あんたか、さつき助けてくれたのはアキムが笑顔で男の肩を叩いて聞いた。

「ああ、うまく当たつてよかつた！　それにしてもあんた強いな～それにさつきは何だったんだい？」

シンが答えた。

「あれは恐らく魔人だ。私も話に聞いていただけだったから油断してしまつた。

危ない所だつた、助けてくれて感謝する！」シンは男の肩をアキム同様に叩いた。

男は頭を搔きながら照れくさうに返事をした。

「いや～ そんなに褒められると、まいったな」

アキムはその男が気に入ったのか、今度は肩を抱いて言った。

「いやいや、本当に助かったよ！ あんた名前なんていうんだい？」

「ああ、サルージつていいます」

「サルージか、いい名だ。お礼に今夜一杯おごらせてくれ

「いいね～！ だけど連れがあとから来るから宿を探さないといか

んので」

「なら心配要らない。俺の知っている宿があるから、そこに案内するよ」

そこに先ほどの蛇女の言葉を思い出したランが心配そうに言った。

「アキムさん、さつき街が・・・」

アキムの顔が一転した。

「そうだつた、知り合いが心配だ。シン急いで！」

「そうだな！ サルージさん、一緒に来てくれると思強いのだが

「ああ、一緒に行くよー！」

思いがけない状況ではあつたがランは一緒に街に行くことになった。

シンとレイ

シンとレイ

オラルとスー・ランは口も傾いたころ、その街に着いた。

「この辺り、何があつたのかしら？」

「ああ、誰もいないな」

通りの家には人影も無く静まりかえっていた。

「サルージは何処まで行つたのかしら？ 私が野宿嫌いなの知つて
いると思うけど」

辺りを見ながら一人が馬を進めていると先に見える家の煙突から煙
が上がつていて見えた。

「ねえ、あそこに誰かいるのかしら？」

「そうだね、行ってみよう」

小走りに馬を走らせ、その家に近づくと何やら笑い声が聞こえた。
聞き覚えのある声にスー・ランが気付いた。

「あの笑い声！ サルージだわ！」

スー・ランが駆けだすのを見て苦笑いをしながらオラルが呟いた。

「あいつ、もう飲んでいるな・・・」

その家の馬止めに着くとスー・ランはすかさず馬を降り勝手に家に入
るなり呼び捨てた。

「サルージ！」

家の中にいた全員が振り向いた。

サルージはスー・ランに気がつくとあわてて椅子から立ち上がった。

「ああ！ スー・ランさん、いま迎えに行こうとしていた所です
だいぶ慌てたのか酔つた勢いもあってスー・ランに近づいたとき転
んだ。

「あはは、大丈夫ですよ ちょっとつまずいただけです」

「大丈夫かい？　だいぶ飲んだからな～」言いながらアキムはサルージを起こした。

「こりやまたべっぴんさんじゃのう～ サルージのいい女かい？」カズチがスーランを舐めるように見て言った。

「冗談じゃないよ！」

スーランはサルージに近づくと頭を撫でながら言った。

「だいぶご機嫌だね～ どれだけ探したと思っているの」徐々に頭を撫でる手に力が入った。

「すいません！　ちょっと飲んでもすぐに迎えに行こうと思つていたんです！　信じてください！」

サルージはスーランを拝みながら必死に御願いをした。

「まあまあ娘さん、何があつたか知りませんが許してやってください。サルージさんは我々の命の恩人なのです」シンが近づいて言った。

横目でシンを見たが腹立ちが収まらないスーランはサルージを見ると「恩人？　こいつが？　今度は何をやらかしたんだい！」言いながらスーランはサルージの首を絞めた。そこにオラルが入つてくるとすまなそうに頭をかいだ。

「スーラン、もういいだろ。何か事情があるらしい

落ちる寸前のサルージを見かねて言つとスーランが乱暴に手を離した。

「だんな、助かつた・・・」

オラルがサルージを立ち上がらせると聞いた。

「サルージ、こちらの方は？」

「はい。ここに来る途中で知り合つて、それで一緒にきました」サルージは首を摩りながら答えた。

「私はシンと申します。こちらが娘のラン、仕事仲間のアキム、そしてこの家のカズチです」

シンが順に紹介をした。

「さきほど魔人と思われる女の2人組に襲われまして危うい所をサルージさんに救われました。

「さきほど魔人と思われる女の2人組に襲われまして危うい所をサルージさんに救われました。」

「オラルはサルージが命の恩人と聞いて抱えていた肩を優しく叩いた。

「そうですか、サルージがお役に立てて何よりです。ところでこの街、何があったのですか？」

「はい、恐らく先ほどの魔人達により・・・幸いカズチは街から出ていて助かりました」

「魔人、西の国と何か関係があるのでしょうか？」

「二人の会話に、ほろ酔いのカズチが割つて入つた。

「教えてやるう、魔人の国のアルセルディムが滅んだのじや。魔王を含め力のあつた魔人達は皆ことごとくやられた。それに乗じて下つ端の奴らがここぞとばかりに好き勝手を始めたのじやよ。アルセルディムを滅ぼしたのはどうやら魔界の者らしい。奴らこの世界を自分達の世界にするために動き出したようじや」

「そんな！じゃあ私達みんな殺されちゃうの！」ランがカズチに聞いた。

「さて、この先どうなるかはわしにもわからん

「そんな・・・」

そこに息を吹き返したサルージが言った。

「ランさん、大丈夫ですよ！こちらのスーランにかなう奴なんていませんから。それにシンさんの2人がいれば敵なんてありやしません！」

「スーランさん、でしょ！調子のいい事言つて！」スーランはサルージの耳を持ちあげた。

「いたた！ホントです！」

さらにカズチがランの心配を払つように声を掛けた。

「確かにシンが居れば安心じやよ。シンは魔人よりも強いからの」シンはスーランとサルージのやりとりに笑みを浮かべながら背負

つていた千術箱を外した。

「私ではなくこの先祖から代々受け継がれた千術箱が命を救ってくれた。過去にも恐らく今回と同じような事があつたのだと私は思う。今の平和があるのは先人達が勝ち取ったものかも知れません」「確かにそうかも知れんな。それで、これから歸はざるのじや？」

？」

シンが答えた。

「これから私はランを連れて家に戻ります。レイが心配ですの」「「そうか、じゃが夜が明けてからにした方が良いのではないかの？他にもうろついている奴が居るかも知れんし」

「確かに。しかしレイが心配です」少し考えたがやはり胸騒ぎが収まらないシンは決断していった。

「それなら私だけ戻ります。カズチ、ランを今夜預かつてもらえませんか？」

明日、レイを連れて戻つて来ますので」

「まあ、シンなら夜通し走れば着くじやうが。レイを連れて戻つて来るとなるとな、ここも無事とは限らんし」
そこにオラルがシンに近づいて声を掛けた。

「シンさん、私の馬を使って下さい。明け方までにはレイさんを連れて戻つて来られるはずです」

「良いのですか？」

「はい、急ぐ旅でもありませんから。それに今日はこの辺りで宿を取ります。ランさんも皆と一緒に心配無いでしきう」

「ありがたい！ 感謝します！」

一刻も早くレイのもとに駆けつけたかったシンは、その申し出に遠慮はしなかつた。

カズチが言った。

「皆、今日はこの家に泊るといい。シンよ、心配しないで行つてまい！ あとは任せとおけ！」

シンは月明かりを頼りに駆けていた。

(この馬はまるで私の家を知っているかのように躊躇せずに駆けていく。オラルさん、何者かは知らないが良い馬を持っている)
感じていたよりも早くにアキムの家の辺りを過ぎた。

(あの峠を越えればすぐだ !)

シンは家との距離が近づいてくると、急にレイの事が心配になってきた。

(レイ、無事でいてくれ !)

近道である峠の獸道を降りていくと家の辺りに火が上がっているのが見えた。

「レイ！」

シンが叫ぶと馬もそれに反応して速度を上げた。

家の近くに来ると火は家から離れた所で数か所燃えていた。
家の前に駆け寄ると叫んだ。

「レイ！　どこにいる！」

シンは馬から飛び降りると家の戸を開けた。

「レイ・・・」中を見渡したが家には誰も居なかつた。

ただ暖炉に火が燃ふつてているのを見るといつもさつきまでいたらしい。
シンは家の回りを探した。

「レイ！　どこだー！」

シンの声は山に響いたが返事はなかつた。

シンは必死にレイの行きそうな所を全て探したが、どこにもいなかつた。

気がつくと、うつすら日が昇つてきていた。

(何処にいったのだレイ・・・)

重い足取りで家に戻ると明かりの射した家の中に入った。

家の中は特に荒れている様子もなかつたが、普段は使つことの無いシンがレイの為に作つた剣が無くなつていた。

(何があつたのだ・・・)

剣の置いてあつた場所を見ていたとき、やややく声がした。シンは一瞬、身構えた。恐る恐る振り向くと普段と変わらないレイがいた。

「レイ・・・」

レイが歩み寄つてくるとシンは無意識のうちに警戒しながらレイに近づいた。

「シン・・・」

レイの田を見たシンは、いつものレイを見ると優しく抱きよせた。レイの温もりを感じ、安心したシンはレイを見て言つた。

「心配したぞ、何があつたのだ」

「ええ、昨日畠から戻つてきて食事の準備をしていた山の向こうのお婆ちゃんが訪ねて来てシンは居ますか？ って。私がシンは街に行きました、と答えると急に態度が変わつて、なら都合がいつて」

「お婆ちゃん？ トマ婆さんの事か？」

「ええ・・・」

「確かに、トマ婆さんはろくに歩くことも出来ないはずだが

「そう。不思議に思つて見ていたら急に鉈を持ちだして・・・咄嗟に私も剣を持つて。そしたら『冗談じやよ』って、そう言つて帰つていつたの。外に出たら誰も居なくて、それで怖くなつてあなたを追つて街の方に行つたわ。だけどランが戻つて来たらと火を熾して遠くから見ていたの」

「そうだったのか、無事で良かつた。ランは無事だよ、街で待つている皆の所へ行こう」

「そう、良かつた。街には人がいるの？」

「ああ、仲間以外にもまだ居ると思う」

「そう！ では早く行きましょう！」

急に元気になつたレイを、その時は変に思わなかつた。

シンとレイを乗せた馬は、昼過ぎ辺りに街に着いた。外で帰りを待つていたランが気付いた。

「あつ！ 帰つて来た、父さん！」

ランが全身で手を振るとシンも手を振つて返した。

「母さん！ ごめんね心配かけて」

レイが馬から降りるとランを抱き寄せた。遠巻きに見ていたオラル達は互いに微笑んだ。

「あれがレイさんかい？」こりやまた別嬪さんじゃのう、「カズチが手を翳し覗きこむようにして言つた。

「相変わらずスケベなジジイだよ」スー・ランが言つと、横からサルージがシン達のもとに走つていった。

「シンさん、疲れたでしょう」そうこうと馬の手綱を持つた。

「ああ、すまない」

シンがオラルに寄つて言つた。

「オラルさん、ありがと。助かりました」

「いえ、レイさんが無事で良かつたですよ」

「皆さんに心配かけました」シンはレイの肩を寄せて言つた。

「私の妻のレイです」

「レイです」軽く余糸をして答えた。

「近くで見るとますます綺麗じやの～」

「ジジイ！」

「ランちゃんも、レイに似て美人になること間違ひ無しだ！」アキムの一言には皆が頷いた。

オラルがシンに言つた。

「シンさん、晩まで少し休んでいて下さい。我々ももう少しこの街で情報を得てから発つことにしました。今夜はゆっくり皆で飲みましょう」

「そりですか、ならあとで食糧を取つて来ます」

「シンさんいって！俺たちに任せてゆっぴしててくれよ… 酒も飯も十分に用意出来るからよ…」

サルージがアキムの肩を抱きながら言つた。

「あんた達は飲めればそれでいいのでしょうか、まったく…」スランが腕組みをしながら言い放つた。

「あの、私も行つていいですか」ランがオラルに聞いた。

「そうだね、シンさんさえ良ければ」

「オラルさん達と一緒になら安心です。ラン、迷惑掛けるなよ

「はい！」

「では一応サルージの馬を置いてきます。スーランとランちゃんは俺の馬に乗るといい」

二人が馬に乗つたのを見たサルージが言つた。

「こりやあいい、なんか美人の姉妹みたいだよ」

「そうかい？かわいい妹に手を出すんじゃないよ…」

「そりゃあもう！わしもまだ死にたくないですから、さあ行きますよ～」

サルージが手綱を持つて歩き出した。

「それでは夕暮れまでには戻ります」オラルが言つとシン達を残して4人は街に出て行つた。

街の中心付近は誰も居なかつた。

「この辺りも昨日の奴らにやられているのか」サルージが言つた。

「少し調べてみよう。サルージ、この先に人がいるか見ててくれ。スーランはランちゃんとここに居て様子を見ていてくれ。俺はあの丘の辺りを見てくる。何かあつたらいつものように知らせてくれ」「任してくれ！ついでに酒でも買つてくるよ～」サルージは腰の銃を叩くと走つて行つた。

「サルージ、なにか嬉しそうだよ。何かあつたのかね？」

スーランが言うと「ああ、そんな感じだ。最近妙に自信つけたのかも」オラルが笑つて答えた。

「そうだランちゃん。これを使うといい

そういうとオラルは馬に括りつけてある一本の刀を取り出した。

「何も無いよりはましだから」

ランは馬から降りてその刀を受け取った。

「これ、こんなに立派なもの。オラルさんではないのですか?」
馬上からスー・ランが優しい口調でランに声を掛けた。

「ランちゃんオラルはね、あんたが気に入ったんだ。だから遠慮することないよ! それにオラルはさ、刀は使わないから」

「そうですか、でも」

「抜いてじらん」

「はい」

ランはそっと刀を抜いた。

「これ・・・」

その刀はシンが作る物とは違ひ漆黒の輝きを放っていた。
「この刀は使う人の技量によって強くもなれば弱くもなる。ランちゃんにピッタリの刀だと思つな」

ランは嬉しそうに鞘に納めた。

「ありがとうございます。大事に使います」

スー・ランが馬から降りて「こつやつて付けるんだよ」いいながら
ランの背中に刀を結び付けた。

「いいじゃないかい! 似合つているよ!」

「ああ、ピッタリだ!」ランはちょっと照れくさそうだった。

「慣れるまではスー・ラン姉さんに教わるといいよ!」

冗談交じりにオラルがいうと、スー・ランは満更でもない様子で「そう言わると何だか妹に見えてきたね」と笑みを浮かべて言った。

「それじゃあ、行つて来る」

軽く手を振つてオラルは丘に向かつて行つた。

「あの、スー・ランさん? オラルさんはどちらの方ですか?」

「そうだね・・・正直なところ私もよく知らないんだよ。ただ何か安心していられるんだよね。前に私も助けられてさ、それから探しに追いかけて。そんなこんなでいま一緒にいるつて所かな？」

「そうですか・・・」

「まつ、そのうちわかるでしょうー。さてと、この辺り見てみようか」

「はいー！」

「ただいまー」

「待たせたな！ 酒とイノシシ持つてきた！」

オラル達は日暮れ前にカズチの家に戻ってきた。

「どうだつた？」アキムがサルージに聞いた。

「まつたく何処も彼処も誰もいやしない。まあ街外れに何人かはいたけど。皆逃げ出す支度をしていたよ」

「そうか。たいして人の多い街じゃあ無いから、何とか逃げ延びてくれればなあ」

「ラン？ それは？」シンがランの刀に気付いた。

ランは刀を外して見せた。

「オラルさんが使つてくれって」

オラルがランの肩をポンつとたたくとシンに言つた。

「ランちゃんに使つてもらうのがいいと思つて。大した物ではないので気にしないで下さい」

「そうですか、何から何まで」

それから皆の話では期待したほどの収穫もなかつた。

日も暮れたころ食事を始めた。

「だんな、これからどうします？」サルージが聞いた。

「そうだな、ここでは情報が入らないから。カズチさん、ここから何処へ行けば情報などありますか？」

「そうじやのー イタール川を渡つてヨマダイの国か南のハルディ

ス国か。ハルディスはアルセルティムの隣の国じゃから危険じゃ。ヨマダイへみな逃げ出しておると思われるから、そちらの方がいいじゃろ？」

「そうですか、ではそのヨマダイへ行ってみます。シンさん達はどうしますか？」

「この辺りも安全では無い以上、留まることは出来ませんし」

スーランがオラルに聞いた。

「ねえ、ルードシアのマリーさんの所なら安心なんぢやない？」

するとサルージが、ぽんーと、手を叩いて言った。

「そうだ！ あそこなら不自由しないさ！ なんせ守護神様もいるらしいからさつ」

「ルードシアですか。確かに大きな湖に囲まれていて独立している国だとは聞いたことはありますガ」

少し先の見通しが見えて顔の和らいだシンにスーランが言った。
「でもサルージみたいのがいつぱい居るから気を付けてよ！ ランちゃんは特に！」

「勘弁してくださいよ まるで変人扱いじゃないですか。俺ぐらいい良い男はなかなかいませんよ！」

「アハハ、サルージはいいやつだよ！ まあ好き嫌いはあるだろうけど？」

そこでカズチが言った。

「ルードシア、隣の国じゃが」の歳まで行つた事がないしの。アキムよ、どうする？」

「ここも安心出来ないから、シンが行くのなら俺も一緒に行くよ」

「そうじやのう。一度ここを離れた方が良いかも知れんな。そのオラルさんの知り合いでマリーさんのところへ暫く身を寄せてもうつかの」

「そうと決まれば今夜は一杯やろつて。」 サルージがうれしそうに口々を持ちあげていった。

マド様！現わる

マド様！現わる

深夜、皆が寝静まつた頃にアキムが用を足しに外に出た。外は雲一つなく満月の月明かりに照らされていた。

「はあ～　きれいなお月様だよつと！」

ブルブルと体を震わせ、まだ酔いも冷めやらぬなか鼻歌交じりに用を足し終えて振り返った時だった。

「うわっ！？　レイ？」

「ええ、驚かしたみたいね。なにかしら目が冴えちゃって。見て綺麗な月・・・」

酒で火照っているのか月明かりなのかは分からなかつたが月を見上げたレイは妙な色氣を出していた。

胸のふくらみが少し覗きスラリと伸びた足が月明かりでその輪郭をとらえていた。

アキムは変にドキドキしながら見惚れた。

「アキム、ねえ・・・少し歩かない？」

「えつ？　ああ、いいですよ」アキムには断る理由が無かつた。

今までこそシンとレイは夫婦ではあるが、幼馴染とはいえアキムも幼少の頃からレイに好意を持つていた。

歩くレイの後ろをついていきながらその色氣のある腰付きに見入ってしまっていた。

家から少し離れた所でレイが聞いて来た。

「街には居なかつたのでしたつけ？」

「ええ、昨日の2人組みの女に食われたのではないかと、何かおか

しなことになつてきていますね

「その女を倒したのでしょうか？」

「ええ、サルージとシンが。そりやあ見事なものでしたよー。レイにも見せてやりたかった！」

酔いの勢いもあってかアキムは得意げに答えた。

「そう・・・ではいま襲われたら・・・アキムは私を守ってくれる？」

じつと見つめ合ぐるレイにアキムはゾンツと胸を叩いた。

「もちろんー。任せてください」

「よかったです・・・」

そういうふうとレイはゆっくりとアキムに近づいて抱きしめた。

「なつ・・・」

アキムは金縛りに遭つたようにそれを拒否できなかつた。

アキムはレイの胸のふくらみがゆっくつあたるのを感じるとそれに逆らえずレイの背に手を回し抱き寄せた。

肌の温もつをお互いに感じるとレイがさわやかだった。

「ちょっとお腹空いてきました」

「えつ？」

すると抱いている手の感覚が硬くなるモノを感じた。

アキムはレイの腕以外にも全身を抱えられるのを感じ、酔いが一

気に冷めた。

「なつ！」

危険を感じ咄嗟に助けを呼ぼうとしたが胸を圧迫されていて声が出来なかつた。

「一人のお返しをさせてもいいから」レイの声が低く擦れた声に変わつた・・・

レイの顔はそのままに身に着けていた衣服は裂け背中には羽根が生えると腕は鎌の形になつていていた。

さらにレイの口が横に大きく開くと鋭利な歯を持つたカマキリに姿を変え、シャー！と声を発するとアキムを丸飲みにするべく頭上で大きく口を開けた。

「まで！」

静かに歩み寄つて来たオラルに気がつくと口を縮めていった。

「なんだ・・・そこで待つていろ、次はお前だ」

「その前に聞きたい事がある。お前たちはアルセルティムの魔人達とは少し違う、何処から來た？」

「魔人だと？ そんな下等なモノと一緒にするのではない！ 我々はジエラ様より生を受けた妖魔人！」

そしてジエラ様の命によりこの世界を我々妖魔人のものとする！」

外の物音に気付いたシンが走つてくるとアキムを鎌で抑えつける大きなカマキリを見上げた。

「オラルさん・・・これは」

「どうやらレイさんに摑り付いていたらしい」

「なっ！ これがレイだつて！？ そんな・・・」

確かにレイだと気付いたのはアキムを抑え付けている辺りがまだ女の姿を残しさうに完全に顔は変化しておらず、かすかにレイの面影を残していた。

「なんだ？ 一人ずつ食つてやろうと思つたのに。まあいい、まとめて食つてくれるわ！」

カマキリになつたレイが再びアキムを丸飲みにしようとしたとき、バシッバシッと大きく開けた口に石飛礫が当たり一瞬怯んだ。

「やめて！ 母さん！」

ランが駆け寄つてくると異変に気付いたサルージとカズチも続いた。

「なんてこつた！」

ランの声にカマキリの中のレイが少し正氣を取り戻していた。

「ラン・・・いま・・・待つて・・・いて」

「レイ、今助ける！ 待つていろ！」 シンが飛び出そうとしたのを
サルージが抑えた。

「まつたシンさん！ 攻撃するとレイさんも死んじまうよ…」
確かに手を出せばレイにも危害を加える事になってしまふ。 それはシンも良く分かつていただが気持ちを抑えられなかつた。

再びカマキリが正氣を取り戻すと一同を見渡していった。

「揃いも揃つて、これでもくらいな！」 カマキリは羽を広げ、間髪入れずに突風を送り出した。

それを2度、3度と受けた一帯は木もろ共なぎ倒され吹き飛んだ。

ランは咄嗟に飛ばされる木から木へ飛び移つて逃れ、シンとサルージは地に剣を突き立てなんとか凌いだ。カズチは家の辺りまで飛ばされ転がっていた。

「くそっ！ これじゃあ近づけない」 シンが突き刺していた剣を抜くと構えをとつた。

「母さんどうしたら・・・」 ランがシンに寄り添つて言つた。

「近づいても手を出せない・・・」 シンはランを抱き寄せて悔しさをにじませた。

「お前達が最初から勝てる望みなんて無かつたのさー この体を手に入れた時からねえ！」

するとカマキリの後ろにいたスーランが声高々に言い放つた。

「そうでもないさ！ 私達を誰だと思っているんだい！」
「なに！」

カマキリが振り向くと自信たっぷりに構えたスーランを見た。

スーランはランに手でこっちに来るよう命じた。

何の事か訳も分からずにスーランを見た。するとスーランはカマキリの羽に飛びつくとカマキリの全身を雷が走つた。

カマキリは全身が痺れ掴んでいたアキムを離し、少しのあいだ身動きが取れなかつた。

「スー・ラン、アキムまで痺れているぞ。かわいそうに」 オラルが何処からともなく現れた。

「そうかい？ だいぶ抑えたつもりだけど？」

「さてと・・・」

オラルは痺れて動けないカマキリの頭までトントンッとのぼつていくと鷲掴みにした。

「なつ！ なにを！？」

痺れて抵抗出来ないカマキリに言つた。

「あんまり悪さするんじゃないよ。スー・ランが喜ぶだらう？」

オラルが含み笑いを浮かべ、両手に力を込めると黒い煙が立ち込めてきた。

「がああ！ やめろ！」

オラルがカマキリの口元から人のような黒い氣体を引きだした。するとカマキリは見る見るうちにレイの姿に戻つていった。

「レイ！」

「母さん！」

シンとランが駆け寄り徐々に裸体になつていくレイにシンは自分のマントを掛けた。

「シンさん、大丈夫ですよ。少ししたら氣を取り戻します」

オラルが声を掛けるとシンは涙を浮かべて微笑んだ。

「さあ、ランちゃん！ 」 いつを切つてくれ

採り付く人がいなくなつた黒い氣体はオラルの手の上で風船のような氣体に包まれその中で必死に逃げようとあがいていた。

「助けてくれ！ なんでも言う事聞くからたのむ！」

その中から逃げる事が出来ないと確信したシン達はオラルの回りに集まつた。

「そうか、じゃあ一つ聞く。ジエラ様とは何者だ？ そいつは何処にいる？」

「でも本当に逃がしてくれるのだろうな！ 約束しろ！」

「いいだろう、わかった。俺は逃がしてやる」

「えつ？ 逃がすのですか？」ランがなぜ？ という顔で聞くとすかさずスー・ランが言った。

「まあ、見ていいなよ！」

とりあえず逃げるのを止めた黒い気体はオラルを疑いながらも話し始めた。

「ジエラ様はザルギスに居られるただ一人の人間。そして大魔術師だ！ 魔人と共にこの世界を奪い、そしてそのあと魔人共を殲滅するためにひそかに我々が生み出された。だが魔人に匹敵するほどの戦力は今は無い。だから人間にとりついて戦力を増やす。食べた人間はジエラ様が妖魔人として新たに命を吹き込む。どうだ？ すればらしいだろう！ いずれこの世界は妖魔人のものとなる！」

今度は自慢げに風船の中をぐるぐると回り始めた。

「大魔術師のジエラ？ 誰か知っているかい？」オラルが皆に聞いた。

「さあ？」

「聞いたことない・・・」

「ジエラート？ なら」

「それをいうならジユレじゃないのかい？」

「・・・」

「おい誰も知らないぞ・・・」

「なによ！ 知らないだと！？ 確かに海の向こうのそのまた大陸

の向こうの」

声が徐々に小さくなるとスー・ランが黒い気体に近づきバチバチと雷を発する両手で言った。

「嘘つきは死刑だ・・・」

その仕草が楽しそうに見えたのはオラルだけでは無かつた。

「ちょっと！ 本当にすつて！ やめて！ 約束したでしょ！ このうそつき！ うんこたれ！ バカ！ あつ、いえ・・・うそです。ねえ～ ゆるして～ おねがい～！」

「・・・元々の人格は・・・オカマ？」

スーランが覗き込むように見ると口が《へ》の字になつて両手で胸を抑える仕草をしていた。何だかその仕草、愛嬌に少し同情した。

オラルが氣体を撫でて言った。

「まつ、今度生まれ変わったらもうヒマシな人生を送れよ！ さあ、ランちゃん！」

「やめて！ おねがい～！ まだ死にたくない・・・やめろー。この野郎！ 食つちまうぞー！ この・・・出せったら出せー！ ひよりつと～聞いているのー！」

ランはどうしたらいいか分からなかつた。

「あの、私じゃなくて・・・父さんお願ひ」

「ラン、あいつを逃がしたら次に採り付かれた人を切らなくてはならない。それがもし父さんならランは切れるか？」

「えつ、でも・・・」

「ひと時の感情に流されるようだつたら一度と剣は持つな。『生と死』この二つは共存出来ない」

「・・・わかった」

まだ決心のつかないランにオラルが言った。

「ランちゃん、俺はこいつを逃がすと約束した。だからこいつをランちゃんに向けて投げる。こいつが逃げる前にどうするかはランちゃん自身が決めてくれ」 そういうとオラルはもう一方の手をかざした。

すると氣体が真っ白になり、中は見えなくなつた。

「ああ～ たすけて！ もうなんでもしますから～」

「それはランちゃんに聞いてくれ、いくぞ！」

そういうとオラルはランに向けて、真っ白な氣体を投げた。

「えつ！？ あつ！？」

近づく氣体にランは思わず目をつぶり迷いながらも刀を振り切った。

2つに分かれた氣体はランの後ろに流れていた。

刀に受けた感触を確かめるように恐る恐る振り返ると黒と白の入り混じった氣体から少しづつ黒い氣体だけが蒸発していった。残った白い氣体が手のひらほどの大さになつてその場に漂っていた・・・

「んはあ～！ あれ？ あたし何していたのかしら～。 こには誰？ 私はどこ？ あなたかわいいわね～ でも化粧のノリがよろしくなくてよ～。 やだみんなジロジロみて、食べちゃうわ～！ あは～！」

その小さな氣体はさらに小さな羽を一生懸命に動かしている。綿のよくな体にマシユマロのような手足に化粧をしたオカマ？ の顔をしていた。

フワフワ飛ぶとランの肩に乗つて來た。

「お讓ちゃんお歳いくつ？ お化粧のしかた教えてあげてもいいことよ～」

新しいおもちゃ？ 見つけたスーランが走つてくると親指と人差し指で掴んで持ち上げた。

「な～に～ この生き物？」

「ちょっと痛いじゃないの！ もう変態！ わたしデリケートなの！ だれ、あんた！ ん・・・ オバン！」

「誰がオバンよ！ 握りつぶすわよ！」

「うそですよ～」 だけどもう少し前髪上げた方がいいわね～！」

「かわいい・・・」

「えっ？ ランちゃん…これが？」

「はい！ かわいくないですか～？」

ランが両手でスー・ランから受け取るとオラルが近づいてきて言った。

「アハハ、そいつはランちゃんが気に入つたみたいだよ！」

「はい！ でもこれなんですか？」

「たぶん、そのジーラとかいうのが人から抜き取つた魂つてところかな。ランちゃんがその刀で切るときの心の迷いがそいつを成仏させなかつたのかも」

「じゃあ私のせいで…」

「まあ、害は無いからランちゃんが面倒みてやつてよ」

「はい、分かりました。よろしくね！ エットと名前…」

「お・か・ま・で、いいんじゃない？」スー・ランが冷やかし氣味に

言った。

「ダメです！ ちゃんと名前つけてあげないと」

「お～お～ 急に強く出たね」

「だつて…」

スー・ランに押され氣味のランをかばうつむいていつがスー・ランに言った。

「なにちょっと、あ・ん・た！ 私にだつてちゃんと名前ぐらいあるのよ！ 今日からマド様！ とお呼び！」

「マド？ へんな名前」

「なによ、オバン！ やる氣！」

「やつてやる「じやないか？」

「…・・ラン！ やつておしまい！」

「わたし？」

「そうよ～」主人様の言う事がきけなくて…？」

フワフワ飛びながら短い拳を振りまわすその姿にオラル達は笑いを

抑えられなかつた。

「ラン、しつかり面倒を見るんだぞ」

そう言うシンの眼差しはとても優しかつた。

「それにしてもサルージよ。あんた達は何者なんだい？」アキムが聞いた。

「何者つていわれてもなあ、旦那に聞いてみてくれ。俺も良く知らないんだ」

「そうだな、ぜひ私も聞きたい。」シンがオラルにたずねた。

「旅の目的は人探し。で、そいつら集めてこの世界を平和にする事かな。ありきたりだけど」

「平和ですか。しかしあなた方を見ていると信じられる気がします。なによりオラルさんにはなにか不思議な力を感じます」

「そんなことはないですよ、たいして一人では何も出来ませんし」

「いいや！ あんたにはとてつもない何かを感じるー。わしの旦に狂いはない！」

先ほど家の辺りまで飛ばされたカズチが杖をついてやつて來た。

「カズチ大丈夫かい？」アキムが寄つていくと手を貸した。

「ああ大丈夫。オラルさん、あんた達なにかとてつもないことをやろうと考えてないか？ 『世界の平和』あれは本心なのではないのかい？」

「さあ、正直なところ私にもわかりません。ただ時が來たと感じています」

「たしかに何か動き出しそうな気がするよ」ジヤ

そこにフワフワとマドがきた。

「ちょっとー ここまで食つちやべつてーるのー お腹が空いたわ！ 行くわよランー！」

みんな呆気にとられたが、そのうち笑いが込み上げてくると一斉に笑いだした。

「なにちょっと？ 何がおかしいのー ランー やつておしまーー！」

山肌から朝日が昇るのを笑い声が迎えていた。

バトルシップ 武蔵！

バトルシップ 武蔵！

次の日の早朝、オラル達とシンの家族はそれぞれ別の道に進むことになった。

「ではシンさん達も気を付けて。それからマコーさんにようしく伝えてください」

「はい、色々とお世話をになりました。ランの事、よろしくお願ひします。ラン、オラルさん達と一緒に修行を疎かにするのではなくいぞ」

「はい、今度父さんに会いに来きは・・・私の方が強くなつてこるわ！」

「それは頼もしい、十分に気をつけてな」

「はい・・・母さんも元氣で」

「ラン、困つたらいつでも会いに来てね」

「ちよつとー？ 私のこと忘れてない？ 私がいれば鬼のキンタマでしょ！ 私を誰だと思つているのーまつたくうー？ んつー？」

スーランがマードの口を塞いだ。

「あなたは空氣読めないので？ いーといーのなんだから邪魔しないのー！」

「マード、ランを頼んだぞ」

シンがスーランからマードを受け取ると優しい口調で話した。

「おつ？ ろう・・・任せなさい！ ブサイクな大人達からしつかり守つてあげるわ！ 特にこのサルージ。だいたい髪の生やし方にセンスの欠片も感じられないわよ。まつ、そのうちわたしがつ！ ? んつー？ んん！」

今度はスーランが首を掴んだ。

「まったく調子に乗つて！ さあ、ランちゃん後ろに乗つて。いきましょう！」

互いに別々の道を進み始め街道の曲がる手前でランは大きく手を振つた。

「ラン、一緒に行かなくて良かったのかい？」

『ランちゃん』とは呼ばずにスー・ランが気を使って声をかけた。

「別れるのは寂しいけど、でもこの世界の事もつと知りたいしオラルさんから頂いたこの刀を一人前に扱えるようになりたいから」

「あれ？ れれ？ ラン、私がいるから寂しくないんじゃなくて？ どうゆうこと？」

マドが、フワフワとランを中心に回つた。スー・ランがランに「ラン、もう一度切つてみなよ。今度は大人しくなるかもよ？」 そういうと「ちょっと！ バカ言つているんじゃないわよ！ ハゲてんじやない！ ラン！ やつておしまい！」 ランの影に隠れるように拳を突き上げてマドが返した。

そんなマドをランが優しく掴むと顔を近づけた。

「マドがいるから私、寂しくないわ」

ランに見つめられたマドはドキドキして言葉に詰まつた。

「そっ、そ・・・ そうでしょ！ わたしがいれば・・・ ちょっとそここの変態！ 聞いたでしょ！」

フワフワ飛ぶとランの頭の上で中指立てスー・ランにいった。

「はいはい、カマのくせにな〜に照れてんだか？」

「ランちゃんにとつては頼もしい相棒が出来たわけだ！」

サルージがマドを見ると「ちょっとそこ、相棒ですつて？ ご主人様は、あ・た・し・！ 勘違いしないでちょうどいい！」 マドはサルージを指して注意した。

「アハハ、さすがのサルージも太刀打ちできないか。ところでマド、なにが出来るのか？」

オラルが訊ねた。

「何が出来るかですって？ 失礼しちゃう！ 私に出来ない事なんてあんまり……ない？ かな？ いや～ あつたりして！？ やつぱり謙虚でないといけないと思つのよね、人として？ それ得意な事があつていいと思うの……違う？」 横目でチラリと見ながら話すと「ああ、分かったよ」 オラルは含み笑いで返した。

「ちょっと、なに！ 残念な顔して！ 出来ない事なんて無いわよ！ 失礼しちゃう！」

そこへ小走りに高台に駆けて行つたサルージが眼下に見える大きな川を指した。

「だんな、見えてきましたよ！ あれがイタール川ですよ！」 駆け寄つたスー・ランも「いや～ 話に聞いていたよりも随分大きくなっかい？」 手を翳した。

「ああ、この大きさじや橋は無さそうだ。川沿いに沿つて船を探すしか無いな」

川沿いまで来たオラル達一行は道行く人に訊ねた。

「この川を渡るには何処へ行けば良いですか？」 すると商売人風の三人組の中の一人が不思議な顔で答えた。

「この川は誰も渡らないよ？ あんたたち知らないのかい？」

「えつ？ はい、でもどうしてですか？」

「以前は船で渡れたのだが、ここ最近出る船がみんな帰つて来なくなつたのさ。何か得体の知れないモノが沖に居るつて噂だよ。だから河口近くの川幅が狭くなつている橋まで行くのさ」

「そうだったのですか。では、みなさんもそこへ？」

「ああ、そうだ。まあ、三日ほどかかるがね」

お礼を言つと三人は、氣を付けて、というと歩いていった。

「だんな、どうします？」

「やはりその橋まで行かないと駄目かな」

「でもさ、近くに船でもあれば渡れるでしょ？ 川に居る奴を退治

すればいいんじゃない？」

「そこの一…あたし泳げないの…橋まで行くに決まっているでしょ…」ステランにマドが突つかかっただ。

「へえ…あんた水が苦手なんだ…・・・といつが飛べるやつが気にするか？ そうだ！ あんたちょっと行つて船を探してきなよ！」
「はいっ？ そんな手には乗らないわ。そういうのはオバンが行けばいいんじやない？」

ステランがこめかみをピクピクさせるのを見たランが言った。

「オラルさん、私とマドでちよつと先に行つて見てきます」

「ちょっとラン、なにを言つてこりの？ 船なんかで渡つたら危ないでしょ…！」

マドがランの髪を少し引っ張りながら抵抗した。

「せうか・・・ならこの馬で行くといい」オラルが馬を降りるとトンに手綱を渡した。

「いいのですか？」

「ああ。マドには今夜の宿を探してもらえると助かるのだが?」

「は～ しょうがない。やっぱり私が居ないと駄目ね～ いいわよ

！ いいところ探しといてあげる。そのかわり高くつくわよ！」ヤリとマドの扱いを分かつてきたオラルは脇のポケットから短い帯を出した。

「ランちゃんこれを着けて。それからこの小さい方はマドで

「これは？」

「これはこの馬の尻尾で作った帶だよ。身に着けておけば離れていてもこいつが探し出してくれる」

ポンポンと馬を叩いた。

「そうなのですか、お利口のですね

「ちょっと！ 尻尾って！ ウンチとか付いているんじやなくて…？ あんたそういう癖があるのー ラン！ 騙されちゃダメよー

ちょっと… ラン… やめつ… あつ、ひー・・・・・・・

「アハハ、似合つてこるよ…」

強引にマドの首に巻き付けたランを見て『お揃いでいいじゃない？』ステラが笑っていた。

「クンクンと匂いを嗅ぐマドに」では、船を見つけたら戻つて来ます「そういうとマドを頭に乗つけた。

「ああ、ゆっくじ違うから

楽しそうにランとマドは駆けて行つた。

「さてサルージ、ランちゃんが心配なんじゃないの？」

「えっ？ ああ、わかりました。また見つからないよう見つけておけばいいのでしょうか？」行きますよ

「さすがはサルージ！ しっかりと頼むよ！」ステラが馬を渡すとサルージは「はい、しっかりと仕事をしてきます」いいながら渋々駆けて行つた。

「オラル、サルージもだいぶ分かつてきたんじゃないかい？」

「ああ、でもまだまだ銃を扱えていない。今ままでは【奴ら】に太刀打ちできない

「そうだね。で？ ランはどうなの？」

「ランちゃんは優しい子だから、あの優しさが強さに変われば刀の持つている力を發揮出来ると思つよ。

俺が言うのも何だがあの刀はとんでもないから

「へ～ その刀の本気を見てみたいね」

「そのうち見られるかも知れないよ。サルージにもなるべく早く使いこなしてもらいたいよ。さて、ビッちが先に使いこなせるか」ステランは改まってオラルに聞いた。

「わたしはどう？ ちゃんと使いこなしている？」

「ああ、でもそれ以上は使い手次第だよ。なんなら相手をしようか？」ステランの目をジッと見た。

「ちょっと・・・ドキドキするからやめておく

それなりに恥らしいながらも胸に手を当ててステランは照れ笑いで返

した。

「冗談だよ・・・」

「ちょっとー！」

その頃、ランは川岸を気持ち良く走っていた。

「ラン？ 本気で船なんて探してない？ 適当に休憩すればいいんじゃないなくて？」

「駄目！ マドは飛べるからいいけど私達は船で渡るしかないの。マドが大きい船にでもなつて私達を連れて行ってくれるならいいけど？」

「ん~？ そうね、ランだけならいいけど？ 他は嫌ね~ だつてあれっ！？」

「臭いから？」

「あれっ！？」

「えっ？ マド本当なの！？」

「ちょっと！ あたしあんたの『主人様』でしょ！ あたしに出来ない事なんてないの！ でも皆には内緒よ！」

「そりなんだ！ すごいね！」

「ちょっと！ 内緒だつて言つてているでしょ！」

「分かつた！ 内緒にする。で、他には何が出来るの？」

「それは、ヒ・ミ・ツ。だつて謎めいている方が魅力的でしょ？」

「そつか、でもマドが人の姿だったらどういう格好しているのかな

？ 顔とか」

「ちょっと！ あたしが人の姿になつたら世の中の男はイチコロよ！」

「なんだ？ 女性じゃなくて？」

「男も女もよ！ ランもあたしに惚れちゃうからー！」

「へえー」

「あら？ なにラン？ 疑つているの？ まあいいわ、その時になつたら驚くんだからー！」

マドの話に笑いながら走つていると視線の先に入江が見えてきた。

「マド、あそこに船がありそうね

近づいていくと数艇の舟があり、その幾つかの舟には荷が積まれていた。そして入江の出口の辺りに一際大きな船があつた。

ランは舟の男に近づいて聞いた。

「すいません、この舟はヨマダイの国に行かれますか？」

「ああ、でも舟は出せないよ。まだ死にたくないからな」

「でも、荷物を乗せてありますよね？」

「ああそうだよ。ほらっ、あの船を見なよ。これから軍隊が沖の化け物を退治しに行くのさ」

男が沖の出口に泊っている大きな船を指していった。

「無事に済めばまた川を渡つて商売が出来るのさ、だから荷を積んで待つているつてわけさ」

「そうなのですか」

礼をするとランはその軍船に向かつた。

「ラン？ あんたひょつとしてバカな事を考えてない？」 マドはランの顔の回りをグルグルと回りながら聞いた。

「ちょっと話を聞くだけ、心配しないで

軍船の近くに来たランはその大きさと造りに圧倒された。

「すうい！ こんな船はじめて見た」

「そう？ あたしどつかでこんなのがいっぱいあるのを見た事があるわ？」

「本当に？ どこで？」

「ん~ そうね・・・思い出せないわ

「そつ・・・でもこの船なら大丈夫ね！ すぐにでも渡れるようになるんじゃないかな」

興奮気味のランはますます近くに寄つて行った。

「おい、民間人は近づいてはならん!」近づいてきた兵がランに言った。

「おつ? なんだ? かわいい顔して。お嬢ちゃん、その剣はオモチャか?」

顔の大きな少し顎の長い兵が「ヤーヤ」と冷やかしていった。

「えつ、いえ違います!」

「ちょっと! そこのあい! あんた達じや殺されに行くようなもんでしょう!」

マドが冷やかし返しに自分の顎を伸ばした。

「なんだと? この船に誰が乗るのか知らねえのか?」

「あいの顔じやなけば誰でもいいんじやなくて! ?」マドはさらりと長く自分の顎を餅のように伸ばした。

「ワハハハ・・・なに! こいつ燃やしてやる! 」近くのかがり火を手に持つとマドに近づいてきた。

「ああ、違うんです! マド! 誤つて! 」ランが馬から降りてマドをつかまえようとすると、ふんわりと上空に逃げた。

「すいません、悪気はないので・・・」

「まあいい、かわいい嬢ちゃんに免じて許してやる。それより危ないから帰んな」

男が、かがり火を戻すと視線の先に近づいてくる一団を見た。

「嬢ちゃん! やこ邪魔だ、どいて! 」ランはいわれたまま端に寄つた。

すると待ち構えていた兵達が一斉に整列をし、その列は船の乗り口まで続いた。その一団がゆっくりと歩いて来るとその中に長身で地面に着きそうなマントを身に着けた人がいた。

その男は通り過ぎる時にランの馬を見、そしてランを見るとフツと微笑んだ。その一団が船に乗り込むを見届けるとランが聞いた。

「あの人は?」

「ああ、獣人界の貴公子、エルード様だ」

「獣人？」

「なんだ？ 知らんのか？ 嬢ちゃんどこから来たんだ？」 当たり前に聞かれて答えられないランは少し悔しくなつて返した。

「私はミンの・・・剣術師です」

「そうか。まあ、良く見りやそれオモチャには見えんな」

刀にプライドを救われたような気がして、さらに悔しくなつた。

「お譲ちゃん、怪我しないうちに帰りな」

そう言い残すと整列をしていた兵達は順番に船に乗り込んで行つた。ランは悔しさを滲ませつつもただ見送るしかなかつた。

「ちょっと、ラン！ もつと言い返しなさいよ！」

マドが短い拳をブンブン振つていると後ろから声を掛けられた。

「ランちゃん悔しいんだろう？ だったら船に乗ろう！ 振り向くと、なんとそこにサルージがいた。

「サルージさん？ ビリして？」

「ちょっと、髭！ バカな事言つんじゃないわよ！」 マドが食つてかかつた。

「いいから、さつ！ 船が出でまつよー」 せつと馬の手綱を引っ張つて船に向かつた。

「えっ、ちょっと！ サルージさん！？」

「ラン！ 行く必要もなくてよ！ ちょっとー」 サルージはランを置いて走つて行くと、船と堤防を繋いでいる橋を外しにかかつている兵に慌てて駆け寄ると言つた。

「ちょっと待つてくれ！ 僕たちも乗る！」

「はあ？ という顔を兵がすると「なに言つてているんだ？ 軍人以外は乗る事は出来ない」 当然のように断られた。

ランが追いついてサルージを見ると「我々はエルード様の御供の者です！ これを・・・」 そう言いながらサルージは包みを差し出した。それを見た兵は「・・・そつか、エルード様の御供か？」 含み笑うと言つた。

「はい」

「まあ、それなら……」「ホン！ 急げ、すぐに出るぞー！」
「すまねえ！ ランちゃん、急いで！」

ラン達の乗りこんだ船はその世界に名を轟かせていた最強の名を持つ『MUSA SI』という軍船だった。四方八方に大砲や機銃を構え戦闘時に備えての小型から大型の戦闘艇を要し船の中央の辺りには見慣れない金属で出来ている柱があり、常に虹色に変化するその先端には幾つかの星座を模した球体があった。

その回りには魔術師と思われる数名が何やら話し合っている。

ラン達は、それらを見ながら船の端を歩いて後方のデッキに落ち着いた。

「凄いですね……」

「ああ、どの戦いでも負け知らずだって話だ。なに、心配いらないよ」

「ちょっと、髭！ ランに何かあつたら責任取つてもううわよ！」「マド、心配いらんよ。こいつがあればどんな奴でもイチコロをつけ！」 サルージは得意げに脇に抱えている銃を叩いた。

「それ、この間私達を救つてくれた銃ですね」

「そうひー！ 魔人だろうが何だろうが、こいで1発よ！」

「髭！ 調子に乗っているんじゃないわよ！ そんなもの本物の魔人衆には効かないわよ！」

「ワハハハ！ 心配するな！」 サルージの高笑いが聞こえたのだろうか、あの長身のエルードが近づいて来た。

「ちょっと、髭！ タダ乗りがばれたんじゃないのー」「慌ててマドがランの頭の後ろに隠れた。

エルードがランに歩み寄ると馬を撫でながら聞いた。

「お譲さん、この馬の持ち主ですか？」

「あつ、いえつ！ 借りています。あの、一緒に旅をしている人に」

「そうですか。」この馬の持ち主はどういう御方ですか？

「えつ、あの・・・」

「こいつはワシのだんなの馬ですよ！」横からサルージがいふと得意げに馬を叩いた。エルードはサルージを相手にせずにランに聞いた。

「後ろに隠れているのは一見、魔人のようだが？」

「いえつ、この子はマドっていいます。元は妖魔人でしたがオラルさんの御蔭で今は私の友達です」

「妖魔人？」

「はい、妖魔人はオラルさんが倒しました。この子は妖魔人が撮り付いていた元の人の魂みたいなものです。いつか人に戻してみせます」ランはマドを見つめているとマドは大粒の涙を流した。

エルードはマドを見ながらハル獣隊長を思い出していた。

「そうですか、そのオラルさん？ とは今何処に？」

「あの、あとから付いて来ていたんですけど・・・」

「なるほど、では用事が済んだら是非そのオラルさんに会わせていただきたいのですが」

「あつ、はい。分かりました」

エルードは馬を撫でると笑みを浮かべて行つた。

「まったく！ スカしたやううだぜ」サルージが言つとマドが言つた。

「なにさー。いい男じゃないので、ねえラン？」

「ええ、そうね。でもこの馬のことを気にしていたけど」

「確かに。旦那といい何者なんだか！？」サルージとランが馬を撫でていると兵への号令が聞こえた。

「全員配置に着け！」

何やら、慌ただしくなってきた。

「ラン！ あれ見て！」 マドが上空から叫んだ。

川を見ると軍船の先で小さい渦が幾つも巻いている。それが段々と近づいて来るのがわかつた。

「こいつの出番か！」 サルージが銃を渦に向かって構えた。渦は次第に船を囲んだ。するとバリバリと虹色の光が見る見るうちに船の回りを包んだ。

「これは！？」

ラン達が見上げると船の中央にあつた虹色の柱が光を放っていた。それは魔術師達が柱を囲みそれが手や杖を翳して船全体を包むように結界を創っていた。

「何が起るの！？」

「分からぬが、タダごとじや無をそつだ」

渦は様子を見ているのだろうか？ しばらく動かなかつた。

「砲撃用意！」

砲台の指揮官が声を上げるとそれの砲台が渦に狙いを定めた。

「撃て！」

一斉に渦を目標がけて放たれたが、波しぶきを上げただけで終わつた。

「どうなつた？」

兵達が見ると、それぞれの渦の中心から撃ちこんだはずの砲弾が水面に出てきた。

そして水柱が砲弾を持ちあげ伸びると・・・その高さは船を見降ろした。すると何処からともなく声が聞こえた。

「こんなもので何をしようといつのだ？」

水柱が弓状になると一斉に船を目標がけて放たれた。その砲弾は船の結界に弾かれた。

「残念だつたな！この結界の中には誰も入る事は出来ないのだ！」
指揮台から船長が得意げに言い放つた。やがて砲弾の煙が消え水柱
がゆっくり下がっていくと、それは船の指揮台の高さ辺りで人の形
に変わった。

「ランちゃん、何だあれ？」

サルージが船の回りを見渡すと同じモノが幾つもあった。その指揮
台に一番近い水柱の一つからさらに黒い水を纏つた人の姿をしたモ
ノが出てくるとそれが言った。

「わざわざ殺されにくるとは人間とは愚かな生き物だな」

「あいつは！」

エルードがデッキを駆けあがると指揮台から身を乗り出した。

「さて、今回は御たいそうにそんな物持ちだして私を倒すつもりか
？」するとエルードの隣にいた船長がそれにいった。

「お前か！こんな幼稚な事をしているのは… つまらない奴だ、
とつとと失せる！」

黒い水は、結界に近づいて言った。

「ほう？ 幼稚でつまらん、と言つたな？ ずいぶんと威勢がい
いが何か私を倒す秘策でもあるのか？」

「ワハハハ、秘策も何もお前のような奴が我々を倒せると思つてい
るのか！」

「そつか？ そこまで言つのならちょっと試してみるとしよう」
言い終えると水柱が全て崩れ、川は何も無かつたように元の姿に
戻つた。

「なんだ!? 我々に怖気づいてどう逃げ出したか！」船長が
笑いだすと兵達も続いて笑い出した。

「誰が逃げ出したって？」

「なにつ！ どこだ！」

皆が一斉に声の主を探すと砲撃主の一人が船長を見た。その砲撃
主の目は黒く光っていた。すると、ゆっくりと船長に向かって歩き

出した。

「なんだ！　おい！　止まれ！」

「俺を倒すと言ったな？　やつてみろ！」

砲撃主が指揮台に近づき階段に手を掛けて一歩その階段を上がった時、船長に付いていた魔術師が杖を翳し、いきなり火の玉を放つと砲撃主に直撃した。

「がああ！」

砲撃主は見る見るうちに焼け焦げて蒸発していき後には水が少し残っただけであった。

「口ほどにも無い奴め、思い知ったか！」

高笑いをする船長を尻目にエルードはその水を見て思いだした。

「こいつは、あの！？　まずい！」エルードが指揮台から飛び降りると同時にその水がウネり始め魔人が姿を現した。

「きさまっ！　この結界の中には誰も入れないはず！」

「なにを齎えているのだ？　わざわざ出向いてやつたのだぞ？」

「おいっ！　何とかしろ！」船長は魔術師の後ろに隠れていった。

「なんだ、なぜ隠れる？　俺を倒したいのだろう？　どうした？」

かかつてこい、という仕草を魔人がすると、構えていた魔術師が船長と共に2人だけの結界を張った。

「守っているだけでは戦えないではないか？」

魔人が結界に手を翳すと黒い水が一気にその結界を包み込んだ。船長と魔術師を包んだ水はスルスルと上空に伸びていった。

「なんだ、おい！　やめろ！」

次の瞬間、パツと包んでいた水が弾けた。すると2人は引力に従つてそのまま落下し、甲板に叩きつけられた。

「がはっ！」

船長と魔術師はそのまま息絶えた。それを見ていた者達は声を失つた。

「なんともろい奴だ？　所詮、口だけだったな。さて、そこの魔術師ども・・・次はどうする？」

魔術師達は態度を変えて言い始めた。

「我々はあなたに従います。ですから命だけは御救い下さい！」

それを聞いた兵達も、武器を捨てて口々に叫んだ。

「お願いします！　どうぞ命だけは！」

「助けてください！」

「どうか？　助けて欲しいのか・・・ならばそれなりに代償を払つてもううぞ。そうだな、その魔術師どもを殺した奴だけ助けてやろう」

魔人は魔術師を数えた。

「8人、それ以外は死んでもらおう！　さあっ、早い物勝ちだ！」

それを聞いた兵達は武器を拾うと魔術師達を囮んだ。

「やめる！　お前達、敵はあいつだ！」それに聞き入る兵は一人も居る筈もなく追いつめられていった。

「いいぞ、これは見物だ・・・なんだ！？」

「どうした？」

「なんだ・・・」

異変に気がついた皆が魔人を見ると胴から真一一つに分かれてバシヤバシヤ音を立て魔人は崩れていった。さらにシュウシュウと水が蒸発していき後には何も残らなかつた。

下から指揮台を見上げていた者達には魔人よりも後ろにいたエルードの姿は見えなかつた。

そこに獣人のエルードが姿を現わした。

「おおっ！　すごい！」

「エルード様！」

「さすがエルード様だ！」

一瞬で倒したエルードに皆が称賛の声を上げた。

「ランちゃん、俺達の出る幕は無かつたな」

「えつ？　いえ、エルードさん。あれが獣人・・・」

「なによ、ラン！ あんたの刀はもつと凄いんじゃないでー！」

「マド、わたし自信ない」

「どうしてよー!? もつと自分を信じてー！」

「そりだよランちゃん！ 旦那がその刀をくれたんだからうー。ランちゃんを見込んでくれたんだからさー！」

「・・・でも」ランが言葉に詰まっていると声が聞こえた。

「そこの獣人！ 僕の分身を倒したぐらいでいい気になるなよ！」

「なんだ！」

それは船の側面から黒い水が這うよつに伸びてくるときなり魔術師の一人に襲いかかった。

「ぐわっ！」

黒い水が魔術師の口から入つていくと魔術師はその場で倒れ込んだ。

「うわっ！」

「どうした！?」

すると、ビクンーと体を震わせると直立のまま起き上つた。

「なんだ！」

「おい！ 逃げる！」

逃げ出す兵を見ながら撰り付かれた魔術師がいった。

「この体は色々と妙な技を使えるらしい・・・試してみよう」と杖を甲板にドンッ！と突いた。

その瞬間バチバチと赤い雷が広がりその回りにいた者は痺れて倒れた。

「まずいな・・・ランちゃん、そこに隠れよー！」

サルージは砲台の横に積んである荷の影に馬を引いていった。

「なによ、ラン！ あんな奴やつておしまいー！」

「マド！ 黙つてー！」ラン達は隠れながら隙間から覗いた。

「獣人、その剣をどこで手に入れた？ 分身とはいえ一切りで片づ

けるとは放つてはおけんな

「魔人よ、俺を知らないのか？」

「なに？ 知らんな」

「そうか、ならば教えてやるつ。俺はエドス参謀の配下、エルードだ！」

「エドス・・・・！ きさま、あの場にいた魔人か！」

「そうだ！ だがお前とは戦つていない。だがお前の倒し方はエドス参謀が教えてくれた」

「・・・なるほどな、そうか？ だが倒し方を知つてその気になつてゐるようだが私もお前らの倒し方を学んだぞ。それに今回はお前1人ではないか？ 残念だが、お前に勝ち目は無い！」

「そいつはどうかな・・・おい、ハル獣隊長はどこだ！」

「なに？ あの召使の事か？ あいつには別の仕事をくれてやつた。今頃港は火の海にでもなつてゐる頃だ」

「なんだと！ そつか・・・おい！ 船を港に戻せ！ 着くまでにこいつを始末する！」

エルードは下にいる兵に合図をした。

「はつ、はい！ すぐに！」

「何を戯けた事を？ 今頃戻つても遅いわ！ エルードとか言ったな、俺を始末するだと？」

「そうだ、手加減するつもりは無い！ すぐに終わらせてやるーいくぞ！」

エルードは指揮台から飛び出すと魔人目がけて切りかかった。

ランの師匠

ランの師匠

その頃、オラルとスー・ランは港の手前まで来ていた。

「ランちゃん達、何処まで行つているのかしら？」

「だいぶ張り切つていたからな」

スー・ランがひとすじの煙を見つけると指した。「ねえ、あの港にいるんじゃない？ ほらっ、ちょっと遠いけどあそこでたき火しているし人が集まっているんじゃない？」

「たき火？ そうだね、行つて見よう」

二人が港に近づいた時、幾つもの火の玉が飛んでくるとそれは街道の脇に落ちその一帯が見る見るうちに火の海と化した。

「ちょっと！ なにこれ！？」

「たき火の正体だ！ 行くぞ！」

2人が走つて行くと港から逃げて来る人達とすれ違つた。『何があつたのか』と着いた時には舟や荷などは灰と化していた。

「誰がこんなことを」

「見て！ あそこ！」スー・ランが燃える建物の中から出てきた一匹の黒ヒョウを見つけた。

「あいつか？」

黒ヒョウがこちらに気づきオラルと田が合つと走り出して向かつてきた。

「こっちにくるよー」

「スー・ラン、下がつていってくれ」そういうと黒ヒョウに向かつて歩き出した。

黒ヒョウはオラルの少し手前で止まるといつでも飛びかかる態勢

を取つた。

その黒ヒョウにはめられている赤く光る首輪を見てオラルは話しかけてみた。

「お前、誰かに操られているな？ 聞こえるか？ 僕が元に戻してやる。だから動くなよ！」

そう言いながら黒ヒョウに近づいた。が、黒ヒョウは瞬時に飛び掛かるとその鋭利な牙がオラルの首に食い込んだ。

「オラル！」

スーランが駆け寄るとオラルは黒ヒョウを抱いたまま振り返つた。

「大丈夫だスーラン、こいつの呪いを解いてやる」

「大丈夫って！ それっ・・・」スーランはオラルが首から血を流し、なおもその牙が食いちぎろうとする様を見て顔を覆つた。それを見たオラルは黒ヒョウを抱いたままその首輪に噛みついた。するとオラルの全身から黒い煙が立ち込め姿が見えなくなつた。

スーランは何が起きているのか分からずに、その場に崩れ落ちた。やがて黒い煙を潮風が徐々にをさらっていくとそこには男の人を抱えたオラルが何も無かつたように立つていた。噛まれたはずの首の傷もそこには無かつた。

「オラル！」スーランは何が起きたのか分からなかつた。

「ひょっとして心配をしてくれたのか？」

「ばか！」スーランは涙を堪えつつも安堵の表情を浮かべていた。

オラルはその人をそつと下ろすと軽く頬を叩いた。すると男は薄つすらと目を開けた。

「ここは・・・あなたは・・・」

「よかつた、気がついた」スーランは持っていた水を男に飲ませた。それを飲み終えると大きく息をして一人を見た。

「何かひどく悪い夢を見ていた様な気がします・・・これはいつも」

視界が開けた男が見たものは焼け野原となつてゐる港だつた。

「ああ、なにかの争いがあつたらしい」

「わたしは何を・・・何をしたんだ!?」以前の記憶が少しづつ戻つて来ると恐らくこれは自分のやつた事だと感じた。

「あなたは何もしちゃいないよ。誰かに操られていたんだから」「そうか、あの魔人に・・・なんてことをしてしまったんだ」完全に以前の記憶を取り戻すと悔し涙を流した。

「なら、そいつに借りを返さないとな。何処に居るか思いだせるか?」

「ああ、確か・・・そうだ船! 軍艦だ!」男は力強く立ち上がる

と船を探した。しかしその船はどこにもなかつた。

「軍艦が、ここに無いとすると恐らく出て行つたんじゃないかな?」「くそつ! あいつだけは! あいつだけは絶対に許さない!」

「ねえ、ひょつとしてランちゃん達」

「ああ、たぶんな。恐らくサルージも一緒だ。どこかにまだ使える舟があるはずだ、手分けして探そう!」

その頃『MUSASI』のエルードと魔人は互角の戦いをしていた。「獣人よ、なかなかやるではないか。だが本気でその程度なら俺には勝てんぞ」

「確かにこのままでは決着はつきそもそも無いな。だが、お互にまだ手の内は隠してあるようだ、違うか?」

「ああ、そうだな。どうやらお前はそこのらの獣人とは少し違うようだ。しかし港に着く前に俺を倒すと言つたな? それを証明して見せろ!」

「言われなくとも!」

再び二人は激しく刃を交えた。

「エルードさん大丈夫かな」

「大丈夫だよ、ランちゃん。『いた』という時にはこいつが火を噴く! 任してくれっ!」

よほど自信があるらしくサルードは銃を見せた。

「へんつ！ そんなモノじゃあいつには敵わないよ！ ただ水に穴開けておしまいだよ！」

「そんなことはない！ だつたら試してみるか！？」

「駄目ですよエルードさんの邪魔をしちゃ！」

「いいから見ておけつて！」

サルージは撃ちたくて仕方ないといった感じで荷の隙間から狙いを付けた。

「魔人よ・・・次に止まった時がお前の最後だ！」 サルージは照準を合わせた。

「なにいつているの！ サルージさん！ だめ！」

「ちょっと、髭！ バカな事はおよし！」

指揮台の上で魔人の一振りをエルードがヒラリと飛びあがってかわした時、魔人に一瞬のスキができた。

「くらえ！」 サルージが引き金を引いてしまった。

『ドロドロドロ』と、それはいつものような光速のエネルギー波ではなく油のようなモノが波をうちながら魔人に向かっていった。魔人は反射的にその音に気付くと振り返った。

「なんだ！」

それは軽くかわせるほど速さだった。魔人は体を反らして避けるとサルージを凝視した。

「きさま！ 死にたいらしいな！」

魔人はエルードとの戦いを邪魔されたのが気に入らなかつたらしく怒りを拳に集めた。

「だからいつたでしょー！」

「ばかっ！ ばかっ！ 髭！」

とうとう見つかってしまったラン達は逃げ場を失つた。

「なんで！ こんなはずは！？」

「髭！ なんとかしなよ！」

魔人は胸元に黒く光る玉を造り出した。

「まよい！」

エルードはその尋常ではない玉の威圧を感じるとラン達の元へ飛び出して行つた。

「なんだ、これは・・・」

魔人の動きが止まつた。良く見ると魔人の足もとから蒸発して消えていつているのが分かつた。

「なんだと！」

その蒸発して消える速さに『このままでは』と身の危険を感じた魔人は下半身まで消えかけた時、自らその胴を剣で斬り払つた。
「ささま！ このままではすまぬ！ 覚えておけ！」 そう言い放つと片手で指揮台を掴み力任せに勢いよく川に身を投じた。

「ちょっと、なに？ どうしたの？」

エルードは魔人のいた指揮台に飛んだ。見ると蒸発は下の水までも徐々に消しながら進んでいた。

「そういうことか」 エルードは理解した。

そこへラン達が駆けよつて來た。

「エルードさん」

「ああ、どうやらその銃に救われたらしい」 サルージの銃を見て答えた。

「えつ？ こいつが？」

「あれがさつき銃から出たモノの正体だ」 エルードは船の縁に付いているドロドロとした液体を指した。
その液体は徐々に蒸発して消えた。

「エルードさん、それがどうして」

「私も詳しい事は分からぬがどうやらその液体には付着したモノ

を消滅させる力があるらしい」

「そうなの！？ こいつはすごい！」 サルージは改めて銃を持ちあげていった。

「ちょっと、それ！ 髪にはもつたいないんじゃなくて！？」

「でも以前、私達を救つてくれたのもその銃の御蔭ですもの。なにか不思議な力がありそうですね」

「たしかに。だんなも詳しい事は教えてくれないし・・・ランちゃんもその刀、どうだろう？」

「・・・はい」

「その方はオラルさん？ とか言う方ですか？」

「はい、そうです」

「そうですか、その方に会うのが楽しみになつてきました」ランを見てエルードが微笑むと少し照れ笑いをして返した。

そこに兵がエルードに駆け寄ると言つた。

「エルード様、小舟が近づいて来ています。いかがいたしましょう？」

「小舟？」

兵に船の縁まで案内されたエルード達は小舟に目を向けた。

「だんな！ スーランさんも！」

「オラルさん！ よかつた」

「あれはまさか、ハル・・・ハル獣隊長！」

小舟からオラル、スーラン、ハルの順に梯を登つて甲板に降り立つた。

「ハル殿！」

エルードはハルに駆け寄ると手を握り締め涙を流して喜びを表した。

「エルード・・・どうしてここに！？」 突然の再開にハルは目を疑つた。

「はい！ この川にあの例の魔人が。それでエドス参謀より、私が

遣わされました」

「そうだったのか。すまなかつたな」

「いえ、御無事でなにより！ それより、もつ戻っては来られないのかと思つていました！」

「ああ、私もそう思つていた。こちらのオラル殿に救われた」

オラルは二人に近づくと会釈した。

「オラルと申します。こちらはスー・ランです」

「オラル・・・あなたが、何と感謝をすれば良いか」

再会を分かち合つてゐるエルード達をよそ眼にスー・ランがキヨロキヨロと辺りを伺つた。

「それより、ねえ？ 誰か馬を連れた女の子と髭ズラの男を見なかつた？」

「ひょつとして」

エルードが物陰に隠れてゐるラン達を見た。するとサルージ達は頭を搔きながら出てきた。

「サルージ・・・」

「ラン！ やつぱり！」

「だんな、すいません！ ちょっと訳があつて」

そこにマドがサルージの髪を引っ張りながら言つた。

「この髪！ のせいで死ぬところだつたのよ！」

「サルージ、また何か悪さをしたんじゃないのかい？」

慌てて手を振ると「だんな！ そうじゃなくて！ 信じて下せーー！」しつかり否定した。

そこにエルードが被せてきた。

「先ほどサルージ殿・・・いや、その銃に救われました。不思議な銃です。聞けばオラル殿より預かり受けたモノと聞いていますが？」

エルードがジワリと確信を突いて來た。

「その銃は誰でも扱えるモノではないのです。そいつは使う者、相手によつて能力が変化する。だけどまだサルージは本当の使い方を

知らない。エルードさん、試してみますか？」

「いえ、そういうものでしたらやはりサルージ殿がふさわしいでしょう」

エルードがサルージの顔色を伺うと「アハハ、確かにこいつが勝手に倒してくれているようなものだからな」悔しいような悔しくないような複雑な笑みを浮かべていた。

そんな中、ハルが改めてオラルに面と向かって話かけた。

「しかしあの魔人、相当な痛手を負つたとはいえたのうちまた現れるでしょう。以前、エドス参謀との戦いでも一月ほどで回復していたのを見ていた。オラル殿、どうであれ私はあなたに救われた。ぜひ、礼をさせて頂きたい」

「いえ、礼なんて」

「ハル殿、私が」

エルードがハルに目配せをするとエルードは翼を広げて飛び立った。

「あの人・・・鳥？」ステランの問いにハルが答えた。

「お譲さん、獣人を御存じ無いですか？」

「あっ、いえ・・・」

「さてはステラン？ 惣れたな？」オラルが冷やかし気味にいった。
「やだつ、そんなことないよ！」

「ステランさん、分かりやすい・・・」

港に着いた一行は焼け野原となつた地に降りた。

「どうしたのこれ」ラン達は港で何が起きていたのかを知らなかつた。

「ひどいな。戦でもあつたのか？」

「すまない。これは私のやつたことだ」ハルが目を伏せた。

それをかばうようにオラルがハルの肩に手をかけた。

「ハルさんは魔人に操られていただけだ。それよりもサルージ、今日の宿はどうした？ そろそろ日が沈むぞ」

「ああっ！　すぐに探して来ます！」ランも慌ててサルージについて行こうとしたのをハルが止めた。

「い」心配なく。そろそろエルードが戻つて来るでしょう」ハルがそう言つとそれから間もなくエルードが戻つて来た。

「すまなかつた、エルード。で、どうだつた？」

「はい、隣街に宿をお願いしました。このまま街道沿いに進むとすぐです」

「助かる。ではオラル殿、色々と積もる話をしたいのですが？」

「お世話になります。良かつたな、サルージ」

「すいません。ハル殿、助かりました」

「いえいえ、では行きましょう」

「ハル殿、私はこれからエドス参謀に伝えに行きます」

「そうか。ではご迷惑をお掛けしたと伝えてくれ。私はオラル殿と暫く一緒に行動を共にする」

「ハル殿？」

「オラル殿、この救われた命、少しでもお役に立たせて頂きたい。アルミアに戻るまでの間、私のわがままを聞いてください」その真剣な眼差しを見るとオラルも同様に返した。

「いえ、わがままなんて。どんなに助かることでしょう。では一つ御願があるのでですが・・・」

「おお！　何でも言つて下さい！」

「こちらのランに」教授を頂ければ・・・剣術や世の中の理などを・

・・・

「わたしの？」ランはオラルを見つめた。

「そのような事でよければ、喜んで御引き受けします」

「助かります。実はランの持つてゐる力を引き出してくれる方を探していました。ラン、ハル殿なら間違ひなく一流の剣術師に育ててくれる」

「あつ、はい！　よろしくお願ひします！」突然の成り行きで剣

術の指導者ができたことにスーちゃんは嬉しさを隠しつつ、深々と頭を下げた。

「いらっしゃい。ではエルード、よろしく頼むー。」

「はー、ハル殿も御無事でー！」皆の顔を見て礼をするといと飛んでいった。

スーちゃんは誰よりも大きく手を振って見送った・・・・・

魔人国・ザルギス

魔人国・ザルギス

世界の中でも唯一、魔人だけが住まう大陸国ザルギス・・・

その大陸は海に囲まれ、他の一切のモノを寄せ付けなかつた。

岩山がそびえ立つ内陸の、その地下深くには魔人の中でも特に選ばれた『闇の十人』と呼ばれる者達がいた。

魔人の中でもその頂点に立つ彼らは他の魔人には尊敬され、それを知る一部の人間と獣人は、その存在を恐怖と捉えていた。

その神殿の大広間の神座には人間と獣人の恐怖に怯える彫刻が施されており、中心の大きな椅子は何やら骨を組み合わせたような造りであつた。

その椅子に全身を黒い衣で覆つた魔人が座り、1人の魔人をその赤い目が見下ろしていた。

「ほ〜う、それでおめおめと逃げ帰つて來たと言うわけか？ 見てみろ、皆が笑つてある。のう？ ジュール？」

神座の下には上半身のみの姿のジュールがあり、それを囲つている8人の黒装束の魔人達はジユールの姿を見ながら体を揺らしていた。

「ハデス様！ 決つして逃げ帰つた訳ではありません！ この体を修復し、必ず奴らに復讐するため、

そのために生き恥をさらして戻つて來たのです！」

「一度もやられてまだ懲りぬか？ どうやら我々の組織の一員には相応しく無いようだ」

「ハデス様！ 次はとは言いません！ 最後のお願いです！ どうか！」

それを聞いた『闇の十人』の中の1人が言った。

「ハーデス様、どうぞ最後の機会を御与え下さい。次もまたジュー
ルが役目を果たせないようであれば、

このダイムが責任を持つて処罰致します」

「そうか・・・いいだろう。ではジュールよ、最後の役目だ。そ
の人間と獣人共を消したのち、アルミアまでを我に差し出せ、よい
な！」

「はっ！ 必ずや手に入れる事を約束致します！」

砂漠の都・ヨマダイ

砂漠の都・ヨマダイ

メルドール大陸の北に位置するヨマダイ国。そこから先には陸地が無く大海が包み込んでいた。

ヨマダイ国は広大な砂漠に覆われている。

そのなかでもイタール川周辺は水の恩恵を受け、都市を支える重要な農作物の拠点でもあった。

オラル、スーラン、サルージ、ラン、ハル獣隊長の5人は、ひと時の平穏を取り戻したイタール川を渡りヨマダイ国に入った。

「だんな、見てください。ここから先は何処を見ても砂しかありませんよ。それでもその『メイロ』に行かれるのですか？」

オラル達一行はイタール川から首都メイロに続く砂漠の街道の入り口付近に着いていた。

「ああ、だけど見事に縁地と砂漠に分かれているものだな。ハルさん、ここからメイロまではどれくらいかかるのですか？」

「そうですね、私一人の時は2日ほどで着きましたが・・・荷を馬に乗せていくとなると、3・4日ほどみておけばでしょうか」

それを聞いたスーランはランの肩を寄せてハルに言った。

「3日？ あたしとランはシャワーが無いと駄目でしょ、野宿は御肌の敵だから」

「スーランさん、私は・・・」

するとマドがフワフワ浮きながら「オバン、たまにはいい事言うのね。レディーの身だしなみを忘れてもらっちゃ困るわ」「ハルに向かってそう言うと眉間にヒクヒクさせたスーランがマドを捕まえて「誰がオバンだって！？ あんたはシャワーとか関係ないでしょ！」

言いながら雑巾のように絞つて伸ばした。

「ヒヽツとー？ やめつ・・・このつ！ ぐんんつ！」

『相変わらず』とそのやり取りを見て笑っていたオラルがサルジの肩を叩くと言つた。

「スー・ランもランちゃんも心配しなくていいよ、このサルージ様が解決してくれる！ なつ、サルージ！」

「そう言われるんじゃないかつて、思つていましたよ」

「そつか、いつもすまないな。明日にはここを発ちたいからそのもりでようしく！」

いよいよ使われるサルージを見かねて『御役に』とハルが言ってくれたが『修行の一環だから』と断つた。

サルージは来た道を戻ると川沿いの店を探して回った。

「スー・ランがシャワーを浴びる所は見てみたいが、いかん！ いかん！ 今度こそ黒焦げにされてしまう！」

妄想しつつも『あわよくば』と妄想を膨らませつつ探していると馬車から荷を降ろし舟に運んでいる人を見つけた。親子だろうか、小さい男の子が手伝つていた。

「おつ？ あの馬車使える！」駆けだして近づくと聞いた。

「よう兄弟！ 景気はどうだい？」

「なんだ？ 仕事の邪魔をせんしてくれ」男はサルージを見るや否や不機嫌な顔をして荷を運んだ。

調子に乗つて聞いた事を少し後悔しつつも続けた。

「すまねえ、ちよいと聞きたい事があつてな。すまんがこの馬車を売つている所を知りたいのだが？」

「そんなところは無い。みんな自分で造るんだからよ」

「そいつは知らなかつた。何とか明日までに手に入れたいのだが・・

・金なら用意出来るんだ。どこかに無いものかな」

金？ と聞いて少し興味を持ったのか男が聞いた。

「幾らなら用意出来るんだ？」

「つりのだんな次第だが、たぶんあんたの言い値で用意出来ると思

う」

「わうか、ちょっと待つていろ」男は荷を全て積み込むと船頭に合図をした。

子供を馬車に乗せると、向かひ舟を見送った。

サルージは揺れる馬車の荷台で子供の相手をしていた。

「髭のおじちゃんは何処にいくの？」

「ああ、明日にはメイロにいくつもりだ」

「いいな～ねえ、パパも一緒に行くの？」

「いや、パパはこの人にこの馬車を売るんだ。そしたらメイロに行こ。ママもお婆ちゃんも御爺ちゃんも待っているからなー。」

「ほんとー、やつたー！　ママに会えるー、髭のおじちゃんも一緒にいくの？」

「いや、それはどうかな？」

「どうして？　メイロに行くんでしよう？　みんなと一緒にけば楽しいよー！」

「そうだな、じゃあワシのだんなに聞いてみるとこするかな」

サルージを乗せた馬車はオラル達の待つている場所に近づいた。

「ジュンさん、あそこで待つてするのがだんな達です」

「若い娘もいるようだが、あんた達何やっている人なのかい？」

「まあ、話せば長くなるが詳しい事はだんな達に聞いてみてくれ」

馬車がオラル達の前で止まるとサルージが荷台から降りた。

「サルージにしては随分早かつたじゃない？　ねえ、オラル？」

「そうだね。ところでサルージ、そちらの方は？」

「はー、この馬車を売ってくれるジュンさんです。この子はジュン

さんの子でアラトって言います」

馬車を降りたジユンはアラトを寄せるとオラルに話した。

「馬車を買ってくれると聞いたのできました。

私達親子はこの売ったお金で家族の待っているメイロに行くつもりです。

小さい家ですがもう一つ馬車があります。

そちらの方がこれよりも大きいのでよければそちらを持つてきます。メイロに行くには水や食料を積んで行かなければなりませんのでよければ樽やテントも準備できますが？」

「旅の支度は全て出来ると？」

「はい。メイロは住むには良い所ですが仕事がありません。ですので季節毎にこうして出稼ぎに来ているわけです」

「パパ、この人達も一緒に行くの？」アラトがジユンの顔を見上げて聞いた。

「いや、そうではないが・・・」ジユンはオラルを見ると聞いた。

「メイロに行くのであれば道案内をしましょうか？　はじめて行くのであれば5日はかかります。

私は道を知っていますので3日で行く事ができます

「そうですか・・・ハルさん、どうですか？」

オラルはハルが洞察力に長けている事を知り、ジユンという男を出会った時から注意深く観察していたので聞いてみた。

「この方の好意を受けましょ。準備して頂けるのと何より道を知っているというのは心強いです」

「そうですね、ではジユンさんにお願いします

「わかりました。では明日の早朝までに準備をしますので、よろしくれば私の友人の宿があります。

今日はそちらに泊つて頂ければ

朝靄の残る頃、2台の馬車にオラル達の馬をつけると旅の支度を終えて乗りこんだ一行はヨマダイの首都メイロを目指した。いよいよ緑の地から砂地へ、という頃にサルージが呟いた。

「俺も、ジュンさんの馬車に乗りたかった……」

ジュンの馬車には御者のジュン、隣にアラト、そして荷台にはスランとラン・マドが乗っていた。

サルージはもう1台の馬車の荷台に乗っていた。

御者のハルと隣にオラルがいたが2人はそれを聞くと、まつたく、しおうがない奴だ、と言わんばかりだった。

だいぶ日も照りつけてきたのでそれぞれ馬車の荷台の上に日よけの布を被せた。

ジュンが少し遠くの岩山を指して言った。

「陛下さん、あの山の麓で休憩をしましょウ」

山の麓に近づくと日陰の重なる場所を選んだ。

「ふう~ それにして暑いな、こんなに違つものかい?」 サルージがジュンに聞いた。

「このヨマダイは元々緑の豊かな土地でした。
それが10年ほど前から地底の熱によって植物が育たなくなってしまった。

そのために川の水の届かない所は全て砂漠と化してしまった。
この辺りも当時は普通に人々が生活をしていたのです。

ヨマダイだけではなく、他の国でも同じような事が起こっていると
聞いています」

「やうだつたのか・・・」

「ここから見える所、全てが緑豊かな土地であったのに・・・」

一行は道なき砂の平野をジュンの案内で進んだ。

「ジュンさんの案内が無ければこの辺りで迷子になつていたかも」
荷台から立ち上ると見渡す限り一面の砂漠だつた。

「私は砂漠になる前の光景が焼き付いていますから、はじめて來てこの状況だつたら私も迷つていたでしょう」

「ああ、こんなときエルードさんのような翼があつたらもう着いているころね」スー・ランは両手を羽ばたかせてみた。

「お姉ちゃん、誰？ それ？」アラトがワクワクして聞いた。

「エルードはね、獣人なんだけど大きい翼を持っていて空を自由に飛べるの！ うらやましい！」

はしゃぐスー・ランにマドが、負けてたまるか！ と言わんばかりに声を張つた。

「あんなスカした奴の何処がいいんだか！？ 私の方が何倍もいい男なのに！」

スー・ランが、ふんっ！ とすると「あなたはフワフワ浮いているだけでしうが！ 偉そうに言わないの～」それを聞いたマドは暑さも手伝つてか「そんなことないわ！ だつたら見てなさい！」

そういうとランの腰から両手の間を8の字に体を伸ばして結び、それらが鈍い光を放つとランの背に大きな翼が現れた。

「うわっ！ なにそれ！」

突然の変わりようにスー・ランだけでなく一同の目がそれに釘づけになつた。

「ラン！ 飛ぶわよ！」

「えつ！？」

マドは翼を大きく羽ばたかせるとランは空中から小さくなつた馬車を見ていた。

「マド！？」

「大丈夫よ、私に任せて！」 そういうと大空を自由自在に飛び回つ

た。

「あいつ、隠していたな・・・」それを見ていたオラルが、ボソッ
と呟いた。

皆が馬車から降りて待っている所へ上空から降りてきたマドは「機
嫌だつた。

「どう？ びっくりしたでしょ？」「マドはスーランに得意げに言
つた。

「あんた、黙つていたね・・・他にも何ができるんだい！？」

「あら？ 呼び方が違うんじゃなくて？ マ・ド・様でしょ！？」
スーランはどうにかしてやろうと構えた時「すっげ～ 姉ちゃん
たち何者？」アラトが初めて見る光景に目を輝かせて聞いてきた。
「私達はね～ なんだろう？ 良くわかんない」

「へ～ すごいんだ！」

子供のアラトには見るもの全てが好奇心の対象になつていて。

「マド、良いモノ持つているな。他にも何かに姿を変える事が出
来るのか？」オラルがその翼を触りながら聞いた。

「んつ！？」

オラルと田が合つと、しまつた！と思つた時にはおそかつた。
オラルは面白いオモチャを見る田で「例えばここに居る全員を乗せ
て飛べるモノとか？」と聞いて来た。

「そんなことはできないわつ！ ランだけよ～ なによあなた達・
・」冷やかな視線を浴びるマドはゆっくりと元の姿に戻つていった。
「ランだけ？ だけつて何だ！？」オラルが両手でマドを掴むとじ
つと見た。

「いや、だから・・・あの・・・」田をキョロキョロさせていると
「ランちゃん何か聞いていいかい？」ランに視線を向けた。
「えつ！？」いえ、私は・・・ランはマドとの約束した事を思い
出していた。

「・・・そつか」

オラルはそれを察してか手を離すとマヂはフワフワとランの頭の上に落ち着いた。

「ちよっと！ 縛りあげて吐かせよつよー」 スーランは納得出来ない風で言つた。

「まあ、それは次の楽しみに残しておこう。わあ、まだ先は長い」 そう言つと馬車に乗り込んだ。

スーランは荷台に揺られながらランの頭上にいるマドを見ていた。

「ちよっと、そんなに見ないでけよつだい！ 縛ら私がいい男だからつて」

ランはその場の空氣に落ち着けなかつた。

辺りがすっかり暗くなつた頃、テントを張つたオラル達一行は食事を済ませると早々に床に着いた。

そんな深夜の星空の輝いている中を無数の飛行物体がメイロに向かつて飛んで行つた。

一行の誰ひとりとしてそれには気がつかなかつた。オラルを除いては・・・

翌朝、ようやく日が昇りかけた頃、ジュンは一人荷を片づけ馬車に乗せていた。

その音に起こされて、皆が目を覚ました。

「ジュンさん、早いですね」 ハルが荷を運ぶのを手伝いながら挨拶をした。

「ああ、起こしてしまいましたか。私は雇われていますから、このぐらにはさせて頂かないと」

「雇われだなんて、旅の仲間ではないですか」 ジュンは笑みを浮かべると黙々と荷を積んだ。

日の暑さを感じ始めた頃、今は川の面影すらない土手にたどり着い

た。

「ここまで暑いと喋るのもしんどいな・・・」

オラル達の馬車は天布が日を遮ってくれてはいるが横からの熱風には対処出来ないでいた。

マドは荷台の後ろに体を括りつけ伸ばした体の先には風船のようにな顔を膨らませ馬車の揺れに身を任せていた。そこから少し先に橋が渡してあるのが見えた。

「あの橋の下で休みましょう」ジュンのその一言で皆が頷いた。それなりに大きな橋で日を十分に遮ってくれる。暑さに疲れを感じたのか馬車を橋の下に着けると皆、影に腰を下ろした。

「なかなか堪えるな。ジュンさん、あとどれくらいかかるものかな？」水を飲んで一息ついたサルージが横になりながら聞いた。

「距離だけなら半日ほど馬を走らせれば着くと思います。ただここから先は日を遮る場所が無いのです。ここで夕暮れまで休んでそれから出発すれば、明日の朝方にはメイロに着きます」

「そうかい、じゃそれまでひと眠りでもしようつかね」

サルージが横になつて大きなびきを始めた頃、橋を渡る馬車や人の行き交う声をきいた。

「んん・・・どうした？ もう飯か？」

サルージが起きるとジュンが土手を上がつてこらだつた。

サルージはジュンを追いかけて土手を上ると既にオラル達がその様子に異変を感じていた。

「ジュンさん、これは・・・」

「おかしい、この道を使うのにはよほどの訳が無いと」

サルージは橋に近づいて来た馬車に駆け寄るとそれを止めて聞いた。

「どうしたんだい！？　だいぶ急いでいるようだが？」

「あんた達、メイロに行くのか！？」

「そうだが」

「なら、すぐに引き返したほうがいい！　奴等が攻め込んできた！」
駆け寄ったハルが聞いた。

「奴らとは？　魔人達の事か！？」

「魔人、かも知れんが街のあちこちで火の手が上がっていた。
逃げるときに空に居た奴が城に向かつて火の玉のようなもので城を
攻撃をしているのが見えた。

それっきりで逃げてきた、悪いが先を急ぐよ」そう言つと馬車を走
らせていった。

それを追いかけるように逃げてくる人の道がはつきり見えるよう
になつていた。

「何が起きているのだ・・・」

アラトがジュンに聞いた。「ママ達、大丈夫かな」それを聞くや否
や「すぐにここを発ちましょう」メイロに居る家族が心配です！
ジュンが慌てるのをオラルが止めた。

「ジュンさん、ここから急いでも半日はかかるのでしょうか？」

「そうだが、じつとしてはいられない！」

少し考えてオラルは言った。

「マド！　先にジュンさんとアラトを連れてメイロに飛んでくれ。
それからスーランとランちゃんは俺の馬でメイロに向かつてくれ。
そいつなら大して時間をかけないで行ける。残った馬で俺とハルさ
ん、サルージで後を追う」

「ちょっと！」と言いかけてマドはやめた。この状況で断つたら・
・・マドは大人しくジュンとアラトに巻き付いた。

「マド、ジュンさんの家族を見つけたら必ず安全な場所にお連れ
しろ。何があつてもだぞ！」

「分かつたわ、まかせて頂戴」半分納得のいかないマドは一応、答

えた。

「オラルさん、すまない。このお礼は必ず！」ジュンはアラトをしつかり抱いた。

「大丈夫ですよ、あとでまた会いましょうー。」軽く手を上げるとマドに合図をした。

「はいはい、では行くわよー！」

マドは昨日とは違う大きな鳥に姿を変えると空高く舞い上がりて行つた。

「我々、獣人のようだ・・・」

ハルは大空に消えていく鳥を見て呟いた。

首都メイロ

首都メイロ

その頃、ヨマダイの首都メイロでは大魔術師でもあり『闇の十人』の1人でもあるジェラの配下が既に城を占拠していた。

大魔術師ジェラの計画では、密かにこのヨマダイを手に入れこの城を拠点にして『闇の十人』が世界を収めた後にそれらを殲滅し我がモノとする為の準備に入っていた。

ジェラの配下であるメギアドスはジェラの命によりメイロの城の占拠とこの事態が外部に漏れないよう指示を受けていた。

「まつたく、手こずらせやがって」そう言つとメギアドスは既に息の無い魔術師の首から手を離した。

「メギアドス様、こちらも片付きました。すでに逃げた人間共もガルの部隊が捕えるでしょう」メギアドスの配下であるベルムグが報告をした。

「どうか。ではこれより全ての城門を閉じメイロに続く一切の通路を断て！ 残った人間は全てジェラ様が妖魔人にしてくださる！」
「御命令通りに・・・」

一方、メイロに近づいていたマド達は一気に急降下をすると雲を突き抜けた。

視界が開けたその光景に幾つもの煙の上がる街を見た。

「なんだ！？」

「パパ、街が・・・」

涙ぐむアラトの瞳にも徐々にはつきりとその全貌が見えてきた時だつた。

城門の砦から怪しげな鳥のようなモノが飛び出すと真つすぐに向

かつてきた。

マドは咄嗟に距離をとったがそれはマドの直ぐ横で静止をした。それは蝙蝠のような人の姿をしており今のマドの半分の体格であった。そいつがマドに話かけた。

「おい、おまえ見ない顔だが？　俺に黙つてジエラ様のご機嫌でもとろうつて魂胆か？」

「なっ！　ジエラ様！？　そっ、そうよ！　私の手柄を奪う氣！」
「お前、なんかおかしいな？　おい、お前が取り付いた人間はどうした？」マドの回りをゆっくり回りながら疑いの目で見た。

「そっ！　そんなの、気に入らないからとっくに捨てちゃったわよ！　ジエラ様に新しい人間を用意してもらうんだから！　この人間はその為の貢物よ！　文句ある！？」

マドは自身が妖魔人であつたためジエラの行動を理解していたので何とかその場をやり過ごそうと強気に出た。

「まあいい、人間は1人でも多く集めないと我々妖魔人の世界を築けないからな。おい、人間は街の中心の広間に集める事になつてゐる。そいつらを下ろしたら逃げた人間を1人残らず連れてこい、いいな！」

「そんな事！　言われなくたつて、分かつているわよ！」マドは吐き捨てると言つと街の広間に目指して飛んで行つた。
「変わつた奴だ・・・」

「パパ、ママ達大丈夫かな・・・」

「ああ、恐らく今の話しだと人間を集めて何かをするらしい。ママ達は無事だといいが・・・」

マドは一人を案じて言つた。

「大丈夫よ！　あいつ等はその人間の特性に合わせて取り付くから1人の人間を妖魔人にするのに時間がかかるの。滅多なことでは殺しはしないわ」それを聞くとジュンは少しホッとしてアラトの頭を撫でた。

「あそこー。」

アラトが指差す方を見ると広間は埋め尽くした人達で溢れていた。

「ジュン、アラト、とりあえず広間の近くに降りるわよ。見つからないように家族を探して！ 見つけたら安全な所に連れていくわ！」

マドはゆっくりと広間の端の家の影に降り立った。

マド達と同じように連れて来られた人も多く、乱暴に広間に投げられると、また飛び立つていった。

マドは元の姿に戻りアラトに巻き付いて身を隠した。影から広間に向かう人たちを見るとジュンがいつた。

「よしつ、あれに紛れて探そう。アラト、パパの手をしっかり掴んでいろ」「わかった！」

マドの後を追つてランとスーランはメイロまであと少しの所まで来ていた。

「それにしてもこの馬、全力で休みもしないで走り続ける事ができるなんて・・・」

「私達2人乗っているのに、ほんとにすげー・・・」

スーランはふと、通り過ぎるメイロから逃げてきたであろう馬車や荷が点々と置き去りにされているのに疑問を持った。

「ラン、そういえば通り過ぎる人を見た？」

「いえ、そういえば見ないです」

どうしてだろう？ と2人がそれらを見ながら走つていると後ろでバタバタという音が聞こえてきた。

後ろに乗つっていたスーランが何気なく振り返ると、ゆっくり前を向き手綱を握るとランの耳元で囁いた。

「ラン、ちょっと遊んで行こうか！？」

えつ？ ランが答える間もなくスー・ランは左先に見えた岩山に進路をとつた。

「ちょっと！？」

スー・ランは全力で走らせながら近づいて来た岩山に飛び出す姿勢をとると叫んだ。

「ラン！ 思いつきり暴れてみな！」 そう言い残すとスー・ランは岩山の影に飛んだ。

「えつ！ ちょっと！？」

ランが振り返ると獣人？ と同じようなモノ達が翼を羽ばたかせながら追つてきていた。

その顔はとてもエルードのような美男子ではなくどちらかといえば獣に近かつた。

「ちょっと！ なんなの〜！」

岩山の回りを走つて逃げるランを見ながらスー・ランは不敵な笑みを浮かべた。

「1・・・2、 5匹か、 よしつ！」

スー・ランはすかさず岩山に登るとその足もとににある短いトンネルを確認して叫んだ。

「ラン、 こっちだ！ ここを通つて！」

大きく手を振つて合図をするスー・ランにランは訳も分からずスー・ランの方へ向かつた。

ランが獣？ のようなモノを引き連れてトンネルを目指した。見事なまでに獣？ たちはピッタリとランのすぐ後ろについて來た。

「よしつ！」

スー・ランはランがトンネルに差し掛かつたと同時に飛び降りた。

ランはトンネルを抜けると振り返つた。少し煙の立ち込めたトンネルからスー・ランが歩いて出てきた。

「うまくいったよ！」

ランが駆け寄るとそこには見事なまでに真黒に焼きあげられる獸の姿があつた。

「これって・・・」

「何者かな？ こいつらがメイロを襲つたのかも。どしどにしても急いだ方がいいみたい」

2人が馬に乗ろうとした時、トンネルから声がした。

「何處に急ぐのだ！？」それは黒焦げの獸ではなかつた。

「！」のガル様のかわいい手下をここまでにしてくれるとは・・・

日が暮れようとしているこの山ではランとガルが対峙をしていた。

「ラン、遠慮はいらない！ ハルさんに恩返しをするつもりでやりな！」

「はい！」ランはオラルから譲り受けた刀を構えた。

「おい！ さつきから調子に乗っているが小娘2人が俺様に勝てると思つてているのか！？」

スーランは笑みを浮かべて言い返した。

「だいたい、俺様！ とか言う奴に強い奴なんていないのさ！ 本当に強い奴っていうのは」そこまで言いかけて「とにかくラン！ 勝てない相手じゃないよ！ 思いつきりやってみな！」ハッパをかけた。

「まあいい、この小娘の後はじつくじとお前をいたぶつてやる！」

ガルは翼を羽ばたかせると上空へ舞つた。ランはギュッと柄を握ると突きの構えを取つた。

「いくぞ！ 小娘！」

ガルは大きく息を吸い込むと口から拳ほどの火の球を幾つも噴き出した。

ランはそれをかわしながらジグザグに進路を取りガルに近づいていつた。一通りやりすごし火の玉が出切つたのを見たランは思い切り

飛び上がるときガルに斬りかかった。

だが空中での動きでは到底ガルには敵わなかつた。ガルはランの攻撃をヒラリとかわすと落ちていくランに振りかぶった手から雷を見舞つた。ランはそれを背で受けたしかなかつたが、刀の鞘が光りランを包むとそれを弾いた。

ランはフワリと砂の地面に着地すると何事も無かつたかのように立ち再び構えた。

「生意氣な、だがそろそろ日が沈む。お前達人間は暗闇の中ではなにも見えまい！」

ガルはゆっくり降下するとフワリと降り立つた。

日が沈むのを見ながらスー・ランは呟いた。

「たしかにね、どうする？ ラン」

ランはジリジリとガルを中心にして回ると沈む夕日を背にして構えた。

「小娘、残念だがお前の負けだ。明かりの無くなるこの場では俺には勝てん」

ランは戦い始めてから自分に言い聞かせるように話しかけた。

「ハルさんが教えてくれた事、そしてこの刀・・・」

ジッと刀を見て言い終えると徐々にランの影が短くなりその影が消える直前ランは素早く右に飛んだ。

「なにつ！」

ガルは沈む直前の光を受けると一瞬、視界を完全に失つた。日が沈むのを追うように額から血を流しガルも倒れた。

「なに、ラン？ やつたの！？」スー・ランにもその瞬間の出来事が理解できぬでいた。

「よかつた、ちゃんと出来た」

ランは急に気が抜けるとその場に座り込んだ。そこにスー・ランが駆

け寄つてきて聞いた。

「ラン、今のは！？」

「はい、ハルさんに教わった技です。でもこの刀でなければ勝てなかつたかも・・・」

「アハハ、そうかつ！ 良かつた、良かつた！」

スーランはランを抱き寄せると自分の事のように喜んだ。

ランもその腕の中で涙を浮かべながら喜びをかみしめていた。

「おうい！」

遠くから聞き覚えのある声が近づいて来ていた。

大魔術師ジエラ

大魔術師ジエラ

スー・ランとランに合流したオラル達は夜道を急いでいた。

「オラルさん、城門が全て閉じています。見てください、堀にはスー・ランさんの言っていたモノ達が見張りをしています」

「そうですか、どこかに隠し通路などは無いですか」オラルが城壁を見回しているとサルージが2人を見ながら聞いた。

「ハルさん、だんな・・・見えるので？」

月明りだけではとても見える状況ではなかつたがまさか自分だけ見えていないのかと感じた。

「ええ、私は黒ヒョウの獣人です。夜目は誰よりも優れている。最も、オラルさんは敵いませんが」ハルは横目でチラつと見た。

「いやだなあ、ハルさん買いかぶりですよ」

ハルは城門から離れた城壁の一部と化している岩山に進路をとつた。

暗闇の中、岩山の前でハルがいった。

「なかなか優しくは入れそうもないですね」

「確かに。でもハルさん一人なら問題ないのでは?」

「それはそうですが」

「ならハルさん、先に行つて下さい。ジュンさん達が心配です」

「オラルさん達は?」

「我々は逃げる準備をしておきます。スー・ラン、ランにも言つておくがジュンさん達を見つけたら何とか正門を指して逃げて来てくれ。すぐに馬車を出せるようにしておくれ。」

「分かりました」

簡単な作戦に聞こえるがこの人ならうまく事を運ぶのだろうとハル

は納得した。

「では、朝日が昇る前にここを出るとしましょうか」ハルは黒ヒヨウに姿を変えると、切り立つ岩山に消えていった。

「さてと、サルージ！ 足の速い馬車を2台正門に用意しておいてくれ」

「なっ！ 見つかっちゃいますよ！？」さすがのサルージもそれには賛成できなかつた。

「大丈夫、正門の砦はスーランとランが抑えてくれる。計画はこうだ・・・」

メイロの中央にある円形の広場では捕えられた300人ほどの人達が集められ妖魔人兵の監視下に置かれていた。

「静かにしろ！」彼らの前にメギアドスが現れると人々を強制的に座らせるべく兵達が威嚇しはじめた。

その場が少し落ち着くのを確認したメギアドスは礼を持つてその人を迎えた。やがて黒装束を纏つた人が宮殿から現れた。

「皆の者！ よく聞け！ これからお前たちに関わる重大な話をしつくださる」

「私はあなた方と同じ人間だ！ 我々はあなた達を殺したりはしない！ 近いうち、このヨマダイは魔人による侵略を受ける事になる！ 勘違いするな、我々はそなた達を助ける為に来たのだ。

「我が兵達を見よ！ 彼らはその身を持って魔人と対等に戦える体を手に入れたのだ！ 家族を守り、国を守りたいと思う志を持った者が今日、この場に集まっている！ それらを望む者には我是無償でその力を与える！」

それを聞いていた者達は、徐々にざわめき始めた。その中にまだ家族を見つけられないジュン達がいた。

「マドはアラトに巻き付いたままその声に脅えていた。

『あの声、間違いなくジエラ様だ！　これは大変な事になつた…』

すると数人の若者達が立ち上がつた。

「うつ！　うそだ！」

「そうだ！」

「いいように使われて殺されるに決まつている！」

「醜い化け物にされてたまるか！」

「そうだ！　そうだ！」

その若者たちに押されるように人々はそれに反抗して声を上げはじめた。

それを兵達は力任せに座らせて回つていたが、抑えられなくなつてくると持つていた剣や槍を振りかざした。

「やめよ！　この中で力を得たいと思っている者が少なからず居る！　ならばそれを望む者にこの場にて力を与えよう！　さあつ、遠慮はいらない！　力を望むものよ、出て参れ！」

「そんな奴、いるわけないだろう！」

「そうだ！　この街から出ていけ！」

罵声や怒号が飛び交う、そんななか1人の男が手を上げて立ち上がつた。

その男は若くして不治の病に侵され、顔はただれ皮膚は石のように硬く、その割れ目からは血が滲み、全身から悪臭を放ち・・・人々からは忌み嫌われていた。

男はその人の元へ動かなくなつている右の足を引きずりながら何とかたどり着いた。

「わ・・・わたしの様なものでも力を、力を与えて頂けますか・・・

「必死に手を伸ばす男の手はもはや血が通つていない。その手を躊躇することなく両手でつつむと耳元でそつとつぶやいた。

「そなたの人生はこれから始まる、目を閉じるがよい・・・」その人は男を抱き寄せるとき纏つっていたマントでつつんだ。

その光景を人々が見つめるなかマントを戻すと男の手を取り立ち上がらせた。

「どんな気分だ？」

「・・・はい」

男が顔を上げるとそこには好青年の凜々しい姿があった。

「皆に見せてやるが良い・・・」男が振り返ると人々は驚嘆の声を上げた。

「おおっ！ 息子よ！」駆け寄った父親が抱きついた。

「父さん！」

父親は幼少の時以来の肌のぬくもりを感じた。その過去を知る人々から徐々に称賛の拍手が送られた。

「みなの者！ 我は一切強制せぬ！ 力を得たいと思う者だけ神殿へ参るがよい！」

そう言い残すと兵に囲われながら宮殿の奥にある神殿へと向かつた。残つた人々はついていく者とその場に残る者がいた。

「パパ・・・」

「心配するな、ママ達はきっと隠れているはずだ」ジュンはアラトの手を握ると家の方向に向かつて歩きはじめた。

黒ヒョウのハルは神殿内部の石塔の上から人々が列を成して行くのを見ていた。

『あの部屋に・・・大魔術師ジエラ』

その先は天井から天幕で覆われ、その前で兵達が整列をして待つよう指示を出していた。

ハルは天井の天幕をすり抜けるとそこはロウソクの光のみの薄暗い通路が伸びている。

その先の部屋の入り口には門番が2人、両脇に控えていた。

「いいだろう、始めよ！」

部屋の中からジェラが声を掛けると門番は天幕に駈け寄り外の兵に何やら指示を出した。

それを受けて天幕の外に居た兵は並んでいた人達を10人ずつに分けて中に通した。

最初の10人が部屋に入つてから少し時間を置いて次の10人が呼ばれて部屋に入つていった。

『 いつたい中で何が行なわれているのだ？ ジュンさんは何処に…』

部屋に入るにはそこしか入り口が無かつた。

ハルは天幕の外まで戻ると人の姿になり紛れて並んだ。

「つき！ お前までだ」

ハルはその列の最後に並ぶと天幕の中に進んだ。その薄暗い通路の先に扉があり門番がそれを開くと中へ入つた。

『 これは…』

そこは香の香り漂う空間に、先には波打つ2つの光の通路があつた。向かって右手には青、左手には赤の光をそれぞれ放ちその中間にジエラが立っていた。

ジェラの顔は黒の布で覆われていて見ることはできなかつた。

ジェラは無言で1人1人に青の道、赤の道に進むよう指示をした。

既にこの部屋に入った時から人々は香のせいだらうか？ 虚ろな目

をしており大人しく指示に従っていた。

ハルは部屋に入った時から鼻を閉じていた。人の何倍もの嗅覚を持つていたが獣人の特性でそれらを上手くコントロールすることが出来ていた。

ジェラは最後にハルを見た。

ハルは同じように青の道に進め、と指示を受けた。ハルは疑われぬよう、大人しく青の道に進んだ。そこは外から見た感じでは分からなかつたがどうやらジェラの魔術による異次元に続いていた。

さらに進むと巨大な空間が現れ、この道に進んだ者はその中に集まつていた。

ジェラに付き従つた者達がひと通り振り分けられるとその道が閉ざされた。

「お前達は我に選ばれし者！ 我より与得る力により魔人、それ以上之力を得る！」その空間に響き渡つた。

すると突然、上空からその場に蓋をするかのような圧力がかかつた。

「なつ、なんだ！？」

その場のハルだけが正気を保つていたが他の者達は抵抗すること無く足元に倒れ込んだ。

やがて空間を呑み込むように白い煙がその場を覆うと人々はその煙を吸い込み、徐々に身震いを始めた。

『これを吸つては』ハルは息を止めた。隣にいた人までもが見えなくなるとハルは黒ヒョウに姿を変えて警戒した。

ゆっくりと煙が消えていくと人々が立ち上がつた。それらを見るやハルは初めてメドルの城で出会つたあの魔人を思い出した。あの威圧感、圧倒的な存在、それに近いモノを感じた。

人の倍ほどあるその姿は人に似ているが、全身は黒く飛び出た骨が形を変えそれが鎧のように身を囲い、手足の指は鋭利な刃物のよう

でそれは自在に伸縮していた。

『マドも妖魔人であつたがこここの者達は魔人、いや、それ以上か・
・・』

「我が忠実な戦士達よ！　お前達はその力をこの私の為に捧げるか
！」

何処からともなくジェラの声が聞こえるとそれに答えるように一同
がひれ伏した。

完全な妖魔人となつた彼らには以前の記憶は無いように見えた。

「これからお前達には近いうちに魔人との決戦に備えさらに特別な
力を与える」

それを聞き終えると空間の中へジェラが現れた。それを見たハルは
咄嗟に妖魔人の影に隠れた。

「我が戦士達よ！　顔を上げよ！」ひれ伏していた一同が顔を上げ
るとジェラはその顔を覆つっていた布をゆっくりと外した。

『あれが、ジェラ！？』

ハルはその顔を見て驚愕した、女性なのだ。

『大魔術師』と呼ばれるからにはてつきり男だと勝手に想像をして
いたのだ。

歳の頃は、恐らくスーランに近いだろう。

『それにしても・・・』

ハルは『魔性の女』という言葉が頭をよぎった。

『世の中にはこれほどまでに美しい人がいるのか・・・』

ジェラは1人の妖魔人に近づくとその者に言った。

「我が戦士達よ！　これからこの者に特別な力を与える！」

そう言うとジェラはその者の胸に両手を当て何かを呴き出した。そ
の妖魔人は胸から指先まで赤い光が行き渡ると大きく息をした。ジ
エラはそれを見て笑みを浮かべると皆に問うた。

「この者の力を見たくは無いか！」すると一斉に妖魔人は雄叫びを

上げた。

「よからうつー では見せてやるつ、その力を！ メギアドス、連れて参れ！」

ジェラが外に呼びかけるとメギアドスの後ろに両脇を兵に掴まれて来た者を見てハルは一瞬、目を疑つた。

『まさか・・・ジユール！』

それは紛れもなくジユールであった。

ジユールは両肩から袈裟がけに呪文らしき文字と宝石を散りばめた様な帶で包まれ手足もそれにより自由が効かないでいた。

『なぜ、あいつが！？』

ジユールはジェラの元に連れて来られると睨みつけて言つた。

「お前が人間だつたとは、まったく・・・くだらない事を考えおつて」

「私が人間だということに気がつかないとはな。魔人共も所詮その程度よ」

「俺をどうしようと好きにするがいい、だが本氣で俺を倒そうと思つてているのなら後悔することになるぞ」

「ジユール、もうお前には後が無い。私を倒さぬ限りハデス様には顔向け出来ないぞ」

「望む所だ、人間如きが本気で我ら魔人を倒せると思つているのか？」

「ジユール、ではお前の本氣とやらを見せてもらおうか。このわたしの忠実なる戦士に勝てば私を好きにしてもよいぞ」

「・・・すぐに終わらせてやるー」

空間の中心にジェラの戦士とジユールが対峙をしていた。

「我が戦士よ！ その力を見せてやるがいい！」

妖魔人はジェラに一礼をするとジユールを見て言った。

「お前・・・食つてやる・・・」

「調子に乗りおつて！」

ジユールは黒い水の体になると先に攻撃を始めた。

指先が針のように飛び出すと妖魔人を貫きさらに串刺しの妖魔人を持ちあげると口から電撃を放つた。

「ジェラ様、なかなかの攻撃ですな」メギアドスはニヤリとした。

その一連の攻撃で妖魔人は全身を焼かれ、投げ出された。

「他愛もない。終わりだ！」

ジユールはジェラを見下してみるとジェラは不吉な笑みを浮かべていた。それを見てジユールは焼け出された妖魔人を見た。それは胸の辺りから指先にかけて赤い光が全身を流れていくと何事も無かつたかのように立ちあがつた。

「小賢しい真似を・・・」ジユールは再び戦闘態勢に入つた。

はあああああっ！

ジユールは胸の辺りに黒く雷を放つ球を造り出すとそれは徐々に大きくなり分身を造り出した。

次にその体を2体に分けさらに4人・・・8人と妖魔人を取り囲んだ。

「覚悟しろ！」分裂をしたジユール達は次々に飛びかかった。

妖魔人は骨の鎧を高速で回転させるとそれを次々に粉碎していく。妖魔人の回りには黒い水が一面を覆っていた。するとそれがボコボコと波打ち始め次の瞬間、妖魔人を黒い水が包んだ。

しばらくして息の消えかかる妖魔人を覗き込むようにその球から二

ユッ！ とジユールの顔が伸びてきた。

「この中で息絶えるのを見届けてやる、馬鹿な奴だ」

その妖魔人が息絶えるのを見たジユールはジェラを見ると姑息に微

笑んだ。

「次はお前だ、ジェラ！」

そう言うジユールにジェラは、フツ、と返した。

スッと妖魔人の目が白い光を放つと黒い水の中で姿を変えていた。全身に幾つもの口が現れると一斉に黒い水を吸い込み始めた。

「なっ！ なにっ！」

突然のその吸い込む力に抵抗できずジユールの顔が必死に吸い込まれのを堪えていたが、妖魔人は最後のジユールの顔を大きな口でかぶりつくとそれは喉を通り腹に収まつた。

「ジェラ様、呆気なかつたですな」

「まあ、そういうな。確かにもう少しこの能力を確かめたい所ではあつたがこいつらは到る決戦に備えてさらに改良を加えなくては」「そうですな、ではジェラ様。次の者達も待っていますゆえ」

するとそれを制するようにジェラは1人の妖魔人を指した。

「一匹おかしな奴が紛れておる・・・」

ハルは覚悟を決め人の姿になると立ちあがつた。

「ジェラ様、こいつは・・・」

「なにを企んでおるのか。返答次第ではここから生きては出られんぞ」

ハルは妖魔人が飛びかかりそうな状況で2人に歩み寄つた。

「私はアルミアの戦士！ エドス参謀の配下ハル獣隊長だ！ 訳あつて人を探している」

ハルの覚悟の目を見たジェラは思い出した。

「エドス・・・そうか、奴には借りがある。まあ、いいだろう。大人しくアルミアに帰るがよい。

これで『借りは無しだ』と伝えろ、よいな」

メギアドスは『借り』を案じて聞いた。

「ジェラ様、こいつを逃がしてはこの計画が知られてしまします

「よい、いざれアルミアも我らに協力せざるを得なくなる。ハルとやら、ついてこい！」

妖魔人を残しジョラとメギアドス、ハルはその空間から神殿へ戻つて来た。

ハルは黒ヒョウの姿になるとジョラに振り向きざま軽く会釈をしその場を無言で去つて行つた。

「ジョラ様、本当に良かつたのですか？」

「ああ、奴等とはまた会うだらう」

2人は天幕を通り外に出る通路に差し掛かつた時、後ろから声を掛けられた。

「ジョラよ・・・人間だったとは」威圧感のあるその声に2人は咄嗟に振り返つた。

そこには黒の衣装を纏つた人が立つていた。その声にジョラは聞き覚えがあつた。

「ダイム・・・」

「ジユールはどうした？」

横からメギアドスが答えた。

「あの魔人か？ 我らの実験台になつてもらつたが。まあたいして役に立たなかつたがな」

ダイムはそれを聞き流すとジョラに問つた。

「ジョラよ、ハデス様を裏切つてまで何を企んでおる？ 返答次第ではお前を裁判にかけねばならぬ」

「ダイム、我らを見逃してはくれぬか・・・」ジョラの緊張した顔をメギアドスは初めて見た。

「まずい！」と悟つたメギアドスはジョラの1歩前に出た。

「なんの為にだ？ まして人間と知つたからには見逃す事はできぬ

ダイムは纏つた衣装の中から両手に杖を持ち、広げた。

「逃げるぞ！」 ジュラは言い残して振り返ると走り出した。

メギアドスはダイムの前に仁王立ちで構え、全身に力を込めると飛び掛かった。

ジュラは逃げる途中、メギアドスの断末魔を聞いた。

ジュラは神殿の中の階段を降り、地下の通路を駆けていた時、突然目の前を火の壁が塞いだ。

「くつ！」

立ち止まるジュラに、その火がダイムの形をつくるとそれがいった。

「逃げても無駄な事はわかっているはず」

ならば！ とジュラは異空間を造り出し、そこに飛び込んだ。

「やつはここまで追つてこれまい・・・」

しかし安心したのもつかの間、見る見る空間がドロドロに溶けながら縮んできた。

逃げ場を失いこれ以上は危険と覚悟を決め通路に飛び出した。

「どうした？ 逃げるのでは無かつたのか？」

息を切らすジュラに近づいてその首を掴むと地から足が離れた。

「ぐつ！」

「大人しくハーテス様の裁きを受けろ」 その言葉を最後にジュラは意識を失った。

ダイムはジュラを担ぐと来た道を歩きはじめた。

「誰だ！？」

何かの気配を感じたダイムは振り返った。

「人間が・・・何か用でもあるのか」

「その娘に用がある」

薄暗い松明の明かりの中から男が姿を現した。その顔はよく見えな

かつたが、その目は・・・

「きさま！ 人間では無いな！」

ダイムはジェラを下ろすと杖を取り出し構えた。杖の先に付いている水晶が光を放つとその男を包んだ。

「これがどうした？」

男は涼しい顔で答えると近づいてダイムの首を掴んだ。

「おっ！ お前！ ぐつ・・・」

ダイムの体は黒い煙を出しながら蒸発し、消えていった。

「 ジエラ・・・」

男はそつと抱き上げると暗闇に消えて行つた・・・

ジエラの術

ジエラの術

その頃、ランとスー・ランは正門から少し離れた場所にある崩れた城壁を登ると、皆の近くに身を隠しながら覗いていた。

「ざつと、10人位ね。あいつが親玉かしら？」

「そうみたいですね。太っているし……」

「えっ？」

「ちょっと、ラン……そういうこと言つんだ」

「わたしなにか言いました？」

ランはとぼけた顔でスー・ランを見ると、スー・ランは、「の～！」といった感じで首を腕で絞めた。

ランは自分でも気付かないうちに少しずつ以前のような余裕が出てきていた。

実際、ハルに鍛えられた事もあり先ほどの勝負でも冷静に勝ちを収めたことがそうさせたのかも知れない。

「ラン、私が雑魚を引き受けるからあんたはその調子でのデブの親ビンをやつておしまい！」

ランは小声で「了解しました」と敬礼してみせた。

スー・ランはそれを笑つて返すと堂々と通路の真ん中に出た。

「お兄さんたちへ、ちょっと迷子になっちゃつた」だれか案内してくれない？」

スー・ランはマントを外すと色氣を全面にして近づいていった。

「おい、こいつ人間の女だ……」1人の妖魔人兵が気付くと他

の者達も気付いた。

「ベルムグ様、人間の女が一人でやつて来ました」

「なに、1人だと？」ベルムグは怪しげにスー・ランを見た。

「何だ!? 商売女か?」

スー・ランは首を傾げて腰に手を置くと言つた。

「まあ、失礼しちゃうわ! でもジエラ様のところまで連れて行ってくれたらお礼をしてもよくてよ?」

「なんだ、そうか。おい! こいつをジエラ様の神殿に連れて行け! 我々好みの女にしてくれるだろ!」

兵が2人スー・ランの両腕を掴むと近くの階段へ連れていった。

「ちょっと!? 2人つて……」

わざと連れて行かれたスー・ランは半分笑いながら振り返つてランを見ると『残りは私が?』と胸に人差し指を立てていた。

「どうしよう でもやらないと」ランは気持ちを固めて頷いた。『私ならやれる!』ランは恐る恐る出ていくと近づいていった。

「あの~ すいません。私の相手をしてくれませんか?』

それに気付いたベルムグ達は警戒する事も無く「なんだ、他にもまだ居たのか。おい、そいつも連れて行け!」ベルムグがいうとまた2人の兵が近づいて来た。

それを見たランは肩に背負つた刀を掴むと兵が一瞬、なにつ! と、仰け反つた。

「1番大事なのは絶対に油断をしない事!』

ランはその場から瞬時に飛び上ると刀を抜き、降下するのと同時に上段に構えた刀を一気に振り下ろした。

「ラン・・・手加減つてものを知らないのかい?』

「あの・・・まさかここまでとは

ベルムグを始め兵達どころか正門も粉々に崩れていた。

「逆に逃げ道を塞いでしまったね。ここに居たら見つかるだろ？」「少し離れていようか」スーランは呆れた口調で言った。

崩れ落ちた砦は燃えた焚き木が散乱していて、それがサルージにとつては良い目印だった。

サルージはオラルの指示通りに足の速そうな馬車を見つけ戻ってきたところだった。

「なんで正門が？」

サルージは近づいていくと確かに先ほどまであったはずの正門が崩れ落ちていた。

「サルージ！」

声の方を向いたサルージはランとスーランが馬で駆けてくるのを見た。

「あれ、お2人さん、どうしたんだ？」

「ちょっと訳ありでね。それよりなんとかあの瓦礫をどかして逃げ道を確保しないと」

「あれを？」

「人が通れるくらいでいいからさ」

「そんな簡単！」

「その銃があるじゃないか？」

「まあ、でも余計に壊しちゃうんじゃ」

「『ごた』」た言わないで1発かましてみなよ！」

スーランに言われるがままサルージは銃を構えた。

「もう、知らねえですよ」半分ヤケクソで引き金を引いた。

『バシュ！』

それは丸い円を描くと崩れた正門に向かっていき見事に円形の通路を確保した。

「へえ～ やるじゃん！」スーランはサルージを叩くと笑つて言った。

「まあ！？ こんなもんでよければ、サルージは予想よりも上手くいった事におどけてみせた。

「あんなことするのはあの鬱しかいないわ！」

マドは上空からそれを見ていた。マドの足にはジュンとその家族がしつかり掴まっていた。

アラトはスーラン達を見ると大きな声で呼び、それに気付いたスーラン達は大きく手を振つて答えた。

薄つすらと日が昇つて来たころ、合流したジュンの家族とスーラン達は崩れた正門の前で馬車に乗りハルとオラルを待つていた。そこに瓦礫を飛び越えながら黒ヒョウのハルが現れた。

「ハルさん！ こつち！ こつち！」ランが大きく手を振つた。

「ジュンさん、無事でしたか」ハルはジュンとその家族を見て安心した。

「はい、私の家族は家の地下に隠れていて見つかなかつたようです」

「それは何よりです。ところでオラル殿は？」

「だんなは俺たちに逃げる準備をしていてくれつて、本人はどつかへ行つちゃいましたよ」サルージは城を指していった。

「とにかくジュンさん達は馬車に乗つて待つていて下さい。何があるか分かりませんから」サルージに促されてジュンとその家族は荷台に乗つた。

日が昇り暑さを感じはじめたころ、城から走つて来る人影に気付いた。

その人影が徐々にはつきり確認できると、その後ろに10人ほど

の妖魔人に追われているオラルがいた。

「なんで!? どうなつているの!」 サルージは慌てて逃げる準備を始めた。

「旦那のやることはワシには理解できん! みんな乗つて!」

馬車の御者にハルとサルージ、荷台にジュンとその家族、それにスーランが乗り込んだ。

ランはオラルの馬に乗りマドと一緒にだった。

「お~い! 待ってくれ~」

オラルがようやく追いつくとジュンとスーランの手を借りて荷台に乗り込んだ。後ろには妖魔人達が追つてきている。

「ラン!」

スーランが言つよりも先にランは妖魔人達に向かい駆けだしていった。

「ラン! 無茶しないで!」

マドはランの髪を必死に握り、振り落とされまいと左右にあはれていた。それを構つ事なくランは刀を抜くと妖魔人達に向かつて振りおろした。刀の風圧が一直線に轟くと妖魔人達は城壁まで吹き飛ばされランは身を翻して皆の元に駆けていった。

「オラル、この娘は?」

スーランはオラルが背負っていた人を降ろしたのを見て聞いた。

「この娘は恐らく・・・魔術師だ」

メイロの城が見えなくなつたところでハルは馬車を止めた。

「だんな、またこんな綺麗な人をつかまえて」 サルージは「羨ましい」といつた感じだつた。

皆が見つめるなかジエラは目を覚ました。

「誰だ・・・お前・・・」

「気がついたか？」

オラルが声を掛けるとジユンは起きあがり回りを見渡した。その中に逃がしたはずのハルを見た。

「お前はアルミアの……どうして、お前が助けてくれたのか？」

「いえ、助けたのは恐らく……」ハルはオラルに聞いた。

「俺はジユンさんを助けに探し回っていたらあなたが倒れていたので連れてきました」

ジユラはまだ記憶がはつきりしていない様子で頭を振った。

「そうか……そういえば！？ ダイムはどうした！」

「ダイム？ それは誰ですか？」ハルが聞いた。

「いや……何か悪い夢でも見ていた様な気がする」

夕暮れ時、ジユンは家族を乗せた馬車に乗り込むと礼を言つてオラル達と別れた。アラトはいつまでも手を振つていた。

「オラル殿、やはり私はアルミアに戻らねばなりません」ハルは申し訳ないといった様子だった。

「そうですか」

「ハルさん」ランはまだまだハルに色々と教わりたかった。

「ラン殿、私は基本的な事は全て教えました。あとはそれをどう活かすか、それだけです。それにいざれ我々と力を合わせて戦う日が来るでしょう！ その時は是非、強くなつたラン殿を見てみたい」その言葉にランは涙を浮かべて答えた。

「ハル、我もアルミアに行く。ヒドスに会わねばなら」

ジエラがハルに近づくとランの肩に乗つっていたマドを見つけた。

「お前……」

マドは慌ててランの影に隠れた。それをスー・ランがつまみ出して

言った。

「なにコンコンしているの!? らじくないね~」

「ちょっと、やめっ！ ばか！ 静かにしなさい！」

ジョラが近づいてマドを見た。

「あの時の……男女か？ その姿は何だ？」

マドはランの髪にしがみ付いてビクビクしながら答えた。

「あっ、あの……ジョラ様、これには少し訳が有りまして……」

言いかけるとランが聞いた。

「ジョラ？ あなたがマドを？」

ジョラは黙つてマドを見ていた。

「ジョラっていえばマドが言つていた奴じゃないかい？」 サルージが訊ねた。

「大魔術師……そうだ！ そんなこと言つていた！」 思い出したスーランが叫んだ。

「お前、余計な事を……だが、なぜその姿で生きている？」 宝石を巻き付けたジョラの手がマドを掴んだ。

「あのっ、そちらの方が……」 オラルを指すとジョラは不思議な顔をして聞いた。

「我の術は我にしか解く事はできぬ……何者だ！？」

みなオラルのことを探らなかつたのでその発言に注目した。

「俺は……曲者だ」 オラルは真顔で答えた。

「ふざけてあるのか！？ どうやらこの世界にはおかしな奴が増え始めているようだ。まあ良い。ではハル、参ろっ」

行こうとするジョラに、「ちょっと待つて」とランが駆け寄つた。

「あの、マドを元に戻していただけませんか？」

「コイツをか？ 戻しても良いがただの醜い男女になるだけだぞ。それを持つてはいる力は全て無くなる。それでも良いか！？」

「マドを自由にしてあげたい……」

「ちょっと、ラン！ そんな気を使わないで。わたしあまだこのままいいから

「でも」

そこにサルージがポンポンと、ランの肩を叩いていった。

「ランちゃん、いつでも戻せるんだろう？　だったら急ぐ必要も無いわ！　それに、『こざ』、という時にはだんなが何とかしてくれるつて！」

ジェラはオラル達を見ながら呟いた。「何者・・・おかしな奴らだ」

ハルは身支度を整えると荷を馬に積み、それを見たジェラはハルにいった。

「ハル、その馬は必要ない。直ぐにアルミアに着くゆえ」

「しかしアルミアまでは半月以上かかります」

ジェラは、それが？、という笑みで返した。

「オラルとか言つたな。そなた等は何処へ行くのか？」

「そういえばまだ決めていなかつたな・・・」

このヨマダイから先は大海が行く手を阻み、その先の事はまだ考えていなかつた。

「だんな、なんなら一度ルードシアに戻りますか？」

サルージのその一言にランが期待した表情でオラルの顔色を窺つた。

「そうだな・・・一度計画を練り直すか」

その言葉にランはことのほか喜んでいた。

「ではルードシアで良いな」

ジェラはそういうと少し前に出て両手を前に翳した。すると人の大きさほどの空間が歪み始めた。

それに何かの風景が浮かび始めると・・・それはルードシアの城を映し出した。

「すごい！　これ、ルードシアの城だ！」　サルージが近づいて覗きこむとジェラはオラル達にいった。

「そなた等が我を助けた礼だ。さあ、行くがよい！」　サルージは驚

いて聞いた。

「まさか、この中に入れつて！？」

「信用できんか？」

オラルは馬を連れて来るとハルに寄つた。

「ハルさん、またいざれ会う事になるでしょう。その時を楽しみにしています」

「はい、色々御世話になりました。事の次第はエドス参謀に報告しますので是非アルミアに来て下さい」

互いに硬い握手を交わすとオラルはためらう事無くその空間に入つて行つた。

「じゃ、私達も行こうか！」

スーランがポンっと、ランの肩を叩くとオラルの後を追つて入つていった。

「ハルさん・・・」

ハルはランの両腕をしつかりと掴むと、「大丈夫！」と頷いた。その優しい眼差しにランは小さく「はい！」と答えると笑顔のまま空間に消えていった。

ランにしつかりと巻き付いていたマドはジエラに、「エヘヘヘ」と、何やら嬉しそうな表情を浮かべそのまま消えていった。

「ではあつしも・・・」最後にサルージが恐る恐る入つて行つた。

それを見送つたジエラは「次は我々だ」というと空間にアルミアの城が映し出された。

オラル達はルードシアの城近くの森の中に居た。

「あのジエラってすごい力を持っているね」スーランが城を見上げていった。そこに兵が近づいて来た。

「おい！ そこで何をしている！」

森の中では以前のよつに姫の一団が食事を楽しんでこる最中だつ
た・・・

再会

その夜、マリーの店ではランの家族とともに再会の宴が開かれていた。

「今夜は貸しきつよー！」

マリーが嬉しそうに叫び、「さあが、太っ腹！」 サルージがポン！と腹をたたいた。

奥のテーブルを2つ合わせそこにマコーリーとライム自慢の料理がさらり華やかさを増していた。

「そうですか、ランが・・・」

「ええ、今じゃ魔人を手玉に取つてね！ 好き放題やつているわよ！」

シンに答えるスーランの身ぶり手ぶりを交えた大袈裟な言い方にランは反論出来なかつた。特にメイロでの正門を粉々に破壊してしまつた事。『刀の力』と言い訳をしても恐らく誰も信じてはくれないだろう。

「そうですか。オラルさん、良い経験をさせていただきました。感謝します」

「いえ、こちらが助かりました。おれらへランさんはもつと強い相手と戦いたくなつていてるのでないでしょうか？」

2人がランを見ると、マドが田を隠すようにしてランの声を真似した。

「もつと私を楽しませてくれる人いないのかしら？ なんなら！」

に居る皆でかかつてきても良くてよ！」

それを聞いたランはマドを両手で驚掴みになると左右に引き伸ばし少し引き攀りながら答えた。

「父さん、そんな事ないから！ まだまだ修行中の身です！」
その仕草をみても、まったくマドは、ぐらにしか思つていなかつたが母レイだけは違つていた。

びっくりした様子で口元を覆うとそれに気付いたシンがポンポンと肩を叩いて微笑んだ。

「どうやらいろんな意味で成長したようだな」

「・・・はい」レイはランの意外な成長ぶりに少し戸惑つていた。

「ところでマリーさん、我々が旅に出たあとまた魔人が現れたと聞きましたが？」

その問いにマリーは嬉しそうに答えた。

「そうなのよ！ なんとかキアラ隊長の部隊がくい止めていたんだけどね、あいつら人數増やして城内まで侵入しようとして来たのよ！ そしたらね～！」マリーがシンを見て満面の笑みを浮かべた。シンは照れくさそうに頭を搔いた。

「ではカズチ、アキム。元氣でな、しばらくしたらまた会いに来る

「ああ、この街の事は我々に任せてくれ」

「それじゃ・・・」シンとレイを乗せた馬はルードシアに向けて歩きだした。

カズチとアキムもシン達と一緒にルードシアに行くつもりであったが、やはり長く過ごしたこの街を出る事はできなかつた。

「さてと・・・アキム、この街に賑わいを戻さんとな」カズチはアキムの肩に手を置いて2人を見送つた。

「レイ、ルードシアまでは10日ほどかかるだろ？ 大丈夫か？」

「ええ、あなたと一緒になら何も心配いらないわ」

レイはシンの背中に寄りかかるとシンは繋いである手を優しく撫でた。

シンとレイを乗せた馬はミンを出てから8日目にやくつ田の山脈を抜けた。

ルードシアとミンに跨る2つの山脈を越えたのは2人とも初めてのことだった。山の中腹にある見晴らしの良い丘に着くと眼下に広がる広大な土地を海が囲っていた。

「オラルさん達が言っていた通りのすばらしい国ですね」

「ああ・・・こんなに綺麗な国がすぐ隣にあったとは」

「あつ、あそこ」レイの指差す先には森の中に小さく映る城があった。

「ここまでくれば明日には着くだろ？」2人とも笑顔を交わすとゆるやかな獸道を下つていった。

早朝、シンはテントを片付けるとレイが水汲みから戻つて来ないと気付いた。

何度も呼んだが返事が無い。シンは不安を押し殺しながら近くにある沢に向かい岩場を駆け抜けた。

気づけば大きな岩に隠れ、しゃがんでいるレイが見えた。

「レイ、大丈夫か」

レイはシンに気付くとホッと胸をなで下ろした。シンは近づきながら遠目に見え隠れする魔人を確認するとレイを連れ森に隠れた。

「もう大丈夫だ」

「シン、見つかるのが怖くてここから動けなかつた」レイは擦れる声を出しながら震えていた。

レイが落ち着きを戻すとシンは岩の影から覗いた。先には6人の魔人が辺りを伺いながら沢を下つて歩いていくのが見えた。シンはレイを連れて戻ると馬にレイを乗せ引きながら距離をとり、沢を下つていった。

沢から小川になり煙が幾つか見える丘に出るとその先の森に続く整備された道が見えた。

シンは畠に人の姿が無い事を疑問に思つと魔人の一団を思い出した。

このまま小川沿いに進むか？ 考えていたとき森から馬に乗つた3人の兵がゆっくりと現れた。

見回りだらうか？ 時折笑い声が聞こえた。兵達は畠の畔道に進むと土手から小川に降りていった。

兵達は馬を降りて腰を降ろすと一人の兵が腰の袋から酒を取り出して飲んだ。『仕事中だぞ』などと冗談を言つてゐるのだろうか？ 話し声は聞こえなかつたがそんな感じのやり取りだつた。

シンはそれをみると馬を引いて行こうとした。

「どうした？」

馬が引つ張るシンを拒否した。目を大きく開き何かに警えている。

兵達の方を見るとやはり水を飲んでいた馬が落ち着かない様子でそれを必死に制していた。

すると兵達を囮うようにモコモコと土が盛り上がり始めそこに先ほど見た魔人が現れた。

「なつ！ なんだ、お前は！」

抑えていた馬が暴れ出して逃げ出したが、その先々に土の中から魔人が姿を現すと逃げ場を失い3頭が寄り添つた。それに隠れるよ

うに兵達も身を寄せた。

「ちょうど腹が減っていたところだ」

「ああ、馬もある。今日はついている」

兵達は剣を抜いてみせたがそれに動じることなく威嚇しながら取り囲んだ。

魔人が雄叫びをあげると倍ほどの体格になり囲いを縮めていった。

「さあて、どいつからにしようか？」太く響く声に恐怖した兵達は剣を投げ出して懇願しはじめた。

「たつ！ 助けてくれ！」

「欲しい物はなんでもやる！」必死に命乞いをする兵達に1人の魔人が聞いた。

「そうか、ならば姫がいる城は何処だ？」兵達は顔を見合わせた。しかしこのままでは殺されると思い1人が口を割った。

「教えれば本当に助けて頂けるのですか！？」

「ああ、約束する。で、どこだ？」

「その道をまっすぐ進むと城があります。そこが姫様の館です」

「なるほど。間違いないな？」

「はい！ 間違いないです」

「そうか。では約束だ、行くがよい」

「ありがとうございます！」

兵達は馬を連れることなく走って土手を駆けあがり我先に森へ続く道に消えていった。

魔人達は不吉な笑いで見送り少しすると同時に悲鳴に似た叫び声が響き渡った。

「ミギナの奴らも來ていたか・・・」

「ああ、これで揃つたな。後は夕暮れを待つだけだ」彼らはそう言い残して森へ進んだ。

「シン、お城が……」

「奴ら集団でこの城、姫を奪つてもうらじー」

「どうするの……」

「レイ、心配はいらない。もう一度と奴らの好きにさせない！」

夕暮れが迫る頃、2人は姫の館近くの一番高い木に登り、気配を殺して様子を探っていた。

そこから見える城は夕日を浴びて黄金の輝きを放っていた。

門は女性をモチーフにした彫刻である。美しい姫なのだろうとそう思つていた時、何やら慌ただしく兵の一団がその門に到着した。

1人の兵が門に近づくとそれに合わせるように開いた。兵は小走りに石畳の通路を抜け、王邸に続く階段を駆け上がっていくと中に消えていった。残された兵達は何かを警戒するように陣を組んだ。やがて王邸から兵が戻ってくると兵達に指示をし、それぞれの警備の場所に就かせた。

恐らく小川での一件に気付き警戒をはじめたのだろう。

やがて日も暮れ松明が焚かれた。

シンは警備兵が城内にはおらず、門の外に集中していることに疑問を持ったが暫くたつても何も起こらなかつた。

少し眠気を催した頃、伝令らしき馬が着いた。慌てた様子で何かを伝えたあとその馬がまた戻っていくと、そこにいた兵の半分がそれを追つて駆け出していった。

何かあったのか？ とシンはふと木の下からくる匂いに顔を向けると、魔人達の匂いだつた。5人いる。

彼らは城に進んでいくとわざと見つかるかのように雄叫びを上げた。

「隊長！」

その声に答えるかのように残っていた兵達は門を囲うように陣を組んだ。さらにその兵達を魔人達が取り囲み威嚇しはじめた。

兵達は約20人、それに対し魔人は5人。しかし数では勝つても実力では敵わないだろうとシンは思った。ところが魔人達は威嚇はするがなかなか仕掛けない。兵達も盾で陣を組んだまま動かない。シンは思つた。先ほどの兵の半分が向かつていつた方に魔人の本隊があるのか？すると下にいる魔人はおとりか？ しかし入り口はここに違ひないはず。

『何だ！？』

目の錯覚だらうか、暗くて城内はよく見えなかつたが確かに何か動いた。目を凝らすと石畳の脇の手入れされている花壇がモコモコと幾つも盛り上がりってきた。それはシンが昼間に見た光景だった。

『まづい、誰も気付いていない！』

「レイ、ここで待つてくれ！」

シンは木の上で手を組み念を込めると背中に背負つた箱から大きく太い剣を呼んだ。それに飛び乗ると暗闇の中を王邸を目指して飛んだ。シンは階段の1番上に飛び降りると剣は上空に残した。

魔人達は次々と花壇から這い出でくると階段を上りはじめた。その数は30を超えていた。

「だれだきさま、人間か！？ 死にたくないればそこを退け」魔人達は階段の中腹で止まるとシンを睨みつけた。

シンは階段を1歩降りた。

「お前達は魔人か、それとも妖魔人か！？」

「なんだと？ 我々は誇り高きアルセルディムの魔人兵だ！」

するとシンの後ろで明かりが灯つた。振り向くとそこに姫が凛とした気を放ち立っていた。

「私はあなた方を呼んだ覚えはありません。すぐに御引き取りを」

従者の持つ光を受けたその姿にシンは暫し時を忘れた。

姫が門を指すとゆっくり開いた。すると外にいた魔人達は陣を組んでいた兵達を飛び越え一斉に階段まで駆け寄り合流した。

「ミギナよ、なにをしている！」

「ゼル、まあまて。楽しみはこれからだ。姫よ、そなたの持つ守護神の力を渡せば命だけは助けてやる！」

『 守護神？ 』

シンが姫を見ると両手を天に向けた。

「守護神は形として有るものではありません。守護神とは自然界そのもの。あなた方が望むようなものはこの城にありません」

ゼルはミギナより階段を一つ上がつて言った。

「ミギナよ、話では姫を食つた者だけがその力を得ると聞いた。ならば俺が頂ぐ」

「そうか・・・」

そういうとミギナはゼルをその大きい腕で力任せに階段に叩きつけ気を失つたゼルを下に放り投げた。

「姫様！」

姫達の居る奥の通路から甲冑を身に纏つた魔人が歩み寄ってきた。

「ミギナ、良くやつた。後は任せるとよい」

「はい、ウォズル様」

階段にいた魔人達はウォズルを見るとひれ伏した。

「こここの兵達はだいぶ鍛えられているようだ、特に王は剣術に優れている」その言葉に姫は声を荒げて聞いた。

「あなた、父を！」

「さあ、だがあの腕ならばまだ持ちこたえていよう。部下もなかなか良い腕をしている。さあ、姫。私と一緒に来るが良い」姫に近づくウォズルの前をシンが塞いだ。

「人間が、邪魔をするな」

「そうはいかない、私はこの国に大事な用があるのだ。貴様らの好きにはさせん！」

「血迷つたか、それとも素手でやるつもりか？」

「私はオラルさんにお返しをしなくてはならない。彼らが来る日までこの国には1人として魔人を入れるわけにはいかない！私は今日、鬼となる！」

シンは全身の血を滾らせ鬼の形相で印を組み念を込めると、シンの回りを風が渦巻き背負っていた剣が次々に飛び出した。その数は数百、いやそれ以上か。

月に向かつて螺旋を描きながら舞い、誰もがその美しさに見惚れていた時、それらが一気に落ちてくると階段にいた魔人達に突き刺ささり1人残らず蒸発して消えていった。

「きつ！ きさま、何奴！」

シンの合図で上空に残っていた大剣がウォズルを貫きシンは王邸に

駆けていった。

「いえ・・・たまたま通りかかつただけですので」

「またまた、謙遜しちゃって！ 1人残らずやつつけてしまったの！」

マリーはだいぶシンを気にいつていたらしくバシバシヒシンを叩いた。

「ひやー たいしたもんだ！ やすがランちゃんのパパだ！」 サルージが乗つていうとランはまるで自分の事のように喜んだ。

「それでね！ 王様が直々にこの国の為に力を貸してくれつて。わざわざ店まで足を運んでくれたのよ！」

「さすがはシンさん！ やることが違うね～！」 サルージがあまりに褒めるものだからシンは顔を赤らめて答えた。

「私もまだまだ未熟でした。今の世の中、守るためにには時として戦わなくてはならない。それにオラルさん達を見ていると私にはたいした力の無い事に気付かされました」

「シンさん、世の中には悪を断てる事の出来る人と、出来ない人がいます。我々はそれが出来る人間です。戦つて人を守る、国を守る、弱い人を守る。それで良いのではないでしょうか」 シンは両手を見ながら答えた。

「オラルさん、私は戦いを始めるときあなたを超えて、もっと力が欲しいと、そう強く願いました。ただ、どこかで自分を解放出来ずに力を抑えている事に気付いたのです。それは恐らく人としての一線を越える事。感情を無くす事だと気きました。彼ら魔人達は悪に成り切ることでその力を得ているなら、そう考へると恐ろしくなりました」

「シンさんは感情に左右されず思いつきり自分の力を出してみた

くなつたのでしょう?」

スーランの優しい問いかけにシンは自分でも分からずに涙がこぼれた。それに共感をしたオラルは立ち上ると少し間を置いてから話し始めた。

「みんな、聞いてくれ。これから話す事は俺の、俺に関わる人達のこの先の旅の目的だ」

その言葉に食い入るようにオラルに注目した。

一方、アルミアに姿を現したハルとジエラは草原のさらこそとの丘に向こうに見える城を目指して歩いていた。

「ジエラ殿、つまらぬ事を聞いてもよろしいか?」

「何だ?」

「あなたのその力を持つてすればわざわざ歩かぬとも城の中まで空間を繋げる事ができたのでは?」

ジエラは立ち止まると笑みを浮かべてハルを見た。

ハルは面と向かって美しい女性と話をする機会が正直なところ今までなかつた。大魔術師という事を除けばただの美しい女性だ。ハルは妙な胸の高鳴りを感じた。

「ハル

「はい」

「そなたは賢いな。そうだ、こんなに歩く必要はない。しかし私は魔人ではなく人間だ。奴らのような巨大な力は持つてはおらぬ。先ほどルードシアまで空間を繋いだ。そしてアルミア・・・これだけの力を使うと私は術の力を使いつてしまふ。恐らく半月はまともな術は使えんだろう。ゆえに今はただの女だ。今なら下端の魔人共

にも勝てん」

「それは・・・そんな大事な事を」

「これで私の秘密を知ってしまったのはハルよ、そなたで2人目だ」
それを聞いたハルはメイロでの話を思い出した。

「そうだ、エドス。奴に借りがあるといつたろう？　術を使えぬ時の死にかけた私を救つてくれた」

「そうでしたか・・・」

2人の視線の先に上空を舞うエルードの姿があった。

「そなたは賢い、あのエドスと同じように。形はどうあれ今回そなた達に助けられた。私も人間だからな、信用できる者は何より心強い。さあ、そなたをエドスが待つてあるぞ」

城門の回りにはハルの帰りを待ちわびていた大勢の獣人達が今とかとその姿を待っていた。

2人が丘を下つて行くと大きな歓声が聞こえてきた。

「ハル、そなたの帰りを多くの者達が待つてある。そなたの人柄ゆえだろう」

ハル自身、これほどまでに多くの仲間に迎えられる喜びに身を震わせていた。

城に近づくと1頭の馬が駆けてきた、ロージィだつた。

ロージィは馬から降りると構う事無くハルに抱きついた。

「おかえり、兄さん！」

「心配かけたな」うつすらと涙を浮かべるロージィがそれを拭うとジェラに気付いた。

「こちらの方は？」

「エドス参謀の親しい方だ」

「そうですか、王を始め皆が待っています。いきましょうー」

ロージィはハルとジェラを乗せた馬を引いて城に向かつた。

城に着くと多くの仲間の歓声に迎えられた。1人1人の顔を見ると、び懷かしさが込み上げてきた。ハルは人目を憚らず涙を流しながら歓声にこたえていった。

「おお、ハル！ 良く戻つてくれた！ さぞ辛い思いを重ねてきたであろう？」

神殿から王とエドスが降りてくると王はハルをしつかり抱き、そしてエドスも続いた。

「参謀、私の未熟ゆえに今日まで時を費やしてしまいました」

「私こそ、あの時救つてやれなかつた。だがこうして再会できた」喜びを分かち合う2人に黒装束を纏つたジエラが歩み寄るとエドスの目線が移つた。ジエラはそつと頭巾を外した。

「そなたは……」ジエラは驚くエドスにさらに近寄つた。

「エドス……久しぶりだな」

「そうか、無事だったのだな」エドスは何かホッとした笑みを浮かべると肩を寄せ、王に紹介をした。

「王様、この者はあの伝説の大魔術師メイセイの1人娘です」

「なんと、あのメイセイの……そうであつたか。では、ハルと共にここに来られたのもなにか運命なのかもしけんな。さあ、2人とも旅の疲れを癒してくれ。今宵は城を挙げての宴をしよう」

その夜は多くの仲間と共に祝杯を挙げた。

ハルはあまり酒の席は好きではなかつたが今日は違つた。仲間たちに酒をすすめられると次々にグラスを空けていった。

ハルはエドスを始め、仲間達にメドルから今日までの話を事細かく話した。

その話に時折エルードが加わり仲間達はその武勇伝に聞き入つた。

そして話題はオラル達に移るとその人達に是非会いたいと皆が口を揃えて言っていた。

ジョラは宴の途中から中庭に出ると夜空に浮かぶ星を見つめながら思いを巡らしていた。

気になっていたのはダイムとのあとのこと。かすかな記憶を辿るが思い出せない。ただ、何か懐かしい思いを感じていた。そこにエドスが近づき話し掛けた。

「ジョラと呼べばよいか？ それとも・・・」

「ああ、あの頃の私はもういない。今は魔術師のジョラだ」

「そうか・・・まだ忘れられんか」ジョラの頬を一筋の光が流れた。

それから1月後。

エドス、ハル、エルード、ジョラの4人は約束の日を迎えた。

日も高く昇った頃、城の高台にある解放された客間にジョラは空間を創り出すとそこにルードシアの草原が映し出され、オラル達の姿があった。

「では行きましょう」

ハルが入ると続いてエルード、エドス、最後にジョラが入つていつた。

空間を抜けると心地よい風が4人を迎えた。

「オラルさん、この日を楽しみにしていました」ハルがオラルと堅い握手をするとエドスを紹介した。

「こちらがアルミア王国のエドス参謀です」

エドスはオラルの2回りほどの体格。その大きな手で握手を求め

られて一瞬怯んだが優しそうな眼差しに手を差し出した。

「ようやく会う事ができましたな、まずは礼を言わせて下さー。ハルを救ってくれて心から感謝しています」

「いえ、こちらこそ。どれだけ助けられたことでしょう。特にランの先生としてこちらが礼を言わねばならないと思つていました」

「おお、ではそなたが噂のラン殿か？」

刀を背負った娘を見つけると呼んだ。ランは久々の再開に少し照れていた。

「ハルさん・・・元気そうで」ハルは笑みを浮かべて頷いた。

「ということは・・・あなたがサルージ殿「髪を撫でる仕草をすると皆が笑つた。

「ちょっと、それは無いんじゃないの？」サルージは髪を整えるとついでに髪をたくし上げた。

「いや、すまん。エルードから聞いてあるぞー、何でもその鏡で片づいてしまうとか」

「まー、まあね・・・」サルージも上手に事言われて照れてしまつた。

「そこに咲いている綺麗な花は・・・エルードに惚れてあるといふ

「ちょっと、誰がそんなこと!？」ステラはハルを見るとハルは目をそらした。もうつーといいつつ ランの髪に隠れているマドを掴んで持ち上げた。

「こりつー、ちよつ！ 何するのー！」

「あんたが会いたがっていた人がいるでしょー！」

「そんなこと言つてないぢやない！ はなしなさいー、ちよつ！ ・・

・オバン！」

ステラはその一言にカチン！ とくるとジョーラに預けた。

「とってもあなたに会いたがっていたわよー！」

マドはジョーラに捕まるとキヨロキヨロ必死に目を合わせないように

忙しなくもがいた。

「相変わらず気持ち悪いやつだ・・・」

「マドはピタッ！ とその言葉に反応してゆっくりとジエラを見た。

「そういうこと言ひ？ ひどい！ もうお嫁に行けない！ ここで死んでやる！ あんた呪つてやるんだから！」 今度は大粒の涙を流しながら暴れた。

ジエラはそれを見ると・・・後ろに放り投げた・・・。

「ハルさん、マリーさんが食事の準備をして皆さんを待っています。
そこで話をしましょ」

皆が楽しそうに立ち去つて行くのを馬の糞に頭から突っ込んだ
マドが見送った・・・。

「おまたせ！ こんなに賑やかなのは久しぶりだね～ いっぱい食べてね！」 マリーとライムは大皿を持ってくるとエドスに運んだ。
「おお、これは、これは。さっそく頂いてもよろしいか？」
「どうぞ！ まだまだ用意してありますから遠慮しないで！」

エドスの大皿には軽く10人前はありそうな特大の煮込みスープが置かれた。そこには大きな肉の塊や野菜、魚介が詰め込まれていた。その大皿はオラル達が食べるのであればそこに居る人達で食べてもどうかな？ という量だ。

マリーはこの日の為に連絡役のエルードからエドスの大食漢ぶりを聞いていて昨日から準備をしていた。オラル達も話には聞いてはいたが・・・その食い入る姿に言葉を失つた。
食べ始めるとエドスは獣人の姿に変わつていった。恐らく本人も

「気付いていないだろ？・・・

「で、では我々も頂きましょ？」ハルが氣を使つとみな食べ始めた。

「いや、これはおいしい！」普段あまり話をしないエルードがいふと食事を運んで来たライムが話した。

「ありがとうございます、母は姫様のお抱え料理人なのです。実はこの日の為にお城から食材が届きました。是非使つてくれって」

「ライム殿、それは本当ですか？」ハルが聞くと、城の窮地を救つてくれたシンに惚れこんだ王が是非にと。さらにはエドスに直接お会いしたいということを話した。それを聞き終えるとエドスは手を休めてオラルに聞いた。

「ならば礼を兼ねてこちらから伺わせて頂かなくては。それとオラル殿、そのシンという御方は？」

「はい、いまは城にいます。ランの父親です」

「おお、そうでしたか。ではラン殿の父親はよほど使い手なのでしょうな」そこにようやく腹を満たしたサルージが切り出した。

「使い手どころかあのシンさんに敵う奴なんていませんよ！ それこそ怒らしたらどうなるか」

「ほう？ サルージ殿のその銃でも敵いませんかな？」エドスは悪戯心で聞いてみた。

「それは・・・だんなに聞いてみて下さい」

サルージはオラルに話を向けるとエドスがニヤリと見た。

「なかなか面白い事になりそうですな！」

日が暮れ、王に会いに城に向かった。

エドスを先頭に一団が通りを歩いていると街の人たちは『何者？』という感じで脇に寄つた。なかには家に入るやカギをかけ戸を閉める者もいた。

城門に着くや否や大勢の兵が出てくると彼らを取り囲んだ。

「お前達、何者だ！」兵の一人が叫ぶとオラルがその兵に答えた。

「こちらはアルミア王国のエドス参謀です。王の呼びかけに応じて参りました」

「あやしいやつだ、そこを動くな！」

そこへキアラが近づきオラルの顔を見ると湖での一件を思い出した。

「そなたらが・・・王より話しさは聞いている。どうぞひらく・・・」

・

キアラの後をついて行くと王邸に案内され、そこで待つよいこと言い残して奥に消えた。

少しうると王と妃、そして後ろにシンが付き添い現れた。

「はねばるアルニアからよく来てくださいた。あなた方英雄の話はこのシンより伺っています。まあ、こちらへ」

客間へ通されるとそれぞれ席に着いた。王はシンにランの隣に座るよう促した。そこに遅れて姫が来ると王の隣に座った。

「エドス殿、遠い所を良く来てくれた」

「レイド国王、お招き頂き感謝します。ゼイル国王も喜ばれることでしょう」それを聞いたレイドは薄つすらと涙を浮かべた。

「あなた・・・」

ルーシー妃はそっとレイドの手を握るとレイドは涙を拭つた。それ知らない者達は恐らく過去に何かあったのだろうとそれを感じていた。

「なにがあったのかしら？ ラン、知りたくない？」

「ちょっとマダ！ 静かに！」ランは頭の上から身を乗り出して

いたマドをテーブルの下に押し込んだ。

「オラル殿、以前にセーラ姫を救つて頂いた礼をしていなかつた。この場を借りて礼を言わせて頂く」

「いえっ、違います私では・・・」

「そもそも聞いてはいるがセーラ、シンの話を聞くに恐らくオラル殿ではないか？ それ以外に考えられないと」そこにジェラが食い付いた。

「そうだ、ヨマダイで的一件といいそなたは何者だ！？」

確かにスーランやサルージもそこは知りたい所であつたから2人を始め再び皆が注目をした。

「私は・・・だれだ？」またしても真顔で返すと、しかし今回はハルが続いた。

「私も聞きたい、オラル殿は私にかけられた術からも救つてくれた。なにか事が收まらない時にでもまるで何事も無かつたように解決してしまう」真剣な眼差しにオラルは答えた。

「すべて・・・いずれ知る時が来るでしょう」含んだ笑みで返した。
「やつぱりだんなにはかなわないや」サルージが両手を上げるとそのまま後ろで組んだ。

「まあ、いざれ・・・という事にしておいてこれからどうするの？」
スーランは諦めたらしく問い合わせるとエドスがゆっくりと立ち上がつた。

「つい最近、皆も知つてはいるようにアルセルティムが滅びそしてそこから各地に散らばつた魔人達が好き勝手に暴れ出した。メドルも滅びこのルードシアでさえ狙われている。ジェラよ、そなたの妖魔人も例外ではない」

「妖魔人？」レイド国王が訊ねる。

「エドス、ここから先は私が話そう」ジェラは立ち上がった。

「まずはこう呼ばれている。大魔術師のジェラと。そしてザルギスでは闇の十人の一人だ」

「闇の十人？」

「そうだ、アルセルディムを滅ぼしたのは闇の十人の一人、マルカスだ」

「なんとつ！ それは本當か！？」レイドは驚いてジェラを見た。
「いや、そんなはずはない！ マルカスは私の父と親友であつた！
それに彼は人間だ！」

「信じてもらえぬのも仕方のこと。だが今更ウソを言つても仕方あるまい。彼は人では無く魔人であつた。だがマルカスはなぜか人間に姿を変えていた」そう言つとジェラは少し言葉に詰まつた。

「あのハルディスでの戦い以来・・・私は魔人に復讐を誓いそして魔人よりも強い妖魔人を創りあげた。始めは『失敗の連続』であつたが今ではそなた達が倒せなかつた闇の十人の一人、ジユールを一撃で倒せるほどの妖魔人が完成した」

「では、あの黒い水を操つていた・・・」ランガ ≈ MUSAS
I ≈ での戦いを思い返した。

「しかし今の力ではまだまだ闇の十人の長であるハーデスを含め、残りの奴らには到底敵わない。それに今回の事で私の正体は奴らに知られてしまつただろう。私は奴らに狙われる存在になつてしまつた」

「ちょっとまつて？ 『失敗の連続』つて・・・」

マドは首を餅のように伸ばすとジェラに近づいた。
ジェラは一呼吸置いて言つた。

「・・・おまえだ」

「いつ、いや～つ！」

「マドはハリセンボンのようになれるとプシュー！ と縮まりながら天井まで飛び上がりヒラヒラと落ちてきた。

「闇の十人とは、魔人達が世界を我が物にするため特別な能力を持つ者たちを集めた組織の名だ。

その中で私はただ一人の人間だった。そして私の力を知ったハデスは私を快く迎えた」

「人間なのに？」

「人間であつたならどうに殺されておる、魔人の姿を借りて仲間のふりをしていた。

そして今回の計画を知り彼らが世界を掌握した後、私がそつくり頂く計画を立てた。

その時までにはハデスを倒せる妖魔人を完成させる自信があつた・・・

・
「ならアルセルデイムの事は？ 奴はマルカスを送つてアルセルデイムを滅ぼしたがその後、誰かによつて殺されたと。ジユールはそう言つていた」 エドスは腕を組んだ。

「そこだ。我々も調べたがどうどう誰が殺つたのか分からなかつた」

「ではこれから先は、その闇の十人とハデスを倒すという事になるのか？」 サルージが酒を飲み干すと赤ら顔で明後日の方に聞いた。

「まあ、そういうことになるな」

オラルがサルージの空になつたグラスに酒を注ぐと「だんな・・・

「いいつつ嬉し涙を流した。

「我々も及ばずながら協力させて頂きます」 オラルはスーランと酒を飲み干すサルージ、そしてランを見ると笑顔で答えてくれた。

シンはランの肩を頼もしく叩いた。

「それは心強い！ アルミアも共に闘いますぞ！」エドス達も気持ちは同じだった。その光景に姫が初めて言つた。

「なんとも頼もしい限りです、ねつ、お父様！」

「ああ！ 閣の十人だか何だかは知らないがザルギスに乗り込んでやろうではないか！ そこでだが、ザルギスに精通しているのはジヒラとやら、そなたしかおらん！ 是非そなたの力を貸してくれ！」

夜が更けても彼らの話は止まる事がなかつた……。

決戦の地　： 魔人国ザルギス！

決戦の地　： 魔人国ザルギス！

ザルギスには大小を含め15の城がある。

そのなかでも7つの城はザルギスの防衛の要となる重要な位置づけであった。

7つの城は闇の十人の上位7人が城主となり下位3人はハデスに認められなければ城を持つことはできない力がものいう組織でもあった。

山脈の城ソダイ城は闇の十人ダイムの居城ではあったが現在のところは誰が城主か分からぬ。

ジェラはハデスを除き各城に住まう闇の十人、1人1人を早朝までに殲滅するという大胆な計画を立てていた。

ジェラの空間を繋ぐという術、これは他の闇の十人にはない特別なもので今回の作戦のために術の精度を増し、6回までなら何とか体が持つであろうと予想をしていた。

しかし6回全てを使うと恐らくザルギスからみな帰る事が出来なくなるかも知れない・・・。

ジェラが最初に砂漠のハラール城を選んだのには理由がある。その広大な砂漠であれば人気も無く夜であればなおさらでアルミアの軍隊などを知られる事無く駐留できるからだ。

この戦は闇の十人がそれぞれ1人の時になる機会を狙つたジェラの作戦であった。

この時期、雨期に入る前にハヂスはそれに城や土地を与えることを決まりとしていた。

選ばれた7人はそれぞれ入城し今後の方針を決めるため部下を選ぶ。魔人達は新たな城主に重役として選ばれるよう画策する時期でもあった。

しかし上位7人の力は衰えるどころかますます力をつけ、2年前から城主が変わることがなかつた。唯一、ダイムの城を誰が任されるのか・・・しかしジェラはダイムの後に闇の十人を継げる者が現れていないことも承知していた。

ジェラの作戦では6回の制約がある空間移動をいかに効率よく使うかにあつた。

まず西のハラール城近くの砂漠に空間を繋げて全軍を移し（1回目）オラル率いるルードシア軍がハラール城を制圧予定。

そこを起点に南の城メルソフィアヘシンが率いる妖魔人7人とともに移す。（2回目）

同時に北の城カルガラヘスラン、サルージ、ラン、おまけでマドを向かわせる。（3回目）

エルード率いる妖魔人の鳥獣50人は湖の城ルメイロトに。（4回目）

オラル達は城を落した後、エドス率いるアルミアの軍隊と共に森の城リンションへ。これで5回目。

オラル達とアルミア軍は飛行能力が無い。

他の部隊にはマド、シン（妖魔人）、エルード（妖魔人の鳥獣）がいる。

集合は明け方の落とし終えているであろう森の城リンションだがオ

ラル達とアルミア軍が制圧していることが絶対条件だ。

そこからハデスの居城、その名の通りハデス城へ全軍で進軍する。進軍すればハデス城に着く前に気付かれてしまうがそこは仕方ない。そのためにアルミアの1000の軍勢がいる。

そしてハデス城が最後の決戦の地・・・6回目の空間移動により全軍で帰還する予定になつてている。

この計画通り上手くいくかは誰にも分からぬ。

ただ、ジェラは闇の十人と対等、いや、それ以上のちからを持つていると感じ絶対とは言いきれないが不安は無かつた。

西の城・・・ハラール城 【闇の十人・シグスレイ】 VS
オラル・キシア率いる精銳部隊100人
南の城・・・メルソファイア城 【闇の十人・アーミング】 VS
シン・妖魔人7人
北の城・・・カルガラ城
ラン・サルージ・ラン・マド
湖の城・・・ルメイロト城
ルード・妖魔人の鳥獣50人
森の城・・・リンシュン城 【闇の十人・ジン】 VS オラル・
キシア部隊+アルミアの軍隊1000人

東の城・・・ハデス城 【闇の十人・ハデス】 VS ジエ
ラ率いる全軍

山脈の城・・・ソダイ城 【闇の十人・未定】

松明の焚かれた広い草原のなかザルギスに乗り込むためジェラ、オラル、エドス等3人の前にルードシア軍、そしてアルミアの軍隊が集結していた。

さらにジェラが特別に造り上げた飛行能力を持つ妖魔人7人、そして妖魔人の鳥獣50人がいた。

すべての戦略の力ギを握っていたのは唯一ザルギスを知るジェラであり今回の総大将を務める。

草原の中に軍勢が列をなしている。

ジェラを中心に向かって左からスーラン・サルージ・ラン、マド。隣にはキシアが率いる100人の精銳部隊。

少し間隔をあけてエルード率いる妖魔人の鳥獣50人。

その隣にシンが隊長として率いる妖魔人7人。

さらに間隔をあけてアルミアの軍隊1000人が整列している。その1番前に小柄なシエルが鎧に隠れていた。

「ラン、ジェラ様の妖魔人・・・あたしあんなだつた?」マドは魔人よりも妖魔人に恐怖を感じていた。

「そうね・・・でもあんなに戦闘を意識した姿ではなかつたわ。マドは力・マ・キ・リだつたから」

「か・ま・切・りつて・・・」

ジェラは軍勢を前に声をあげた。

「よいな! この最初の攻撃にしきじれば我々に2度とチャンスは巡つて来ない!」

ジェラはオラルとキシア隊100人の精銳に令を発した。

それにこたえるように興奮を抑えつつキシアは1歩前に出た。

「はっ！ 我々ルードシア軍はこの日の為に全てを捧げてきました、必ず勝利を掴むことを約束します！」

キシアは力強く拳を胸に当てる。後ろに控えていた兵達も続いた。

ジェラはそれを見るとしつかり頷いた。

「ではこれよりザルギスへ乗り込む！ 用意はいいか！」

兵達の雄叫びが地響きとなり、遠くの森から一斉に鳥たちが飛び立ち月明りを遮った。

ザルギスの西にあるハラール城近くの砂漠地帯

乾燥した土の匂い。それ以外、匂いというものがなく、気温が下がり、風も静かにしている。大地が行く末を案じているかのようだ。

ジェラが3つの空間を同時に創り出すと黒い大地、そして黄色の月明りに虹色の波が加わった。

ジェラの術によりハラール城近くの砂漠に全軍を移し終えたジェラはすでに出陣の準備を終えているオラルとキシアの精銳部隊100人に近づいた。

「では、行つてくる」

「ああ、待つておるぞ」

オラルが先に駆けだすとキシアを先頭に精銳部隊が後に続いた。主従は互いに笑みを浮かべておりこの日をどれだけ待ちわびたことだろう。

「シン、くれぐれも慎重にな」

「はい、でも心配には及びません」シンは妖魔人7人を見て頷いた。

「我が同志たちよ、頼むぞ」妖魔人7人はジェラに頭を下げた。ジェラが空間に手を翳すと虹色の波の中から広大な岩山が現れシンを先頭に入つていった。

「そなた達・・・任せたぞ！」

「まかせてくだせえ！」

サルージが銃を高々と上げると手綱を引き空間に向かつた。スランとランは特に緊張した様子も無く軽く手を振つていた。

「ジェラ様・・・」

「期待しているぞ」

ランの頭に乗つっていたマドは大きな目にいっぱいの涙をためながらビシッと敬礼してみせた。

「はいっ！ 行つてまいります！」

「アルカ、リビンゾはなかなか頭の切れる奴だ、警戒を怠るなよ。あくまでエルードのサポートという事を忘れるな」

「心得ております」鳥獸の指揮官アルカはしつかり頷くと控えている50人もつづいた。

「だが、いざという時はアルカ、私にかまわざリビンゾを倒してくれ」エルードがアルカの肩に手を置いた。

それを見たジェラは頬をあげた。「エルード、そなたが倒せない敵なら全軍で引き上げてこい」

鳥獸達は唸りつつ引き攣つた笑顔を浮かべていた。

「そういうことに・・・」

虹色の空間が歪み、月明りを反射する湖が映し出されエルードとアルカは鳥獸を引き連れて空間に入つていった。

ジェラはそれぞれの部隊を送り出すと多少の疲れが出たのだろう、

肩で息をしている。それに気づいたエドスが近づいた。

「ジエラ・・・」

「気にするなエドス、オラル達の部隊が戻ってくるまで少し休む」

「それがいい・・・」

「なつ、なにを！？」

エドスは抵抗するジエラを抱えると砂山をあがつた。

「立派になりましたな・・・姫」

「言つな・・・」

ジエラは笑みを浮かべエドスをゴズいた。

2人はやがて訪れるであろう戦いをまえに安らぎを感じていた。

西の城ハラール城。闇の十人の一人【シグスレイ】VS オラル・キシア率いる精銳部隊100人

オラル、キシアを先頭に精銳部隊100人がハラール城を目指し駆けていく。砂漠が馬脚を吸収し臆することなく全力で駆ける。

オラル部隊はまずハラール城を落とし、再びジエラ率いるアルミニア軍に合流し森の城リンシュンへ向かう予定だ。なんとしてもリンシュン攻略が遅れる事だけは避けなければならない。

集合場所が敵のアジトという最悪のシナリオはジエラの頭の中にはこれっぽっちも無いことをオラルは理解していた。

「オラル殿、湖の一件では危ういところを救われました」キシアの眼差しは信頼に満ちている。

「いえ、あれは私では・・・」

その答えにキシアは王と同じ返事をしたが、信じるに値する戦いを目の前で見てきたキシアは今回オラルと組めたことがなにより嬉しく、また誇りであった。

「見えてきました」

白で統一された城は月明りを吸収し黄金色を放っている。中央の宮殿は月を目指す巻貝のようだ。それを囲う外壁は柔らかなハートを描き所々に窪みがある。全体に角は見当たらない。

「ジエラの言つていた通りだ」オラルは馬を止めると下から見上げ

る、それに部隊も続いた。

「ジェラ殿の言われた通り入り口が無いですね。シグスレイが認めた者以外は入れないということも頷けます」キシアは手を翳しながら見上げた。月明りの反射角度によつては直視できない兵もいた。

「急げ!」部隊は城の光を受けつつ北側を目指し再び駆けだした。

「恐らくあの小さな窪みですね・・・」

城の背後にあたる場所にジェラの指摘通りに小さな窪みが見えるとキシアは兵たちを鼓舞した。

「ここから先は何が起きるか分からぬ、みな心してかれ!」

『その窪みはカモフラージュされている』ジェラはそう言つていた。外からでは城の一部にしか見えないが手を入れるとたしかに壁は無く吸い込まれるようだ。おそるおそる中に入るとその部屋は横に伸びている。部隊を整列させることができる広さだ。

だが一番驚いたのは城の中からガラス越しのように外を見ることが出来るということだつた。ジェラはこのことには触れていない、という事は必然的にシグスレイは警戒していたのである。

「すべて見られているようですね・・・」

「そつらしい、だが魔人が1人も出てこないのはどういうことだ?」

「余裕でしようか、それとも何か罠を仕掛けているのか」

「余裕だろうな・・・」オラルは笑みを浮かべた。

キシアは城の外に40人の兵を残し中の部屋に入ると作戦通り兵を分けた。

「ではオラル殿、後で会いましょう」

「ああ、任せてくれ。必ず誘い出す」

部屋から出ると外壁の中の通路を右手側にオラルと兵20人が、左手側にキシアと兵40人がそれぞれ進んでいった。

オラルはジエラのいう最上階のシグスレイの館を目指した。

作戦ではキシアとの合流地である広間まで誘い出す役を買って出でいた。キシアと精銳部隊だけでは魔人相手に分が悪い、精銳部隊とはいえ生身の人間ではまともに太刀打ちできない。が、ジエラはそこにオラルという存在を確かめる意味であえて誘い出す役を押し付けた。オラルが直接シグスレイと当たれば良いと考えての事でもある。オラルは会議でキシアに『俺が誘い出す』と答えていたが、これはジエラが裏から手を回した結果だ。

「ほんとうにこの城には1人の魔人もいないのでしょうか？」オラル隊は1人の魔人に会うことも無く最上階に進んでいった。

「キシアも言っていたがシグスレイ自信が認めた者しか城には入れない」というのも分かる気がする」

「はい、ですが気配すら感じません。しかし我々が来たことは既に知っていると思いますが・・・」螺旋の階段を上りながらガラス越しに見える月を見上げた。

一方『宴の広間』と呼ばれている合流地にキシアの部隊は到着した。

「これは・・・」

真っ白なその広間は円形の造りをしている。12本の柱が外側に配置されていて、ここに氣づいたのは目が慣れてからのことであった。

「気に入つてもらえたかな？」

囁くような声が広がる。恐らく広間のどこにいても聞き取れるだろうその声にキシアは答えた。

「すばらしい造りだ、是非城の主にお会いしたい」キシア達は身構えつつ入り口を背に陣を組んだ。

すると奥の柱の一つが虹色を描き下から上へと舞いながら混ざり合うとカラフルな魔人が現れた。

「ようこそハラール城へ。まあ、呼んだ覚えは無いのだが……この城に入つて来られた、といふことはジニアの使いか？」スラリとした長身の魔人は尋ねた。

「使い、そういう事になるか……」キシアが答える。

「どうか、ではジエラはやはり人間だったのか。といふことは、そなたはここに何をしに来たのだ？」

「察しの通り、我々はそなたの首を頂きに参つた」キシアが剣を向けると兵たちも続いた。

「どうか」シグスレイは笑みを浮かべて言つた。「では、私の首を持つていぐがよい、取れるものならな」

時同じくオラル達は最上階のシグスレイの館と思われる場所にいた。

「オラル殿！　こちらにも誰もおりません！」

「こちらにも！」頂上付近の少ない部屋を確認した兵たちが見回りから戻ってきた。

「オラル殿、最初から隊長の部隊を狙っていたのでは！？」

オラルは奥歯を噛むと一つ息を吐いた。「急いで戻るぞ！」

オラルたちが宴の広間に近づくや入り口から虹色の光とともに風圧を受けた。

兵たちは一瞬怯んだがオラルが警戒しつつ部屋を覗いた。

白い部屋はすでに兵たちの彫刻で飾られ、キシアが魔人の手から落ちていくところだつた。

「一足遅かつたな、この者達はいざれ城の一部にしてやう。光栄に思つが良い」

「キシア・・・」オラルは1人部屋に入ると倒れている兵に触れた。「・・・・・酷いことを」

「酷いだと？ 勝手に私の城に入つて来たことは許されるのか？」

オラルは魔人に背を向け怯える兵達に告げた。

「残りの兵は急ぎ戻れ！ そしてジョラにこう伝えよ『予定通りに進め』分かつたな！」

「しかし！？」

「心配するな、さあ行け！」

オラルの怒りにも似た声を感じ取ると兵たちは言われるがまま成す術も無くその場を離れるしかなかつた。

「御武運を！」その場を足早に去つていく兵たちは理解していた。やはり魔人と戦うには何かしらの術を持ち合わせていなければ太刀打ちできない事を。

「予定通りとは？ そなた1人残つてどうしようというのだ？」

オラルは兵達が去つたのを確認すると一呼吸置いてから振り向いた。その表情はまるでこれから楽しいことが始まるかのようにシグスレイを覗き込んだ。

「奴に対抗できる能力かどうか『闇の十人』の力とやらを確かめたくてな、わざわざこうして機会を作つたという訳だ。それにこの姿・・・あまり長い期間解放しないと自分を失つてしまふからな」言いながら少しづつ黒い煙がオラルを囲い、やがて煙に覆われた・・・

黒い煙の中から人の様ではあるが魔人でも獣人でもない姿をとらえるとシグスレイは咄嗟に距離をとつた。

「どうした？ さあ、はじめよう」

「その声・・・あなたはもしや！？」

「氣にするな。さあシグスレイよ、その力見せてみろ」

「ハデス様・・・なぜですか！？ なぜ人間共と！？」

「それを知る必要はない」

「お待ちください！ このシグスレイ、『闇の十人』のなかでも常にハデス様の目となり影を務めて参りました。それは私が誰よりも力のあることをハデス様自身が認めていたからではないのでしょうか！？」

「その通りだシグスレイよ。だから今回私が直々にその力を見てやろうというのだ」

「いったい何のためにです！？ お答えください！」 シグスレイはめずらしく感情を露わにした。

シグスレイは冷静沈着が取り柄、ハデスの影を務めるほどの中恵にも富んでいる。

その魔人がここまで言うのだ、オラルは2人きりなのを確認するとシグスレイに歩み寄った。

「全ては奴を倒さんがため、10の結界発動石を操るには10人の選ばれた術が必要なのだ」

「10の結界発動石・・・ハデス様、奴とはー？」

オラルはそれに答えるように黒い煙からシグスレイに似せた分身を創り出すと分身は煙の尾を引きながらシグスレイを見定めるようにコンパスの円を描いた。

「すべてはこの者を倒す事ができたなら教えてやろう」

シグスレイはその者の力を計るように7色の光が体中を駆け巡った。そしていつもの冷静沈着なシグスレイがそこにいた。

「・・・承知いたしました。ではハデス様、私をその選ばれた者にお加えいただきましょう」

対峙する2人にオラルは令を発した。

先に仕掛けたのは黒のシグスレイであった。煙となり光を発するシグスレイを取り囮むと手足の自由を奪い、さらに黒蛇となつた体は白い体をギシギシと締め付ける。だがシグスレイは表情を変えていなかつた。

「さすがです、だが……」

シグスレイは手のひらを柱に向け光を発した。それは12本の柱を自在に飛び移り全てに光が灯るとシグスレイのもとに集まつた。

「ここは私の城、何人も私を倒せない！」

シグスレイは集まつた光を集約すると一気に解き放つた。

シグスレイは何事も無かつたかのように首を回した。

「ではハデス様、約束通り私を」と、そこまで言いかけたとき、にわかに柱が黒ずみはじめ先と同じに12本の柱を自在に飛び移り全てに黒い光が灯るとシグスレイに取り込まれ、抵抗する間もなく美白の魔人は侵された。

やがて全身が石化していくと同時にビシビシと音を立てながら崩れていった。

「やはりこの程度か……」オラルは人の姿に戻つた。

シグスレイの術により石化されていた兵たちはかけられていた術が解け徐々に人の姿をとりもどしていった。

「これはいつたい……」

「キシア、よく眠れたか？」

キシアは状況を飲み込めていなかつたが兵たちが集まるのを確認すると起き上がつた。

「オラル殿、シグスレイは？」

「あそこだ」視線の先に黒く碎けた石の塊があつた。

「少し時間がかかってしまった、残った兵はすでにジン・リヒトモハ
リン・シユンに向かっている。我々もあとを追うぞ！」

「はっ、しかし移動手段が・・・」

「心配するな、夜通し駆ければ間に合つだらう」その自信に満ちた
言葉にキシアはおおきく頷くと兵たちに声をかけた。

「皆の者、まだ戦いの機会は残っている！ 遅れをとるなー！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0434x/>

ルードシアの守り人～黒?～

2011年11月23日12時48分発行